

昭和六十一年三月
各務原市資料調査報告書第七号

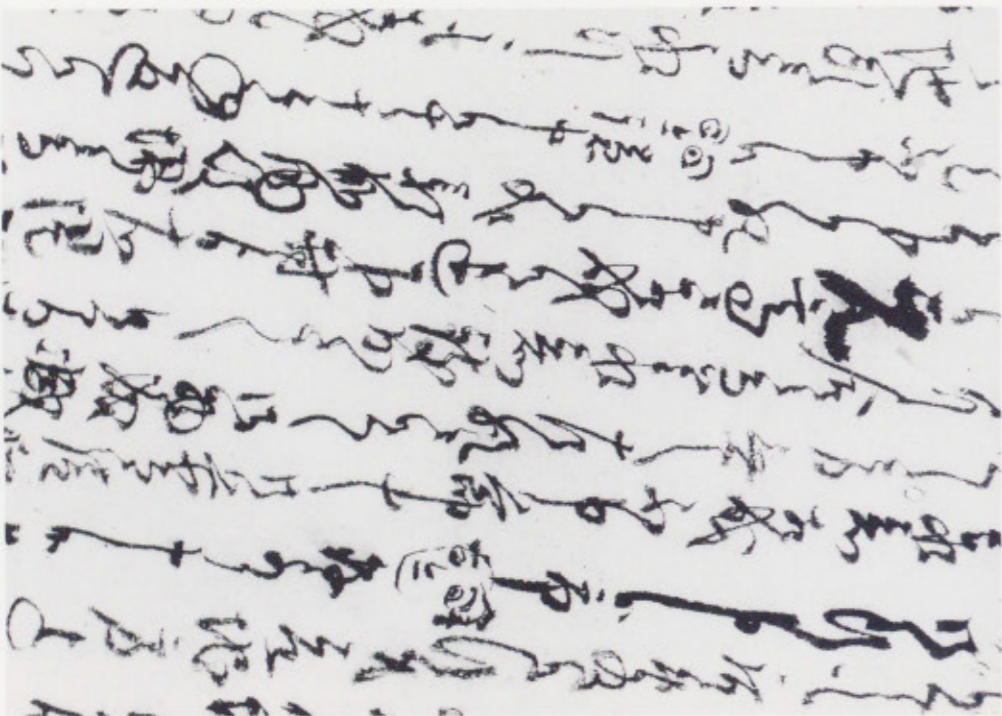
前渡坪内氏御用部屋記録二

各務原市教育委員会



前渡坪内氏御用部屋記録二

口絵1 前渡御用部屋記録(安政4年間5月4日参)



口絵2 前渡村近辺(「美濃国各務原近傍実測図」-明治14年 名古屋鎮台参謀部)



口絵3 祥雲寺霊泉院（東京都渋谷区） 前渡坪内氏6代貞行・7代定該の墓所あり。



口絵4 旗本新加納坪内氏の歴代墓所 妙高山東江寺（東京都渋谷区）

序

ここに「前渡坪内氏御用部屋記録二」が公刊できる運びとなったことを、大へん喜ばしく思います。

この御用部屋記録は、既刊分の(一)巻の解説で詳しく説明されているように、旗本新加納坪内家の内分分知家の一つ、前渡村坪内嘉兵衛家の御用部屋記録です。坪内嘉兵衛家のような内分分知の者は、当主である惣領家から内分の封禄知行を与えられ、部屋住みをしている庶子とはちがひ、内分分知ながら、その知行は幕府が公に認めるところであり、知行地を實際に領有する地頭でありながら、本家から別家旗本として独立することを許されていない、特殊な庶家としての位置づけを余儀なくされていたのです。これは全国でも坪内三内分家の外には例をみない武家であったのです。

このような特殊な武家の私設役所のひとつが前渡御用部屋であり、その記録は、近世の中期から幕末までの史料がほしいところにいるという点で、大へん貴重な史料といえるものです。また、この記録の中には、近世社会の特色を示すような内容がふんだんに盛り込まれています。そのような意味からも、本書は、『各務原市史』（史料編近世Ⅰ・Ⅱ巻）と共に、近世地域史研究の基礎資料の一つとして、広く活用していただくことを念願いたしております。

編集刊行にあたり、快くご理解いただきました史料所蔵者の方や、解説を担当していただいた先生方、また本書作成に助力した市史編集係の諸君に対し、ここに深甚なる感謝を申し上げる次第です。

昭和六十一年三月二十八日

各務原市教育長

水野定之

前渡坪内氏御用部屋記録二

目次

凡 序 口
例 絵

○ 天保二年(見出).....	一
○ 天保二年三月.....	二
○ 天保二年四月.....	六
○ 天保二年五月.....	六
○ 天保二年六月.....	九
○ 天保二年七月.....	〇
○ 天保二年八月.....	一
○ 天保二年九月.....	二
○ 天保二年十月.....	二
○ 天保二年十一月.....	三
○ 天保二年十二月.....	四
○ 天保三年(見出).....	五
○ 天保三年正月.....	六
○ 天保三年三月.....	六

○	天保	六年	五月	四三
○	天保	六年	六月	四四
○	天保	六年	閏七月	四六
○	天保	六年	七月	四七
○	天保	六年	八月	四七
○	天保	六年	九月	四九
○	天保	六年	十二月	五〇
○	天保	七年	(見出)	五四
○	天保	七年	正月	五五
○	天保	七年	二月	五五
○	天保	七年	五月	五六
○	天保	七年	六月	五八
○	天保	七年	七月	五九
○	天保	七年	八月	六〇
○	天保	七年	九月	六二
○	天保	七年	十月	六六
○	天保	七年	十一月	七〇
○	天保	七年	十二月	七一
○	天保	八年	(見出)	七二
○	天保	八年	正月	七三
○	天保	八年	二月	七五
○	天保	八年	三月	七八

○	天保	三年	四月	一六
○	天保	三年	五月	一七
○	天保	三年	七月	一八
○	天保	三年	八月	一八
○	天保	三年	九月	一九
○	天保	三年	十一月	二一
○	天保	三年	十二月	二二
○	天保	四年	(見出)	二三
○	天保	四年	三月	二三
○	天保	四年	八月	二四
○	天保	四年	十一月	二六
○	天保	五年	(見出)	二八
○	天保	五年	四月	三〇
○	天保	五年	六月	三〇
○	天保	五年	七月	三一
○	天保	五年	十一月	三一
○	天保	五年	十二月	三二
○	天保	六年	(見出)	三四
○	天保	六年	正月	三六
○	天保	六年	二月	三八
○	天保	六年	三月	三八
○	天保	六年	四月	四〇

○ 天保 八年 四月	七八
○ 天保 八年 六月	八〇
○ 天保 八年 七月	八三
○ 天保 八年 八月	八五
○ 天保 八年十一月	八七
○ 天保 九年(見出)	八八
○ 天保 九年 正月	八九
○ 天保 九年 三月	八九
○ 天保 九年 四月	九二
○ 天保 九年 五月	九二
○ 天保 九年 六月	九四
○ 天保 九年 七月	九五
○ 天保 九年 九月	九六
○ 天保 九年 十月	九七
○ 天保 十年(見出)	九八
○ 天保 十年 正月	九九
○ 天保 十年 二月	九九
○ 天保 十年 三月	一〇〇
○ 天保 十年 四月	一〇一
○ 天保 十年 八月	一〇三
○ 天保 十年 十月	一〇五
○ 天保 十年十二月	一〇八

○ 天保 十一年(見出)	一〇九
○ 天保 十一年 二月	一一〇
○ 天保 十一年 三月	一一一
○ 天保 十一年 四月	一一二
○ 天保 十一年 五月	一一三
○ 天保 十一年 六月	一一三
○ 天保 十一年 七月	一一四
○ 天保 十一年 八月	一一五
○ 天保 十一年 九月	一一六
○ 天保 十一年 十月	一一八
○ 天保 十一年十一月	一一一
○ 天保 十一年十二月	一一一
○ 天保 十二年(見出)	一一二
○ 天保 十二年 正月	一一二
○ 天保 十二年閏正月	一一三
○ 天保 十二年 二月	一一六
○ 天保 十二年 三月	一二八
○ 天保 十二年 四月	一二九
○ 天保 十二年 九月	一三一
○ 天保 十二年 十月	一三一
○ 天保 十二年十一月	一三七
○ 天保 十四年(見出)	一四三

○ 天保十四年 二月	一四三
○ 天保十四年 三月	一四四
○ 天保十四年 八月	一四五
○ 天保十四年 九月	一四五
○ 天保十四年閏九月	一四七
○ 天保十四年 十月	一四九
○ 天保十四年十一月	一四九
○ 天保十五年(見出)	一五一
○ 天保十五年 正月	一五一
○ 天保十五年 四月	一五三
○ 天保十五年 五月	一五六
○ 天保十五年 六月	一五七
○ 天保十五年 七月	一五七
○ 天保十五年 八月	一五八
○ 天保十五年 九月	一五九
○ 天保十五年十一月	一五九
○ 天保十五年十二月	一五九
○ 弘化 二年(見出)	一六〇
○ 弘化 二年 □月	一六〇
○ 弘化 二年 三月	一六二
○ 弘化 二年 七月	一六三
○ 弘化 二年 十月	一六四

○ 弘化 二年十一月	一六四
○ 弘化 二年十二月	一六五
○ 弘化 三年(見出)	一六六
○ 弘化 三年 三月	一六七
○ 弘化 三年 四月	一六八
○ 弘化 三年 五月	一七一
○ 弘化 三年 六月	一七一
○ 弘化 三年十一月	一七二
○ 弘化 四年(見出)	一七二
○ 弘化 四年 二月	一七三
○ 弘化 四年 四月	一七四
○ 弘化 四年十一月	一七四
○ 弘化 四年十二月	一七七
○ 弘化 五年(見出)	一七九
○ 弘化 五年 正月	一七九
○ 弘化 五年 二月	一八〇
○ 嘉永 元年 六月	一八一
○ 嘉永 元年 九月	一八三
○ 嘉永 元年 十月	一八四
○ 嘉永 元年十一月	一八五
○ 安政 二年(見出)	一八七
○ 安政 二年 正月	一八八

○ 慶応 四年十一月……………二四五
○ 慶応 四年十二月……………二四七

編集後記

干支早見表

凡 例

- 一 本報告書は、旗本坪内家の内分^{うちわけ}知である、坪内嘉兵衛家の御用部屋記録を活字化したものである。
- 一 御用部屋記録のうち、天保二年（一八三一）から慶応四年（一八六八）までの二十一冊から抄出して収録した。
- 一 原史料（大半）の所蔵者は前渡西町居住の富樫心行氏である。慶応四年の記録のみ永井好之氏蔵のもの。富樫家は、旧姓山本氏を名乗り、坪内嘉兵衛家の家老を務めた家であり、明治初期、主家の離村時に記録を引き継いだ。永井家は前渡村の草分け百姓で、幕末期には弘衛が用人となった。
- 一 収録にあたっては、できるだけ原本の体裁を尊重するよう努めたが、必要に応じて（ ）書で注釈をつけた。また、省略箇所は（前略）・（中略）・（後略）とせず一行空きとした。
- 一 漢字はできるだけ常用漢字を用い、古体・異体・略体文字も原則として現行正字体に改めた。
- 一 助詞は原則として原本に従ったが、万葉仮名はひらがなに統一した。但し「而已」は「のみ」とせず原本のままとした。
- 一 虫損等により判読が困難な場合は、その字数を□で示し、字数の推定が不可能な場合は□ □で示した。
- 一 読みやすくするため、適宜本文中に句読点を付した。句読点は「、」に統一した。
- 一 史料の抄出と判読は、豊田工業高等専門学校助教授篠田壽夫氏にお願いした。
- 一 本報告書の校正補助等は、市史編集係長齋藤文彦、同係員後藤光伸・上村恵宏、同嘱託増田五郎・畑佐かやの・星野文子が担当した。

(表紙)

天保二辛卯記録

御用部屋

- 一年号改元御祝書・御連名同御返翰
- 御改名御願書・同御状御両家様より御添翰
- 大釜中ノ極伏替一件
- 要敷風聞致候ニ付、吉祥院へ火防御祈禱被仰付候一件
- 御本家山城守様御卒去一件并御葬式・御法事留并御状下書留
- 木曾河堤石田村急破ニ付、御陣へ呼寄州右衛門演舌一件
- 宗旨証文御改御延引四月十三日ニ相成候一件并当年より宗文帳
- 庄右衛門村方百姓並ニ心得候様孫市へ申聞之事
- 銖次郎様御養子御願一件
- 庄右衛門重科被仰付候趣河田喜平太へ御切紙
- 五月五日奥様御安産一件
- 栄吉様御家督被為濟候為御知一件
- 公儀御尋人御触書留
- 源右衛門様御荷物京都へ送り一件
- 今尾州右衛門病死一件
- 江戸飛脚取宛一件
- 寛政八辰年御本家様御家督之節御祝書写三井留ノ写シ
- 栄吉様御家督御祝書飛脚一件

- 殿様御代々之御名嘉兵衛様と御改名濟一件
- 上臈様御誕生ニ付、江戸表河田より御祝書留
- 六月十日定式小普請金催促一件
- 村方小株之者死去之節改紋之上下着ニ付届出ル一件
- 孫市・勘六平百姓ニ被仰付候一件
- 村方和熟理解常貞寺より被仰聞一件
- 御家督御祝書御認方懸合一件
- 御改名御礼状問違一件
- 例祭八月十二日踊興行願一件
- 大山渡し船新艘御祝願来
- 百姓勘六・孫市兩人祭礼当日社参先規之通一日帯刀御免
- 例祭薬師前七株本家之者稽固出席当年御差留之事
- 御本家仲様御卒去八月十日右為御知より御悔一件
- 加納安池様御婚姻御祝使御進物留
- 公儀御嫁入有君様御通行一件
- 安藤村馬守様御奏者番被仰付為御知御状
- 恒例宗旨御証文御差出候案
- 古田安助并小島市兵衛御抱為知廻章留
- 銖次郎様御養子御願濟御礼書
- 御家督御祝儀御文言一件古田安助へ御礼御状留・同河田氏より御返書
- 公儀御触書分銅之事
- 平島様御附女中江戸下し一件

- 一 富弥様少林寺へ御引移ニ付一件
- 一 七夕譽中榮吉様より御返翰留
- 一 山東方御用捨米并小島野方改御年貢一件
- 一 常貞寺惠馳飛檜繼目願一件
- 一 神明・弁天両御社御再建

一 大釜中ノ種伏替一件

昨午下ノ種伏替中ニ堤抜込候ニ付、見分候処何れ朽候様子ニ付、当年堀割之上、種之朽候様体ニ随ひ伏替之積リニ申置候処、当二月十六日堀割方入札ニ致し候処、松本村へ落札、銀五拾五匁ニて古種揚迄、若堀口抜込候へは幾偏ニてもさらへ揚候筈、尤渡しニ候へは出役も無之、村役計見廻り之筈、同廿三日堀割出来候間、昨廿四日新加納よりも御出役候間、立会見分之旨村役共より申出ル、則廿四日出役祐左衛門、新加納より河田唯右衛門・今尾半内、松本村幸右衛門立会、種管朽候ニ付、新種渡し方七千石入札之筈相談ニて、庄屋喜左衛門ニて昼支度、引取、同廿八日入札之処、下中屋村大工与右衛門落札、金四両三分五匁八分六厘

種便ニ付大延引ニ相成、四月七日板見分、新加納より河田峯一郎、松本より菊谷幸右衛門、此方より山本祐左衛門立会、見分大釜ニて相濟、昼支度喜左衛門方、伏込初日十日より相懸り候筈ニて、出役も新加納八十日ニ宗門改出役ニ相当り候間、此方より出候様相頼ニ付、十日出役伊藤忠右衛門、人足三拾人出ル、

統不洩様可申触候、以上

三月三日

御役所〇

三組庄屋へ

尚以、火之元用心別て肝要之旨、相心得可申触様念入申遣候

以切紙申達候、当月三日相触候御停止之日限之義、寺院并庄屋鐘大鞍^(太鞍)之義は当九日限、同十七日よりは普請も不苦候、其外之義は来四月廿三日迄物静ニ相慎可申候、此旨一統不洩様可申触候、以上

三月六日

御役所〇

三組庄屋へ

尚以、本文之趣寺院・御家来分之銘々えは別段不相触候間、無間違様可申達候、且心得違之者も有之由相聞へ候間、為念左ニ相記申達置候

一 わら打 一 わた打 一 搦物 一 はた織
右等之義は惣て不苦候間、相心得可申候、以上

三月十七日三井より相達ス

以手紙致啓上候、然は木曾河通石田村地内下中屋村西方堤通之内、追々川欠出来、去寅年国役御普請之節、堤根敷より川面水行いたし候間、漸五六間ならてハ無之処、当春来出水之度々欠込、昨日出水ニて根敷迄欠寄、面腹流失ニ付、今日見分ニ罷出候処、可成水除普請取計ひ候ても余程之金高相成申候、左候とて又候

古樋上・新種伏込天氣六ヶ敷振分故、増出し老人半勤申聞、上方ニて大略遠程ニ及迄築上ル、翌日松本幸右衛門、夫より順番ニ出役出来、同月廿三日、新加納より出役兩人出張、尤上戸村普請所御見分兼、表市郎・半内兩人也、惣人足ハ高七百八人余相懸り、至て大分相懸り候ニ付、殊之外機嫌悪敷由、此度ハ伏込之外、東之方平水落築留、南之方水落掘下ヶ迄之惣人数也、時節も追々急ヶ敷時分故、日々増出し候故、右之通人夫多ニ相成候也、同月晦日種代金半当分金貳両壹分三朱、大工与右衛門へ相渡ス、尤河田唯右衛門殿より手紙添、割合書付持来ニ付、則相渡ス、請取書付取

三月三日申之刻比、新加納御陣屋より御直手紙と当役当式通持来、文面左ニ

以剪紙啓上仕候、然は山城守殿旧臘下旬より御病氣御座候処、御養生不相叶二月廿六日午中刻被致死去候旨、申来候、此段為御承知申上度、如斯御座候、以上

三月三日

今尾州右衛門

坪 李太郎様

右御返書相当御文言御承知之旨相認并当役返書共使へ相渡ス、即刻村方穩便触廻文認申触

以剪紙申達候、然は山城守様御儀去月廿六日午刻御逝去被成候ニ付、普請・鳴物・音曲・殺生・法談・説法・其外都て高声成義相慎可申候、尤日限之義は追て可及沙汰間、其旨心得、一

国役御普請相願候とて丈夫之御普請は出来不申、其上多分之并金相立、御同然迷惑いたし候間、無余義御自普請取計可申より

外有之間敷奉存候、右之趣被仰上、否思召両三日中ニ被仰聞候様致度奉存候、此段得御意度如此御座候、以上

三月十六日

今尾州右衛門

山本祐左衛門様

松原牧右衛門様

加藤辰右衛門様

猶以、堤腹迄欠寄候ニ付、水除之義は格別腹欠流候、御手当御普請ハ早々取掛可申積御座候之共、今日ニては水高ク石積不出来候之共、急破之義ニ付難捨置候間、本文得御意候、否両三日中ニ被仰聞候様致度奉存候、以上

以手紙……然ハ新加納御陣屋より廻文順達いたし候間、御落手之上御披見可被下候、右は木曾川通石田村堤之内急破出来ニ付、御自普請之相談申参り候、依之昨日平島表より参会いたし相談可申触ニ申来候之共、無余義急破、何れ夫レ成ニ可相成義ニも不被存候、付ては今尾氏より申参り候通、御自普請之義申達候処、承知被致候間、宜取計被下候様相答遣し候ては如何哉、御勤考可被下候、御同様ニ被思召候ハ、否返書之義当方ニて相調、可差遣奉存候、御報被仰聞可被下候、御出会不申御相談相濟度、如此御座候、何分御勤考可被下候、草々以上

卯三月十七日

加藤辰右衛門

封上ニ山本祐左衛門様

右之通申来ニ付、即刻相伺、御同様御承知之旨、返書連名認方三井表へ相頼申遣ス

一 同三月十八日火之元悪敷風聞有之ニ付、吉祥院呼、火防御祈禱被仰付、於御玄關執行、御守札四品献、御居間・御奥之間御神棚と両竈、四所ニ張、誦経済、茶漬被下、為御初穂青銅式拾疋被下、尤此節去より山東儀兵衛・八右衛門兩人屋舖内ニ相当り火柱建候噂有之ニ付、内野は勿論本郷方ニても火防御祈禱籠り秋葉宮へ参詣等致ス由申ニ付、御報并御知行所安全之御祈禱被仰付候也

三月廿日三井より廻達、即三井へ返却致ス

以手紙致啓上候、暖氣御座候之共弥御安全被成御座、珍重奉存候、然ハ明廿一日巳之刻御談申度義御座候間、罷出可被成候旨得御意度、如此御座候、以上

三月廿日

河田唯右衛門

山本祐左衛門様

松原牧右衛門様

加藤辰右衛門様

此週文三井より廻達、尤平島ハ未相済ニ付、三井へ返却候様と申来ニ付、則相返ス、明日ハ三井へ向同道ニて、少林寺出會、平島は明日御法事故、松原と御法事前ニ出會相済度様、加藤より申越ニ付、同意可然旨申遣ス、同廿一日忠右衛門罷出、尤三井へ向参り、辰右衛門同道ニて少林寺へ行、平島様御法事ニ付

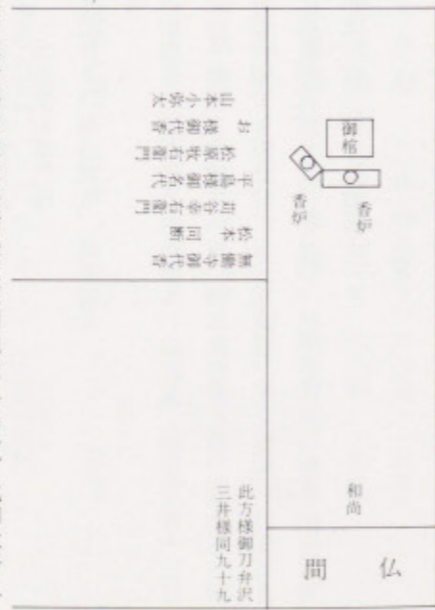
ハ難相成、此度御嫁入御通行之御掃除相用候と申も不当之義ニ候之は、来廿四日御出迎、直ニ如先例少林寺ニて、御葬式之御法廷御執行之積ニ取計申候、付ては先例は、六軒迄御三所様御出迎御例ニ候処、勝之丞奉守護候て六軒茶屋迄運々御他領之持出、御迎申と申事も無之義ニ奉存候之は、御領境と申ハ各務野ニ候之共、当村之入口稻荷橋迄御三所様御出迎、任御例御出張被為在候様致度、尤最早御遺骨ハ兼て御着被為在候事故、雨中ニも候之は少林寺ニおゐても甚差支、迷惑ニ候之は、当日若雨天なれハ廿五日、廿五日も雨天なれハ何れ快晴次第御出迎之様被成度、且又先例御三所様共御供方迄御弁当為御持之由ニ候処、此度ハ於当方供方へハ茶漬取計可申間、左様御承知候旨申達也

同廿五日朝三井表より使来、弥今日御葬式御執行有之旨尋遣し候ニ付、申参り候間、曇り居候之共早々御出馬有之候様と申来、漸九ツ時分御供撞御出馬也、御行列左ニ

- 御徒士栄藏
- 御徒士佐右衛門
- 御長柄
- 御草履取
- 兵四郎
- 御鎗
- 御籠
- 合羽籠
- 弁次
- 御箱
- 竹右衛門
- 御箱

牧右衛門會合、同道ニて御陣屋へ出候処、今尾州右衛門申達、今日御招申義、先差当り候義は木曾河通り堤石田村急破一件、一昨十八日笠松御役所へ申出候始末、全普請願ニは無之、先前より之普請手續キ、此度急破昨年因役御普請有之候之共指て丈夫之普請ニも無之処、只今之姿ニてハ逆も可持堪様子無之、左候時は水下之村々、御領所始御他領村々案内難決ニも可及間、右心得之為相触為知も可遺候之共、当陣屋元よりハ行届兼候之は、御役所より御触有之様致度旨申演候処、元ノ星野 上より、何分堤方之者共差出可申様との義ニて、引取候之共、難打捨置、先比御達し申候通、御自普請手当ハ仕候之共、中々以安心ニ至程之普請ハ難行届、当分之手当致し候之共、持堪候義ハ無之義御座候間、第一平島様ニは別て御覚悟被遊候様致度、此段得貴意置度、右之段ハ書面を以ハ難行ニ付、乍序御咄申候

一 先今日御招申義ハ、第一此度見桃院様御遺骨御着ニ付、先例御三所様六軒迄御出迎之御座候之共、此度ハ用書延着ニ付手苦不行届、無抱御遺骨は御迎取、旅中之姿を以少林寺へ預置申候、折節堤急破・打続候出水・日々之出役、旁大取込ニも有之、第一御遺骨御葬式之義と申は旧例ニは無之、旧例之義は御遺骨御遺髪之内御着有之時ハ、於少林寺御法事執行有之義ニ候処、近例御葬式之姿ニ相成候之は、早速御棺其外一式之拵不行、漸今日迄ニ右手当相整候之共、今明之処水戸様へ御嫁入之御姫宮様御通行ニ付往還差支ニ相成候間、今明之処ハ難取計、然ニ御一世一度御遺骨之御国入之事ニ候之は、路次御馳走も不申付て



御三所様御休所梅村屋仁兵衛登支度御馳走へ出ル、尤御休所へ御着之所、今尾州右衛門殿御挨拶申上、御両所様御揃ニ候之は陣屋へ御届ニハ不及、御休足被遊候之は御案内可申旨申、御先へ村東稻荷橋之北之方ニ御幕杯廻し御遺骨之御休所備有之、右之所迄御出馬被遊候処、纏て御輿出御之節御下馬被遊、御目礼被成、直ニ御先之此方様より御行列先件之通、次ニ三井様、夫より御遺骨御輿・御葬式之役僧・旗・燈籠・供物等御行列也、跡ニ御供之面々、其跡ニ御分地方御名代、其跡ニ平島様御名代也、少林寺ニてハ玄關より御刀持御着座之跡ニ御付申、御焼香案内納所廻船申上ル、尤先例之通別香炉也、別香炉御焼香順ハ最初此方様、次ニ三井様、次ニ平島様御代香、次ニ当奥様御代香也、御香奠は御三所様は、先例之通金式百疋白木台ニ載、下ケ札御名認奉書ニツ折ニ付ル、奥様御香奠白銀苞包杉原ニ包、

銀代式十疋、下札奥様御名認

一 梅村ニテ御供方支度ハ、御葬式相濟、御前御休足少林寺書院ニテ御持參之御弁當御遣被遊、小弥太御給仕仕ル、梅村ヘ一統候處御侍分其外之無差別、同様之取計ニテ、汁とふ、平ニ〇飛龍頭一、香之物計也、御代香牧右衛門も同様之由也

一 少林寺御着之節、門前南之方ニ御札番所出し足輕兩人居候處、此方様御出ニ下座平伏仕ル

一 御帰リ之節、少林寺玄關敷台ヘ河田唯右衛門平伏、御暇申上ル、夫より如初御供揃ニテ御帰リ、往還通り御帰館申之半刻

一 同廿六日江戸表ヘ御出状、小弥太持參仕ル、尤御文面先例之通、三井様ニ留有写、寛政八辰年顯徳院様御卒去之写也、其節此方様は殿様江戸ニ被為入候ニ付、御留不見、左之通

三月廿六日 坪内奎太郎 定昌(花押)

三月晦日付四月朔日到来

一 以手紙致啓上候、然は先達テ及御懸合候石田村堤通水破防方御普請、当月十七日以来引続籠棒・猪子等御手当取計、不少金高ニ及候之共、其後出水之度々致流失、右御普請相見ヘ不申、然處水下御領私領村々より御手厚之御普請相願、其上笠松御代官

催之御容体ニ御座候由、一向御沙汰ハ無御座候處、今晚寅ノ刻頃竜見呼之義被仰出、りよも上り候様之御沙汰ニ付、則呼寄、祐左衛門ヘも申遣候處、即刻上ル、新加納芦庵ヘ申遣候、尚又御取揚婆々加納ニテ御頼置ニ付、迎駕籠之用意も兼テ人足迄申付置候之は、早速も差遣し可申義評儀之中、早御安産之旨申出ル、誠ニ御安産御大悦之御事、右故加納之沙汰相止、右之旨永田織衛様より御世話之義故、為御知旁先方ヘ断之挨拶被成候様御頼申遣ス、安池様も同様為御知手紙、御侍中迄忠右衛門より申上遣ス、御両家様ヘ為御知、且御陣屋ヘ御届書御差出、小弥太持參、右等文面左ニ留置

御届之覚 五月五日 坪内奎太郎

一 私妻今晚卯上刻出産、女子出生仕候、依之来十一日迄産穢引籠申候、此段御届申上候、以上

宛なし、奉書半切ニ認折懸、上ニ御届書、下ニ御名

同五月十一日御枕下、御内祝御赤飯被遣方凡六十軒、糯米玄米四斗三升、此白三斗七升五合有、交米老斗三升、都五斗余、赤小豆七升

鳥様 五常貞寺一升 三弁 次巻升
久昌寺二 三弘之助七尺
五安池様 五吉祥院守札 三孫 市巻升

所よりハ、御自力御手当ニ難被及候ハ、国役御普請御願之方ニ可有御座旨、再庇掛合有之候處、石田村之義は右場所ニ不限、都て去寅年国役普請大破或は流失、迎も此上容易之金高ニテは防方出来不申、尤国役相願、御聞濟御普請被仰付候共、猶亦多分之弁金可相立義ハ眼前ニ候間、不好義ニ候之共、前顯之振合故無換、国役御普請御願可被成より外有之間敷旨、御知行一同御支配下村々共呼出し、利解申聞候處、無余儀国役普請奉願候段申立候間、右一件用書取調、明朝日出を以江戸表ヘ申立候間、此段御承知宜御達被成候様奉存候、右得御意度如此御座候、以上

三月晦日 今尾州右衛門

山本祐左衛門様 松原牧右衛門様 加藤辰右衛門様

右之通り三井より廻達請取、返書遣ス

四月十三日

一 宗門御改出役忠右衛門常貞寺ヘ出ル、供市藏、例年三月十三日之処、当年ハ格別之穩便中ニ付、御本家方御延引、当日ニ相成、三井様御領分も御同様十日ニ相成候、尤平島様ニは先月八日例年之通被相濟候之共、此方様ニは御本家領ニ御唯被成、御延引ニ相成、右ニ付今日相濟

一 五月五日奥様御安産、御女子様御誕生、尤昨四日夜より少々御

五山中様 〇桃春院二 三勤 六巻升
五矢島様 〇妙智庵一升 三弥 作巻升
五永田様 三三千代 三竹右衛門巻升
〇少林寺 五おつ 三半左衛門巻升
五御陣屋 三おるん 三作右衛門巻升
三おしゆん巻升 三藤右衛門巻升
三萬 藏巻升
三幾右衛門
五祐左衛門巻升
五忠右衛門巻升
三同所腰抱
三新左衛門
三喜左衛門
三仙右衛門
三重 吉 二友 藏
三金右衛門 二市 藏
三与 平 二忠 藏
三新左衛門



(原文五段組)

三三
と
三三
の銀七紙

一筆致啓上候、向譽之節御座候之共、其御許様被為撞益御機嫌克被為成御座、目出度御儀思召候、然は当奥様今日御枕下ケ、御内祝御赤飯一重・鯛相添被進之候間、可然御取繕御披露可被下候、此段御前様迄自拙者宜得貴意旨被仰付、如斯御座候、恐惶謹言

三井様へハ、被遊奥方枕下ケ 相原ニテ

内祝被申付と認 松原一様 名乗

右御両家様并加納様へも右ニ准シ 山本一様

相認、尤半切也、結ハ御両家様計

一 御懷妊御帶御祝之節ハ、村方取揚婆々りよへ被仰付、御祝御儀式被納候之共、在物ニテ上々様方之義は不存者故、兼て加納ニテ御頼置、御世話水田織衛様より、八幡町安と申婆々ニ御腰抱相添参り候筈、御催有之節ハ迎駕籠式丁差遣し可申筈ニ引合、人足も御屋鋪辺ニテ六人之役申付置候処、御産御催五日寅ノ刻頃より被仰出ニテ、竜見・りよ呼寄候処、芦庵へハ呼人差出し

供十疋ニ候へ共、此度之義ハ御先格之外之義故ニ付、出格之御取計方被仰付如此ニ候也、牧右衛門自分酒壺升切手ニテ献上

五月廿一日昨夜死去、明廿二日葬式四ツ時

一 今尾州右衛門殿病死為知、河田唯右衛門殿より祐左衛門宅迄手紙を以申来ニ付、三井加藤へ相談申遣ス、先周右衛門死去之節ハ御使者被下候之共、是ハ御手本も差上ケ候之は、格外之義と日記ニも留有之、勿論野迄も出候之は、道具箱・若党・草履取、三井加藤同様、平島より御指出し無之と留有之、此度之義は御用人ニテ重役之事ニ候之は、旁先例之取計方も無之ニ付、相談申遣ス処、三井より平島へも相談申、牧右衛門より若党老人連出候様、何れ少林寺ニテ出会之上、野迄も出候歟、悔申上置引取歟、御使者自分兼勤之積リニ申越、尤辰右衛門ハ若党・草履之外ニ、箱持老人も連方可然様申越ス、先州右衛門之節文化七午三月之事ニ相覚へ候之共、付落歟日記ニ不分明申来ル、依之同廿二日四ツ時祐左衛門罷出ル、供若党・草履、万歳、市藏、少林寺出会ニテ三人同伴、御悔御口上申置、兼自分悔も申置ニテ直ニ引取、辰右衛門ハ自分野迄も見送り候様子ニテ跡ニ残り、チヤ屋清右衛門方ニ居残り候由

一 御本家様御家督被為済候ニ付、御祝詞御状御飛脚之者、三井村仙右衛門と申者ニ治定、尤平島ニテ申付有之筈之処、間違此方へ頼、内々心当申置候者有之旨も相囁置候ニ付、牧右衛門より頼越候ニ付、丈助へ申付置候処、右三井村仙右衛門義、俄

候之共、加納へ迎之義不被仰付内、早御平産被為在ニ付、りよニテ御済也、然共一旦御頼有之事ニも候之は、右体之職分之者故、御挨拶ハ不被成てハ不成義ニ被思召、織衛様へも御相談、文談ニテ忠右衛門より申上遣し、御七夜御祝之節為御祝儀、金式朱ニ赤飯老重・鯛五、腰抱婆々金壺朱と老重・する三枚被下候処、不存寄難有仕合之旨、厚口上ニテ御礼申越、早速差上り御礼可申之筈ニ御座候之共、老衰之者故御用捨奉願度、何れ永田様迄ハ差上り、御礼御取成奉願度旨申越ス

一 りよ婆々へ為御祝儀金百疋ニ被下置候也、御先例之節被下置候之共、此節ハリよ至て老衰も致し、待遠ニも可思と被仰、御七夜御祝之当日ニ被下置候也、尤御七夜翌日十二日朝迄居申候

一 上萬様御乳付之義は、和吉妻しゆん 殿様御誕生之節御乳差上候御吉例ニ御准被成、同人娘同所弥兵衛娘ニ被 仰付、御誕生より五日目、同九日吉辰ニ付、始て御乳付ニ差上り申、しゆん連上り申候也、五才ニ相成男子も連来ル、日々泊り居、御乳差上ル

一 同十一日御産髪刺、忠右衛門へ被 仰付、御乳御抱申膝之下ニ馬之古くつと小刀を敷、奉抱

一 平島様より御産着御帷子一重、御紋付ニ紅絞也、御使者牧右衛門、供老人、尤別段御産夜御見廻として御使被進候筈之処、兼略之断ニテ御菓子袋式ツ御到来、御局お幾勢より文来、早速御見廻可申上筈之処、金三郎様之御機嫌六ヶ敷被為在候趣ニテ断也、牧右衛門へ金壺朱、供へ拾疋被下、尤御先例ハ半紙老束ニ

ニ罷下り度用向出来候由ニ付、達て相願候ニ付、丈助相止申解、同人へ申付ル、同人難有旨礼申出ル、辰右衛門よりも同様、厚礼申来、且先年寛政八年先見桃院様御家督之節ハ、此方様御在府中故、御祝詞御状并御飛脚一件御先格無ニ付、写相頼置候処、今日出来左ニ

六月十一日早朝申来

以手紙致啓上候、向譽之節御座候之共、弥御安全被成御勤珍重奉存候、然は当卯六月十日定式御差出有之小普請金早々御差出候様、得御意度如此御座候、以上

六月十一日

河田唯右衛門

山本祐左衛門様

右之通申来、全体当年ハ御代替り御無役中、御役金助之分減方有之筈、其上定例前々日ニも三連宛ニテ、右金子御差出し案内廻文相廻り候例ニ候之は、昨日御見合セニテ御差出無之処、今日御代香少林寺行兼、御尋合旁御差出も可被成之様思召之処へ使来候、御両家よりハ御差出之趣ニ断申候、依之祐左衛門持参、右等旨御尋合

一筆致啓上候、然は今般栄吉殿家督無滞相済候、為御嘉儀飛脚を以御書状・肴料被遣之、則着之上差出候処、先代山城守殿存命中御差出之御文面、益御機嫌能之御認、名前之儀は片苗様之字御認来有之候、然は今度被遣候御書状面、御籠略之御認方ニ

被存候、榮吉殿部屋住中被遺候御書状之片苗様之字御認被遺候、
部屋住ニても家督ニても、右御差別無御座候御心得ニ候哉、代
替ニ付御手前様へ御存寄を以、今度御略被成候哉、又は書方之
者心得違ニても御座候哉之段、榮吉殿被致承知度、此段可得御
意旨被申付如斯御座候、恐惶謹言

六月廿二日

河田喜平太

坪内嘉兵衛様

猶々、本文之趣、若書方間違筋ニも御座候ハ、先代山城守殿
之御指出之御振合ニ御認直、早速御差出可被成候、先便之御書
状と引替候様取計可申哉ニも存候、右否被仰越候迄、飛脚之者
留被置候間、左様御承知可被成候、以上

一筆致啓上候、然は今般榮吉殿御家督相濟候為御嘉儀、拙者方
之被遺候御書状面、是迄覺不申御龜文之至、元は榮吉殿先祖之
子供衆之御家筋御座候之共、享保年中、公辺之御出願之節被仰
渡候御書付ニ、家来同前と被仰渡候之は、拙者共御同様之処、
近頃覺之不申御龜文は、今度被仰合候て之事ニも御座候哉、前々
より各様義は江戸家老同様之趣申送りも御座候之共、少々は文
面ニも心附来申候、今度之御文通是迄ニ無之御龜文ニ付、一応
御内存之処御問合セ申候、御手前様より之御書状ニ准し及御答
候之は、龜文ニも相成候間、若哉書方認違ニも候哉、一応及御
内問合候、否早速被仰聞候様奉待候、恐惶謹言

候通り御座候へは、何分可然御取成を以、不際立無滞相濟候様、
厚御執成之程奉頼候、右御答旁御頼得貴意度如此御座候、恐惶謹
言

七月六日

坪内嘉兵衛

河田喜平太様

有君様御通行八月晦日也、当村人足八拾六人ニ馬七疋、尤或十人
ニ老人ツ、小使添、馬ハ老疋ニ老人ツ、添人有之、廿八七ツ時
着揃、加納宿御泊リニて人馬相調置、廿九日夜同駅御止宿、晦
日御通鶴沼宿御昼、大田宿御泊リ迄持通し相勤候答、三日相掛
り難決之旨申歎、御手当被下置候様追々相願、小前惣老人兩ツ、
三組村役不殘願出ニ付、全体当村之義先年より大通之節は、宮
様ハ格別、紀州様御通行ニも御手当相願、其節々被下置候例も
有之候之共、明和年中より伝馬御手当と申、年々高老割通り御
用捨も被下置有之候之は、其上御歎申願候義ハ甚以不当之義、
外御地頭所ニ類例も有之間敷、恐多キ義ニ可有之処、働礼ハ定
例御定り之様ニも相心得候て、可被下置之物之様ニも存候者共
も有之由、相聞候間、此度は別て右之訳申聞、恒例之様不存様
ニ申聞ル、尚又同廿六日村役惣代呼出し右訳申聞、此度も格別
之思召を以、去文化元子年之通、人足老人ニ老々五分、馬老疋
ニ三々ツ、被下置旨、申渡し、金三兩小判ニて相渡ス、割符之
上過分は返上可仕旨申渡ス、請書文面左ニ留置

奉指上候御請書之事

六月廿二日

河田喜平太

坪内嘉兵衛様

御紙面致拜見候、然は今般榮吉様御家督被為濟候為御祝詞、貴
様へ得御意候書状龜文面之段、是迄無之龜文之由、尤左ニ相違
有之間敷と存候、右は寛政八辰十二月五日、鉄太郎様御家督被
為濟候節、両家より差出候留書之通り、此度も古例ニ准認候儀
ニて、全認方誤ニも無之、且又申合セ候義ニても無之候之共、
右寛政八辰年ニは拙者祖父嘉兵衛在、府中ニて、既ニ顯徳院
様御病中より其御地逗留之事、日々相伺候之は、御家督御祝詞
等其外御吉凶共御直ニ申上候之は、其節御祝詞飛脚一件両家へ
相尋候処、則辰年留書写具候間、前々旧記と引合セ候処、相違
も無之ニ付、右ニ准シ為認候義ニ御座候、尤拙者方年始暑寒其
外臨時書状認方とは相違、龜文ニ有之候之共、此度之儀は不成
一通、御代替、格別之恐悦之御儀ニ奉存候間、御旧例相聞、詔
諛ニ近キ義相認候は、却て不敬恐入義と存、御直御祝書も同様
古例ニ相認候は、改敬と存候心得之行違より御差当相請、同様
迷惑之義ニ御座候、依之右御答銘々別紙ニ御請可申之処、自今
之究ニも相成義、旁銘々一存之答も難成趣故、別紙御直書龜文
ニ様様之義は、連名を以及貴答候、右同様之義御座候之は、此
段宜御承知可被下候、何れ以後文面認方等之義、全拙者少も存
寄リ無之、既ニ亡父代より外両家と違、旧例ニも不抱、御直御
機嫌伺状等は別て至敬之文面様之字認候之共、表立連名状等は
古例ニ認候事ニて、別て此度之義は旧例不相關様、前段ニも申
以上

一 此度 御公儀様御嫁入御通行ニ付、格別之大通リニて人馬合宿
と申、御泊り宿より御泊り迄持通しニ相勤候義ニて日数も相掛
り、其上食物等賄方、困窮之者共至て難決之義ニ付、御手当被
下置候様、不願恐奉願上候処、人足老人ニ付銀老々五分、馬老
疋ニ付三々宛被下置、誠冥伽至極難有仕合奉存候、乍併先年も
御手当被下置、又此度も頂戴仕候之は、定例被下分之様ニも相
心得候ては甚以心得違之旨、被 仰聞奉畏入候、全可頂戴答ニ
無御座御手当ニ御座候之共、連年困窮之者共無振御歎奉申上候
間、格別之御慈悲を以此度も頂戴被仰付候之共、後年之定例と
は不奉存、重々難有仕合奉存候、仍て御請連印書付奉指上候、
以上

天保二年 卯年八月廿六日

百姓惣代

次右衛門

柳 藏

次 吉

新左衛門

与 平

金右衛門

重 吉

仙右衛門

西組預り兼番

喜左衛門

御地頭所

御役人衆中様

九月八日新加納より達ス、三井へ順達
以手紙致啓上候、然は古田安助事御雇之処、今般御抱入ニ相成
候

一 小島市兵衛事今般御代官ニ被召出候間、其村々御支配下へも当
方より一同相触申候、此段宜敷御達可被成旨、得御意度如斯御
座候、以上

河田唯右衛門

山本祐左衛門様

松原牧右衛門様

加藤辰右衛門様

同日御陣屋ニて忠右衛門請取来ル

御札致拜見候、然は御舍弟次郎殿事、江州水口加藤能登守様
御家来足立権兵衛殿之養子被差遣度段、栄吉殿被致承知、先方
願相濟候ハ、御取組可被成候、則書付を以被相達候、此段從拙
者可得御意旨被申付、如斯御座候、恐惶謹言

八月晦日

河田喜平太

正致(花押)

坪内嘉兵衛様

九月五日平島より御使ニて、御附女中幾勢江戸帰府御願之趣、
御当方様先年豊永檢校様へ女中御遣之節、先之祐左衛門妹之趣
ニて御関所断切手相濟候古例ニ被成度由、旧記写し遣し候様申
来ニ付、則御記録及吟味候処、享和三亥年三月御願書御差出し

候、恐惶謹言

十月七日

坪内太郎兵衛

定並(花押)

坪内嘉兵衛

定昌(花押)

坪 栄吉様

参人々御中

十月十八日新加納足輕使ニて御直書共四通相達

一 筆致啓上候、然は富弥殿事御病身ニ付、今度其地被引移、少
林寺弟子ニ被相成候て仏学執行被致候、右執行中は各様方之上
席と御心得可被成候、尤後年少林寺住職ニ被相成候ハ、其節
は当住同様御心得可被成候、此段御達可申置旨、栄吉殿被申付
如此御座候、恐惶謹言

十月十一日

河田喜平太

坪内嘉兵衛殿

坪内金三郎殿

坪内太郎兵衛殿

此御状写取、平島へ御順達、右ニ付、御着之節御出迎、御使者
ニて御差出可被為在様思召旨、申遣ス、并右御承知之旨御返書
認方御伺之上ハ、相願遣ス処、返書左ニ申来、且当年来月御
例之御役助金御減方并高野山西院火災ニ付勸化申来、右ニ付
内寄方相談等申遣ス処、右ハ跡より申参り候旨也

ニて、同六月頃済来候趣、往返御留記写し候処、同七日御使者
小島伊三次を以被仰越候様ニは、一昨日之御挨拶等會て無之御
状、御添翰之下案持参、尤三井様へ参り、辰右衛門よりも手紙
添持参也、右草案左之通ニ有之間、去年此方様御附女中おなつ
啓之節之様ニ御懸合ニ相成候ハ、右体御願書・御添翰之沙汰
ニは及間敷様ニも思召旨、且又御状御差し出し之御日限等も不
申演、御差出方別便哉御陣屋へ哉、御連名御添翰は別段御差出
ニ被成度哉之境等、今一応問合候様被仰出ニ付、其趣口上書ニ
記、伊曾次へ相渡し候処、安外之体ニて、今日此方歟三井様ニ
て右御添翰御渡しも被成下候ハ、一緒ニ持参仕、新加納御陣
屋へ相廻り候様との御事ニて、則御状も所持仕合候由申ニ付、
其旨申上候処、例之平島之略礼不当之段御勘察被成、一応問合
セ申遣し候ハ、定て自分之不敬略儀之失礼ハ不申、却て此方
を相恨可申間、右口上書ハ其儘ニて書足し致し、左様相成ては
今日右御願書御差出し候差支ニも可相成歟御察被成、御連名御
添翰認相渡し遣し候様、乍併右等之訳立掃り相伺、且又御連書
三井様へも送御一覽、御居判相受候様申聞、同人へ相渡ス、右
御居判・御一覽之義は、先達ても御添翰問違、不都合筋出来之
義も有之ニ付、以来は御互ニ御銘々様ニて御居判被成候様ニと
の御事故、御一覽ニ御廻し之事也

一 筆啓上仕候、然は去々丑年同苗金三郎国元へ引越之節、召連
候女老入、今般江戸表へ帰府仕候、依之別紙願書を以御願申上
候、私共よりも御願申上候様申聞候間、早速相濟候様奉願上

十月廿五日新加納より為持来ル

以手紙致啓上候、寒冷御座候ニ共弥御安全被成御勤、珍重奉存
候、然は江戸表坪内富弥様御儀、今日尾州清須宿より少林寺へ
御着之由、先触来候間、此段為御承知得御意度、如此御座候、
以上

十月廿五日

右ニ付、昼後より祐左衛門御差出、供友藏、上下為持行、少林
寺并御陣屋へも御着之御祝儀申演、自分兼相勤

一 山東方流高野方并川關御用捨米等一件、昨年中落着不行届候ニ
付、内意申聞方 (以下空白)

(挿入文書)

然ハ知行所前渡村惣高六百石之内、式拾八石五斗余、先前木曾
河洪水之節流失候処、追々起返り候ニ付、此節右流失高之分并
同様ニ付川關所用捨米之分及吟味、起返り之分ハ元高ニも増し、
又は見取新開所等ニも取立度候処、流失高之分ハ久敷相成候事
故、百姓共色々と申張、改方手間取候様子ニ御座候ニ付、手限
ニては改無心元、依之新加納 御陣屋詰御役人中御用透之折、
後見相願度、委細は御陣屋へ罷出、御願申置、尤年久敷改も不
致、手抜之義 (後欠)

十一月五日三井加藤氏迄、当年御小普請金・御役助金御減方可
有之哉之旨、相談申遣し候処、返書左ニ
御手簡致拜見候、如仰寒冷強——然は当月御差出し之御小普

請金并御役助金之義、委細御別紙御書付也を以御相談被仰下候趣、承知いたし候、御役助金之義は被仰下候通、沓ヶ月銀四拾匁宛ニ相当申候、付てハ御勤番中貳ヶ月御出金ハ御相当之御儀御座候、其余ハ十ヶ月分御減し義奉存候、右減し方割合之義は、新加納表ニて心得可被罷在奉存候之は、先方ニ任七、御小普請金六兩ニ御役助金沓貳分も引当持參可罷出哉ニ奉存候、此段御承知被成下、御同様ニ御取計可被下候、先ハ御答迄草々如此御座候、其内廻文も到来可申敷ニ奉存候、何れ来十日御差出しニ取計可申奉存候、宜御承知可被下候、以上

十一月五日

加藤辰右衛門

村上
伊藤忠右衛門様

尚々、初米直段存外高直ニて奉御同意候、追々御取納被仰付候哉奉存候、今日二納之札有之由ニ及承候、少しニても高直ニいたし度奉存候、余は拜面期候、可得貴答草々如此御座候、以上

一筆致啓上候、甚寒之節御座候之共、權兵衛様御始御惣客様倍御機嫌克被為御座、恐悦之御儀奉存候、右寒中御窺申上度奉捧愚札候、御序之節可然被仰上可被下候、奉頼候、恐惶謹言

十二月五日

伊藤忠右衛門

足立權兵衛様

山本祐左衛門

御近習衆中様

御披露

猶以本文御機嫌何可然奉頼上候、扱旧冬左十郎様御引移之上も御無沙汰仕、御何も不申上候、失敬之至奉存候、御引移之節ハ誠ニ節迎故、殊ニ火急之御治定ニて、依之御出立ニも有之、何之御支度も出来不申、然処当盆前水口表より新助様御出被成、何程御支度之御懸合無之候共、御鎗箱・御具足は可有之事、御腰之物御指替も無之段、權兵衛様ニては御沙汰も無御座候共、第一左十郎様御赤面之御道理ニも有之候之は、何れ右之処ハ龜品ニても其儲程は差上候様ニ御掛合被下、御尤之御儀ニ奉存候之共、定て及御聞ニも可有御座、当家之義も連々勝手御不如意ニて、公金拝借等多、其外法外大借ニて、実々難行届、此節何程と申相揃て之義は六ヶ數御座候間、四ヶ年之内年々十二月ニ金五兩宛、都合貳拾斤ハ差上可申御引合御座候之共、權兵衛様御思召之程、且左十郎様御居馴致候所如何敷と、且那樣始御隠居至て御案し被成候間、何卒御取成被成下、程能奉頼候、則此節金五兩飛脚便を以差上申候間、御改御落手被成下、右之段被仰上可被下候、右之旨各様方迄拙者共より及御駈合置候様被申付候間、如此御座候、宜御承知置可被下候、以上

(表紙)
天保三壬辰記録

御用所

- 一 今尾計之助被召出ニ付安助・唯右衛門より為知手紙
- 一 見桃院様御一周忌御法事案内
- 一 有君様御小休入用割合出銀
- 一 肥前守様御本丸御若年寄為御知より御款御使者一件迄往返諸事留
- 一 大釜中ノ堤丈夫附願普請一件
- 一 村高新加納御陣屋書上一件
- 一 村絵図新加納御陣屋書上一件
- 一 西組庄屋金右衛門へ申付一件
- 一 山東潰百姓兩人へ松木被下一件
- 一 御料理道具御調
- 一 播隆上人之長根塚穴之石名号石ニ被遣一件
- 一 三軒屋芦池之東新開発吉祥院願ニ付見分之上申付一件
- 一 村中道直出役
- 一 御門前北側土井御普請
- 一 殿様伊勢御參宮
- 一 本郷高帳調替
- 一 御本屋表側葺替

- 一 山東滝藏志願道教石仏建
- 一 上藤様御初難御祝
- 一 春貞妻始て御目見来
- 一 宗門御改当年兩人村帳ニ載一件
- 一 戸村様御立寄二日御逗留
- 一 紀州様御通行ニ付御手当被下一件三月廿九日御通也
- 一 加納より御使者三島林藏ト申仁入来一件
- 一 味噌式ツ出木
- 一 流高一件御陣屋へ手紙、同呼出
- 一 芋島藤吾へ世一代之御祝被下
- 一 荒井山ニ頸釣懸候を見付送り出し一件
- 一 加納へ御使者
- 一 山東多藏岩出し候ニ付呼出并車差留一件
- 一 妙知弟子剃髮弘メ
- 一 有君様御小休入用御下ケ金
- 一 多良表火事御見廻御状一件
- 一 有君様御入興ニ加納組座頭へ配当被下
- 一 山東から池へ松苗植
- 一 大釜中堤丈夫付
- 一 大溝様御不幸
- 一 前河原ニて草刈道具草井村へ被奪取候ニ付願面一件
- 一 御本家様駿府御加番被仰付一件
- 一 公儀より村々高并新開高明細書出し之御達書付

正月六日新加納より達ス

以手紙致啓上候、然ハ今度今尾州右衛門養子計之助義、御中小
姓手代勤被 仰付、御宛行三石五斗老人扶持被下置候、此段御
支配下共一同相触申候間、宜御達可被成候、右得御意度如斯御
座候、以上

正月六日

河田唯右衛門

山本祐左衛門様

古田 安助

松原牧右衛門様

三井へ送る

加藤辰右衛門様

△大釜中ノ堤丈夫附普請願出有処左ニ申来

尚々、明日四ツ時普請場所へ罷出候間、左様御承知可被下候、
以上

以手紙致啓上候、春暖相成候之共弥御安全被成御勤、珍重御儀
奉存候、然大かま種普請兼て願有之候処、差延置候、然処明五
日為見分当方より役人共罷出候間、御面々御方よりも乍御苦勞
御立会可被成候様仕度奉存候、右迄如此御座候、以上

三月四日

今尾平 内

封上同様 荻谷幸右衛門様

山本勇左衛門様

右到来、則松本へ順達右使相頼遣ス、尤返書之義松本より答方

相談之上御届ニも取計可申敷ニ候之共、先何分北筋へ成共御村
境迄送り出し被成候様、尾張とくと申、尤次村へ送り付、先方
受取不申候之は、何れ元々へ戻し度、其上六ヶ敷相成候節ハ、
何れ御相談之上可取計と申事ニて、達て相頼申ニ付、無提立帰
り、其旨内伺申出ニ付、此方ニても右体統付者内々ニても承知
之上ハ、不筋之計方は差因難相成、左候時は向寄々々相届、檢
使受不申てハ難叶、然時ハ村方計大物入ニ相成段、迷惑ニ存候
旨申候内、最早下役共相寄合、大釜向へ送り出し候旨届出候由、
翌朝相成候て見廻り九右衛門へ申付、下役は勿論、行衛内々為
開合候処、新加納の方へ参り候由ニ候之共、種々不相分候間、
村境御山内見廻り九右衛門・牧藏付置為聞届、然処長塚へ参り、
夫より又新加納へ送り出し、新加納より大野村へ送り、夫より
下中屋辺へ参り申候由相聞、先大略安心相悦候内、翌日又鹿子
島下役案内ニて、尾州鯨原村之者向人、右手負人相尋来り村役
へとふ敷ねたりケ間敷申ニ付、猶又心配、懸合方内伺申出ル、
夫より石田村ニて入水之噂も有之由ニ付、尋参り候処、平島村
ニて尋当り候由、連掃り鹿子渡ししより越し連行候旨及聞、又々
安心仕候旨届、然処又翌日右村より人参り、明日俵使相受候ニ
付、同人所持仕り居候小刀当村番人取上、且又擲打も致し候旨
当人申ニ付、如何之訳ニて打擲仕候哉相糺、右小刀も相渡し候
様申参り候ニ付、下役承取候様、成程小刀之義は送り出し候処
ニて相渡し候様、不受取申取候之共、押て相渡し候様当
人定て捨候義と存候旨申、且又打擲之義は決て不仕様御答被成

相頼遣ス

同五日四ツ時場所立会、忠右衛門出張候処、新加納より平内・
表市郎、松本より幸右衛門、村役当村并三ヶ村より老人宛出居
候、則立会見分之上、庄屋喜左衛門方へ引取、支度之上、普請
仕方上来之仕来ニては人足費も多候間、渡し方可然と申評儀ニ
て、右腹付土粒相積り方村役共へ相尋候処、心得相違、坪不当
之訳有之ニ付、尚又場所へ出、町張之上、委細手張ニ相記、間
尺坪数相改渡し方入札之義は明日村役共取計之上、封印之儘明
後七日新加納御陣屋へ持上り、買封落札之答ニて引取、同七日
入札、封付ニて持出、庄屋左衛門、下村よりハ山脇勝右衛門之
由、然ハ水中ニ相懸り腹付之事故、上水直高老尺余り落し候儀
は不相成哉之伺、且水中ニ相成候分仮簪ニても不入申ては、仮
令水落し候て普請仕候共、直ニ水中ニ相成義故、何れニも簪入
候方可然哉之義相伺候様、即答御陣屋ニて評儀不相決、明日出
候様との義ニて、立掃り候段届、尚又翌八日外御用兼、祐左衛
門村役重吉召連罷出ル

△四月十七日類白坂向ニて小刃を以自害致懸ケ、夫より荒井山へ
上り頸釣り懸ケ候を見付、送り出し、二軒屋之渡し為越遣し、
跡より 下役を以鹿子島下役迄、右之者為越候旨申込セ候様、
右ニ付庄屋与右衛門より当村役へ、相談致度義有之ニ付参り候
様申越候由ニて、金石衛門・喜左衛門、与右衛門へ参り候様、

様と申ニ付、右之旨答遣ス、乍併右送り出し候節歩行不申ニ付、
十手ニて弐ツ三ツ天王西ニてた、き候ニは相違無之由ニ申、右
答以後曾て無沙汰ニ有之候事、不思寄事ニて一統大心配之事共
也

△五日十四日夕方新加納使御直当手紙持来、文面左ニ

以剪紙啓上仕候、然ハ今般殿様御儀駿府御加番被 仰付、右ニ
付御達申儀御座候間、明十五日朝四ツ時新加納御陣屋之御出
御座候様仕度奉存候、此段可得貴意如斯御座候、以上

五月十四日

古田安助

坪内嘉兵衛様

猶々本文御請否早便を以可被仰越候、以上

一筆致啓上候、然ハ今般榮吉殿駿府御加番被 仰付、雖有被奉
存候、右ニ付各様三人共彼地之被召連在番被致候旨、則別紙書
付を以被相達候間、御高相応御人数・武具・馬具共御用意、来
ル七月中江戸着可被成候、彼地御用向之儀は御出府之上可被申
達候、此段從拙者可御同意旨被申付、如此御座候、恐惶謹言

五月三日

河田喜平太

坪内嘉兵衛様

坪内金三郎様

坪内太郎兵衛様

駿府御請御返書

一筆致啓上候、然は当五月駿府御加番被為蒙 仰候ニ付、拙者共三人御助番可申上旨、五月十五日古田安助より致承知候、然先年駿府御加番御勤之頃は元禄五六にて御座候ニ付、其頃之御例にて被 仰下候哉、愚案不仕、其後享保以来御役御勤中は年々無懈怠、当天保二迄御役助金八両宛差出し来候、付ては元禄之頃之御例を以御請可申上哉、当時之仕来りにて御請可申上哉、是等之処愚案落着不仕、仍て貴様迄御問合セ申候間、御勤考之上否被仰下候様御頼申候、右迄如此御座候、恐惶謹言

七月四日

坪内太郎兵衛
坪内金三郎
坪内嘉兵衛

河田喜平太様

右草稿は牧右衛門、添削辰右衛門取調、窺之上認方三井表にて出来之著、則御陣屋へも同所より差出候積り、本書御一覽は無之著ニ御決着にて、御帰り、写稿ハ一件袋ニ入置

口上覚

今般駿府御加番ニ可被 召連被 仰付候ニ付、印紙を以相願候、拙者共先祖之儀ハ、武功ニよつて 権現様別て被 召出、於關東御知行三百石ツ、頂戴仕、其後一倍之御加恩被下置、從 台徳院様御連名之 御朱印を以、当国にて御知行に今拝領仕、冥加至極難有仕合奉存候、就ては此已前駿府御加番御勤之節は、

以手紙致啓上候、残暑……然ハ江戸表より申来候儀ニ付、御談申度義御座候間、明十四日早朝御揃罷出可被成旨、得御意度如斯御座候、以上

八月十三日

河田唯右衛門
山本祐左衛門様
松原牧右衛門様
加藤辰右衛門様

猶々、本文之趣急々申談度候間、くれ／＼も明早朝罷出可被成候様得御意候、已上

○右ニ付十四日三人相揃出候処、唯右衛門より江戸御来章相達ス、左ニ

七月廿日附御再答、八月四日相届致拜見候、然は被仰越候御書面之内、最早栄吉殿駿府表出立月数も無之ニ付、御存寄り有之候ハ、御当地御出府之上被仰立候之様、先便得御意候趣御承知ニは候之共、御三人共御出府之節道中向は、元禄五年之例にて御越可被成候之段、拙者へ御問合セ之段致承知候、右は林肥後守様へ被相伺候書面ニも書加有之候之通、家来同然と申事并ニ今度は家来人数へ差加被召速度段之廉も有之候間、家来同然之御心得にて、道中大行無之御通行可被成義と存候、元禄年中は如何様之振合ニ御座候哉、其頃迄は各様事当家之旗下支配と有之、其後享保之頃より家来同然と相成候間、元禄之頃之振合とは致相違候間、前件之趣ニ御心得御旅行可然と存候、拙者迄御問合セニ付、心附候義共及御答候間、書余は御出府、万々可

御本家御持高三千五百石、拙者共銘々六百石ツ、之持高にて罷越候、然ル処當時にては、御内分ケ之御取扱向ニ相成り候、左候節ハ從 権現様御代々拝領仕候御知行之由緒薄ク、先祖之筋目取失ひ申候哉ニ奉存候、今般御加番ニ被召連被下候儀、相当之儀ニ御座候哉愚案ニ行届不申候、何卒從 権現様別て被 召出候由緒相立候様、厚キ御勤弁御頼申上候間、貴殿より何分宜御取成し被下度頼入存候、右御答へ印紙にて被仰下候様被成可被下候、以上

壬辰 七月廿四日

坪内太郎兵衛
坪内金三郎
坪内嘉兵衛

河田喜平太殿

一筆啓上仕候、然は私儀疝癩にて腰痛御座候ニ付、勢州辯原温泉之湯治養生ニ罷越度奉存候、依之暫他行御頼申上候間、右願之趣早速御許容可被成下候、此段奉願候、恐惶謹言

七月十七日

坪内太郎兵衛

坪 栄吉様

参人之御中

○八月十三日三井より夜中廻達、少林^(寺脱カ)にて揃出候様申来、承知之返書遣ス

得御意、御返事旁如此御座候、以上

河田喜平太

坪内嘉兵衛様
坪内金三郎様
坪内太郎兵衛様

尚々、金三郎殿是迄新加納陣屋へ不被出候処、已来同所へ被相出候旨被仰越致承知候、則栄吉殿へ申上候、且又七月九日付御状、八月四日相届致拜見候処、本文同様之事故致文略及御報候、以上

先触

一本馬 五疋
一軽尻 壹疋
一人足 貳拾貳人

右は今般駿府御番ニ坪内嘉兵衛・坪内金三郎・坪内太郎兵衛、銘々在所九月四日出立、木曾路十日振りにて江戸表へ罷下候間、書面之人馬宿々無滞差出し可給候、此先触道中無滞滞被相送、板橋宿より市谷御門之内坪内栄吉様御屋鋪へ早々相達可給候、以上

辰九月二日

濃州前渡
坪内嘉兵衛内
山本小弥太

同州平島
坪内金三郎内
松原牧右衛門
同州三井
坪内太郎兵衛内
加藤辰右衛門

木曾路
濃州鶴沼宿より板橋宿迄
宿々問屋中

泊り割
大久手 九月四日 見との 同 五日
宮ノ越 同 六日 塩尻 同 七日
和田 同 八日 軽井沢 同 九日
（倉ヶ野）
くらかの 同 十日 熊谷 同 十一日
板橋 同 十二日

右宿々脇本陣泊り致度候間、御申通辞置可給候、以上

此度御出府御用意金、下中屋市兵衛にて金八拾兩借入、先荒増御路用相調候之共、当取納返済之筈ニ借入候之は、畢竟当暮より来年中賄向、御賄方御知行所重立候者へ被仰付之思召付、尤高役金拾八兩は早速調達相納、（清原民右衛門）外油民へ預金拾兩と都合御役助金戻り六兩と、右百拾四兩にて御免駕用意相調候之共、同二日申ノ刻三組百姓・御家米分・村役之内式拾五人之人別御呼出、御直ニ御頼金百六拾兩、夫々身上分限ニ応し割付、頭拾兩より

出、公儀御役人衆破損所取繕等之^{（見）}分も有之候由、就夫右側猿尾水下村々之義、^{（見）}分且加納領村々第一にて、永井肥前守殿役人より申聞之趣も有之、領分村々よりも挙て申立、若切入等有之候ては難渋は不及申、亡所ニも可相成哉之段相款之、無余儀訳ニ相聞、模寄宮田用水路之儀此節修覆取計中ニ候處、右模通筋も相含、旁前頭猿尾元型取繕之義も、右序を以今般之儀は成丈当方より取計候間、地元之附差障り之義ハ無之哉、御訂之上否御申聞有之様致度、右可得御意旨蘆田莊次郎申聞、如此御座候、以上

九月十三日 加藤才右衛門
岡本儀左衛門
坪内李太郎殿
御役人中様

十四日ニ相達
右之通書状白木箱ニ入、上書同様、芋島村庄屋より為持届、先請取書付相渡し遣ス、右ニ付返書認、村役へ為持遣ス様同日申遣し候處、同様之義ニ付、十五日笠松表へ三ヶ村呼出し廻文来り候旨申ニ付、右否承知之上可及答と見合セ候處、十五日ニハ役人衆差支有之、延日ニ成、十六日ニ罷出候處、堤方役所にて聞訂有之候之共、何れ尾州より之普請は不承知ニ為申度趣之様にて、尚又十八日罷出候様との義申出ル、仍十七日ニ及返答、其文言左ニ

御手紙致拜見候、然ハ木曾河通美濃地当知行所前渡始、下切・松

下三両迄ニ割合、当九月より来已十月迄十五ヶ月之内、月々調達致し差上候様被仰出、尤御玄関御広間へ上ケ候て、御使者之間北御襖際ニ御着座、御刀持小弥太、祐・忠兩人同間東南敷居際ニ西面ニ着座仕、一応御意被仰出之上、御達書御頼趣意認置読聞、御請之調印取之候處、一統難渋申立、半當之御請申上候之共、半當之調方無之ては御番御勤役之御差支ニ被為成候旨及演舌處、何れ村内一統より金高都合は仕、御番御勤之御差支ニ不被為成様可仕と、式拾五人始村役共申ニ付、先御安慮思召旨、御意有之御立有之、尚右為御悦、村方へ御祝酒大樽壹樽被下置、右人数之内惣代三人罷出、難有旨御札申上ル、右酒ハ加納本陣にて勝手ニ取、頂戴候様申渡ス、九日節句ニ通拜借願出ル、同日於薬師戴候由、扱半當八拾兩之内、残人別之内尚又拾六人撰出し、三拾六兩被仰付候處、是も半當十六兩御請申上ル、都合人別にて金九拾六兩御受申上ル、残六十四兩ハ惣村中より調達

九月十四日至来
以剪紙致啓上候、弥御堅固被成御勤、珍重之御事御座候、然ハ木曾川通其御知行所濃州前渡・下切・松本三ヶ村地内ニ、水刳猿尾四ヶ所有之、美濃地川除要勢之猿尾ニ候處、出水之度毎欠流候之共、相続不行届、全体右辺落通之儀美濃地へ傾居候處、右猿尾欠損候ニ付、猶更水行堤添之寄り、此上大水等有之候之は堤切入之程も無覚束、若木曾河より切入候ては、輪中々々囲堤も難持堪、可致入水、左候ては人命ニも相抱可申と、水下村々不穩、既ニ去子年中領分村々よりも歎出、添状を以笠松表へ指

本三ヶ村之内、水□古猿尾追々欠損し候ニ付、委細御認取之通無余儀訳ニも有之、且宮田井堰模通筋旁御舎、今般右古猿尾元型取繕之義、其御元より被成度ニ付、地元差障り有無相訂、否可及貴答旨委曲致承知候、然処右三ヶ村之義は、一統之内支配違も有之、入交り候之は、知行所之外組合村々共篤と為相談候上、可及御答と存候處、右河通之義ニ付笠松御役所へ被呼出、村役共罷出候處、当方之御来紙文同様之義共聞訂有之候間、隣村共相談し候上、兩三度も罷出、村々存寄り之義は笠松表へ申出候由ニ御座候、尤右堤通り之義は因役普請場所ニ有之候之は、何れ笠松表にて訂之上、御沙汰御座候義と奉存候間、別段当方より訳て否御答ニは不及申候間、左様御承知可被成候、右之段得御意度、御報旁如此御座候、以上

九月十七日 坪内嘉兵衛内
伊藤忠右衛門
岡本儀左衛門様
山本祐左衛門
加藤才右衛門様

右之通認、白木状箱ニ入、村役より為相届、役元藏持行、請取書付取来、跡にて承合セ候處、新加納御陣屋□様懸合も無之様子、下切・松本も同様、此方計へ右懸合之處、右之通相答遣ス、尤来紙状箱共別ニ仕廻置者也

霜月廿四日夜木曾河流材有之、右ニ付新加納より触左ニ

此度木曾川通出水ニ付、公儀御用材并尾州用材とも及流木候ニ付、為吟味尾州役人中廻村有之候間、村役人共致案内、無差支様取計、勿論村々ニおゐて隠木等不致様情々申付置、若心得違之もの有之候えは急度及吟味候間、心得違致間敷旨、村内不洩様可申候、此段御支配下村々共一同相触申候間、為御承知如此御座候、右得御意度早々、以上

壬辰十一月廿五日

河田唯右衛門
古田安助

山本祐左衛門様
松原牧右衛門様
加藤辰右衛門様

十二月十六日新加納より手紙、大割御出分明十七日持参候様と、

河田^(唯)只右衛門より申来、米紙文面略ス、別紙下之通、則請取返書相渡し遣ス、翌十七日祐左衛門持参也

一 銀六拾三匁五分

当辰年大割御出分

一 銀拾四匁三分

上中屋村天神官拝殿破損所御出分

一 銀七拾七匁八分

壬辰十二月十六日

翌巳正月十日平島より順達と申、御使市藏へ渡し越、三井へ為持帰ス

覚

一 銀百四匁九分

目板九坪八合

代八拾三匁三分

此訳 手間三人

拾八匁

飯料六人分

三匁六分

右は少林寺庫裏指瓦入用割

割合御三所御出分

銀三拾四匁九分七厘 此式分式朱ト百四拾文ツ、

右之通りニ御座候、以上

辰十二月廿日

少林寺
納所

前渡御屋敷
平島御屋敷
三井御屋敷
右之通宜敷御頼申上候、以上

(表紙)

天保四年

癸巳年記録

御用部屋

一 殿様府中御加番御留主中記日記ニ有之

一 御厄祝二月朔日

一 大釜上之桶水洩候ニ付見分之直し二月四日より

一 見桃院様御三回忌二月八日御法事留ニ有之、其外日記ニ委敷

一 女中部屋へ奥左衛門忍入候一件二月十日より日記ニ有之

一 御頼金出し方故障与三右衛門申立ニ付呼出二月十二日日記ニ有之

一 笠松御陣屋火事見廻状

一 下中屋小島市兵衛方嫁取ニ祝状

中屋市兵衛嫁取正月廿八日有之、駿府へ伺候処、二升ニ錫添遣ス様との義ニ付取計左ニ

一 筆致啓上候、然は先般御賢息様御婚姻首尾克被成御整、芽出度御儀奉存候、右御祝詞之印迄聊兩種被進之候、御笑納可被下候、右之段宜得貴意旨、駿府表より被申付越如此御座候、恐惶謹言

三月六日

伊藤忠右衛門

微明(花押)

山本祐左衛門

效直(花押)

小島市兵衛様

参人々御中

両種 式升樽・錫式十枚椀原包、使市藏へ祝義十疋貰来

△東本願寺御門主関東へ御参向、御帰路之節キフ御坊へ御立寄、

野村裏へ御使者長瀬弥作、御坊へ山本祐左衛門相勤、御献上枝柿十五入、一件留ハ寺院記録ニ委敷故略ス(以下余白)

二月より

△天神裏溜池樋朽候ニ付伏替

堀割入札 銀拾三匁九分 落札文左衛門 米代拾四匁

新種板厚老寸五分生松ニて 代積り 作材五匁

口幅三寸・高式寸・長式丈五尺 釘式匁

式拾老匁

惣九郎ニて出来

三月

同所溝浚坪取願出ル、溝巾式尺ニ深六寸

三月

△御庭前之井戸朽候ニ付、惣九郎ニて出来、代金老分ニて、同館代三分ニて、朽木之松此方より遣し候筈、并葺杉皮ニて渡し切之筈

八月十二日昨十一日夜之由

一 草井渡し場にて変死一件、早朝より草井より番人附候由承り及、
四ツ頃より村方よりも番人付る、怪我人申口左ニ

松平源三郎様御領分下総国印場郡印場村怪我人豊吉当已廿九
歳、相手同国勘藏、犬山信濃屋也着もの之事

当地住所大田備後守様御領分遠州日坂八幡町、女房子有之由、
所持之品風呂敷にて疵口腹巻巾着袴、笠巻蓋、着類紺島單物・
帯黒五良

新加納御陣屋へ届出候処、折節河田氏ハ名古屋行、今尾ハ岐阜
行にて、小島市兵衛計、草井よりも小方へ届、見分有之由風説
有之旨申上候処、先此方ハ無人故出張難出来間、先方見分も延
引之様ニ駈合置様との義ニ候へ共、左様之義駈合ハ一統も宜様
ニ申ニ付延引、夜ニ入先方番人引私有之様ニ、喜左衛門ニ久兵
衛添、草井四右衛門方へ申出ル、先よりも同様之義故、前渡之
小屋取私様申、夜ニ入新加納へ手紙を以左ニ申遣ス、其文面左ニ
以手紙致啓上候、然ハ今朝村役共より御届申上候怪我人之義、
差掛り候義ニ候間、早速ニも御出張可被成下候、折節御惣方様
御出役にて御無人之由、御延引ニ御座候之共、人命ニ相懸り候
義延々ニも難致置義と奉存候間、早行養生申付候様、当方より
罷出下役方迄為引取候様申付候義相当歎共奉存候之共、地所一
件之義ハ論所ニも候へハ先差控可申哉、併兼々川切ハ当方之知
行所と申張答候義ニ候へハ、差掛り候義ハ災難たり共地元ニ有

使相濟候様、左も無之御事ニ候ハ、笠松御役所へ御添翰被下
候ハ、御願申出度、笠松御立会御見分共相成候時ハ、後難も無
御座候同理之様ニ奉存候間、何卒今朝御願申出度様申ニ付、昨
夕北方御立会見分相願、其旨駈合有之処へ、今又左様之義申出
候事ハ甚不宜間、不相成旨急度申遣ス、然ニ四ツ頃尚又、只今
小前共新加納表へ出候旨申出ル、依之甚右衛門新加納へ出ル、
今五ツ時頃北方表へ立会見分之駈合書状差出候由にて、今更北
方と立会不相用申出候義不都合ニ付、嚴咎入牢之様子、再此糺
立会にて相尋候処、利害屈伏仕帰る、同夜草井村庄屋案内にて
北方役所より見分場所へ来、前渡村之番小屋引私様、四右衛
門・彦三郎より喜左衛門・重吉へ駈合、右ハ今般之変死人ハ木
曾川之内ニ候えは、尾張様御支配にて全論地外之事故、番小屋
引私様、若不引私不申ハ新加納役人呼寄御駈合有之様子と申
事故、兩人ハ引私可申候へ共、小前共一統より相掛候小屋ニ候
えは、申聞候上為引私可申と申候、九右衛門在番にて居合、中々
以不承知ニ候、急度前渡村番人ハ引取不申、今日満水にて水中
ニは相成候之共、美濃方ニ有之義ハ前渡村地内ニ候へは、尾張
様ニ相懸り候義無之旨申、私宅人鬻首ハ飛候ても不引私旨申ニ
付、四右衛門・彦三郎も無詮方帰る、夫より草井村より状箱ニ
て新加納へ駈合ニは、木曾川水中之義ハ尾張方自在之場所、前
渡村と論所慣之地ニ無之間、九右衛門老人村役ニ差出、強氣申
張相拒候間、引私候様利害為在度趣、駈合之書状持参にて、夜

之候義、便々と聞捨ニも難致置奉存候間、先私共計出張、前件
之趣為取計可申哉、此段御相談得貴意度如斯御座候、以上

八月十二日

伊藤忠右衛門

新加納御陣屋

山本祐左衛門

御詰合衆中様

右ハ御陣屋にて即答も難出来示談ニ候之共、今日祭礼ニ付寿山
様宮にて一件ニ付色々強御助言有之義故、無扨先右之旨申、駈
合一件は、不通手負人、殊ニ場所と申、不容易義ニ候之共、
新加納、北方共暇合ニ相成無沙汰ニ付、一応及駈合返事不来、
庄屋仙右衛門へ挑遣ス処、同人へ何れ明朝迄延引可申様との義
にて立帰リ、十三日未明より村役揃出ル、怪我人今囉致落命候
旨届出ル、新加納へも届重吉旨申出ニ付、手紙を以、昨夜御相
談得貴意候怪我人今囉致落命候間、尚可然御勘考御取計相願旨
届、旁村役ニ為持遣ス、宛ハ河田氏え、然候、唯右衛門より村
役へ被申聞候ニハ、草井村へ申談取置方取計様との御義ニ候之
共、昨夕迄も先方番人引私候様互ニ及駈合、当方地所ニ候之は
勝手ニ取計候旨申伝上、今又和談ニハ難参間、御役所より御駈
合不被成下時ハ、笠松御役所へ御添翰相願度旨申出、何分打捨
ニハ不致置義故、早速祐左衛門添出ル、村方より達て申立ニ付、
然ハ明日より北方へ及駈合、見分立会相濟可申旨にて引取、十
四日未明より村惣代之もの村役不残罷出、昨夕新加納ニ被仰付
候趣にてハ、一件御立合御見分にて済申時ハ、堤外不残立会場
と相成同理之様ニも奉存候間、何卒新加納・此方様計にて御檢

九ツ頃忠右衛門へ、談度義有之間、庄屋喜左衛門方迄出張候様
と申参るニ付、何れ立会見分ト心得、兩人共半てんにて出張之
処、右之来紙為見相談有之、尤村方も呼寄、駈合方調有之、草
井へ出張河田唯右衛門・今尾半内・伊藤忠右衛門也、供方新加
納より若党老人・両掛老荷・草履取也、此方重藏迄、四右衛門
にて休足、尤川原迄草井両庄屋迎ニ船越し来、北方出役水谷重
助・岸上鎌太郎、庄屋彦三郎方ニ旅宿、無程案申越ス、罷出候
処、今日双方庄屋共駈合口并九右衛門強氣申張候段、両談有之、
木曾川水中之義立会見分等之例、尾州国政差支之段厚勘考、村
方へ利害有之、論地等ニ不抱一件取片付、早行相濟様との義ニ
て、先一往引取、喜左衛門にて村方呼寄及談、論所絵図面等相
調候処、今般変死之場所全尾州方ニ相違も無之、此節之水中、
尤十二日ニは石川原ニ有之候之共、木曾河平水之水中ニ相違無
之義故、地論ニさへ不抱義ニ候ハ、何れニ成共子細も無之候
へ共、以後論地ニ響ニ不相成様、書違為取替之積、四右衛門方
へ小前惣代・村役不残呼寄、右承伏候様申付候へ共、一統不仕
ニ付大キ手間取、昼支度四右衛門にて申付、漸承伏書付左ニ

為取替一札

下総国知場郡知場町市右衛門倅豊吉と申者、今般草井村渡舟場
ニおゐて変死之場所、草井村よりハ木曾河内にて全地論外之由
申立、前渡村よりハ論地之由申之、双方申立行違候之共、変死
人取片付方猶子難相成ニ付、今般之義地論之訳ニハ不抱、平水
之水中之義ニ付、尾張様より御見分相濟、死骸取置方被仰付、

就てハ此一条已来地論等申立ニは不相成善心得罷在申候、依之
為後証為取替証文仍如件

天保四巳年八月十五日

坪内嘉兵衛知行所
各務郡前渡村

百姓惣代

久兵衛

組頭

重 吉各印

庄屋

金右衛門

肩書ニ

尾州御領分
葉栗郡

坪内御名御領分

葉栗郡草井村

各務郡

浅右衛門殿 円伴

双方名前同断

同

德太郎殿 彦倅

組頭

吉 藏殿

同

弥左衛門殿

百姓惣代

九右衛門殿

右取為替相濟引取、喜左衛門ニテ支度酒飯出ス、然処、古田安
助殿笠松表より籠ニテ見へ、惣代庄屋太平次連入来、一件相濟
候段大慶之由也、取替セ書付一見、肩書御名前之義不宜と申事、
是ハ先方北方出役之草案ニ候之共、本紙認忠右衛門相認候ニ付、
御名御知行と認相濟、翌十六日新加納御陣屋迄礼祐左衛門罷出

天保四巳年十一月十日

坪内太郎兵衛配知行
同国各務郡三井村

庄屋

又右衛門

身頭

与三右衛門

百姓代

弥右衛門

新加納

御役所

前面調印取之候ニ付、三井御屋敷へ出会之上、三連「」書状
を以江戸表へ申上遣ス処、同廿四日江戸着状、早速村々調印之
もの庄屋百姓兩人ツ、御呼「」之着状十二月二日出来三ヶ村
兩人ツ、申付、四日発足ニテ十日着之筈申渡、当方金右衛門ニ
久兵衛出立、路用金三兩上より渡し遣ス、時節ニ付御年貢取立
方与平ニ立会元藏へ申付、△然処へ同七日尚又村方調印之書付
差出ス様ニ、廻文ニテ申越ス由申出ル、三庄屋ハ時節故組頭重
吉出ル、書付写左ニ

差上申御請証文之事

今般御触書之趣左之通、在々ニおゐて盜賊悪党もの有之候節、
捕押候様村役人より穢多非人共へ申付、可任差図儀ニテ自己之
取計ニ致間敷事ニ候、然を盜悪事等相聞候速、百姓へ繩を掛相
糺候類も有之、不届之至ニ候、既ニ此度右不届ニ及候濃州領下
村番非人茂助外式人、村役人等迄夫々御仕置被 仰付候、以来
右休之儀決て致間敷、右御触之趣村々番人共へ急度申付置、若

ル、村方よりも庄屋惣代札申出ル、此方へ役前共皆出ル

十一月廿日新加納へ村々呼出、申渡し請書調印取候ニ付、写面差
出ス、左ニ

差上申御請証文之事

私共村々御配知之分ハ御本家様より御内分之義ニ付、諸書面坪
内栄吉知行所何村百姓と可相認候処、先達て御奉行脇坂中務太
輔様へ平島村之もの共より、坪内金三郎知行所百姓と相認差上
置候段、不束之旨其御筋より、御本家様へ御達有之候ニ付、此
度之義は御本家様より厚御取計を以御濟被成下候之共、以来ハ
御奉行所筋ハ勿論、都て諸向御他領ニ対し相認候分ハ、坪内吉
栄知行所百姓と可相認旨、被仰渡承知奉畏候、尤右之趣御三方
様之ハ当時御在府ニ付、彼地ニおゐて御達しニ相成候旨をも被
仰渡、是又奉畏候、若相背候ハ、御咎可被 仰付候、仍て御請
証文差上申処如件

坪内嘉兵衛配知行

坪内金三郎配知行

美濃国各務郡前渡村

同州葉栗郡平島

庄屋

金右衛門

組頭

重 吉

百姓代

市左衛門

庄屋

助右衛門

組頭

友 八

百姓代

弥平次

悪党者捕押候段番人共より村役人共へ相届候節ハ、有宿無宿ニ
不限、其時々当御役所へ伺之上、御差図可請旨被 仰渡、一同
承知奉畏候、若相背候ハ、御咎可被仰付候、仍て御請証文差上
申処如件

天保(四年)
十一月三日

前面之書付、惣代庄屋より御三所村々役人調印取立候趣ニ有之
処、申合セ既ニ此節調印ニ付前件江戸表へ「」召寄之上ニ候
之は、何れニも伺之上と申事ニテ延し、翌「」ニ相成以調
印断左之書付出ス

乍恐以口上書奉願上候

一 今般御触書ニ調印可仕様被仰付候処、私共ハ御地頭所より御役
所御他領へ奉差上候印形之儀ハ、帰国迄御断可申上候様被 仰
付候間、今般御触書も右ニ付、此度之義は御延引被成下候様奉
願上候、尚又御帰国之上申達、其上御請印奉差上候、以上

天保四年巳十二月

三井村庄屋

与三右衛門

上戸村庄屋

吉右衛門

中野村庄屋

孫左衛門

平島村

齊 助

前渡村

十 吉

御役所

目録

- 一 殿様江戸御逗留御留主中
- 一 源右衛門様御卒去ニ付正月御規式御延引
- 一 二月朔日ニ御越年之御規式執行之事
- 一 高樹院様御四拾九日御法事之事
- 一 高山裾山共薪取ニ荒し候様子ニ付山入差留触
- 一 田畑ニ差障り候竹木枝切払候様申触
- 一 前河原一条ニ付新加納へ被呼出
- 一 村瀬半左衛門病氣届より相果候ニ付跡目相続人願一件
- 一 御長屋西側葺替之事
- 一 坪内権左衛門様江戸御屋敷御類焼ニ付見廻之事
- 一 御玄閥屋根谷赤年瓦入候事
- 一 三井様御帰国之御土産・同御祝儀被進一件
- 一 常貞寺ニ三部経数部出来ニ付御寄附之事
- 一 永井弘之助跡目相続人願一件
- 一 去九月廿六日駿府表より江戸表へ御出府、十一月廿八日無滞御

老若様御廻動被為濟候処、御知行村々三役共、於新加納御陣屋調印之一条ニ付、庄屋金右衛門・百姓代久兵衛兩人被召下一件落着不相濟ニ付、殿様江戸御逗留御留主中也

- 一 去十二月十八日於京都 源右衛門様御卒去ニ付、当正月之御規式御延引也、然処於江戸表定式御忌服殘御請ニて御忌明、十一日ニ御忌明之趣被仰越候之共、御状延着ニ付、廿一日年頭之御使者御代參等相勤 御館ニて御規式は二月朔日一日相濟候趣、寺院・御家來分・村方へ廻文を以申触、尤御門松等御鋸ハ御流れニ取計、廿九日夕方村役共計歳末御祝儀申上、定例之歳暮為御祝儀目録銀十匁・酒式升献上、於御台所御祝酒被下、翌二月朔日早朝御具足之餅平均祐左衛門相勤、尤昨廿九日ニ相鋸置也、則朔日御祝儀申出候銘々之例之通り被下、是則十五日ヲ兼相濟ス、七日七草等も略ニて不執行、寺院方計ハ御玄閥ニて請相濟ス、其外ハ御台所也、下役万歳ハ二日ニ來、是も前々日より伺之上、二日ニ上り候筈ニ申付遣ス、○熱田万歳ハ例年正月十四日之処、当年も不相變來候之共、延引之様申相戻ス処、廿二日ニ來、例之通り舞相濟ス
- 一 年頭御状使加納・犬山・切通、廿三日より相濟ス、寺院方其外へ御使者、長瀬久米五郎ニ供老人付相廻ス
- 一 鶴沼玉泉院之御守札、年頭兼久米五郎請來、御初穂十疋為持遣ス
- 一 上中屋天神御備持參、廿四日例之通米尅升白也
- 一 犬山兩役より年頭御状來、請取書計遣ス、廿五日也

- 一 河田唯右衛門年頭來廿四日也、古田安助同断廿六日也
- 一 二月二日ニ御鏡開為御祝、例年之通祐・忠兩人家内迄、龍見及子共被召寄、御吉例之通頂戴被仰付
- 一 地祭り代參庄屋与平次、村方鶴松松甚へ手紙百疋入相渡ス、兼山中様・矢島様へ御年玉之御使頼遣ス
- 一 御味噌焚延引ニ相成候処、二月五日より用意、八日迄也
- 一 なつけ婆々年回之由ニて志之餅献上、白米式升被下
- 一 高樹院様御四十九日御正當二月十日少林寺ニて執行、南一持參ニて御誦経相頼置、当日祐左衛門御代香、供甚平
- 一 正月九日御吉例之御家祈禱御延引之処、二月十一日稻荷様兼吉祥院相勤
- 一 下切境道普請、田方水落之障ニ相成旨申出ニ付、村役内伺一件日記ニ留置、爰ニ略ス、二月十一日也
- 一 北島ニ稻荷宮新宮造立之噂有之ニ付、兩役呼出し尋一件、同様日記ニ有之、二月十一日
- 一 田畑へ蔭差障ニ相成候竹木枝切払候様、廻文ニて三組庄屋へ申触遣ス
- 一 若もの共法外永夜遊候趣ニ付、心得方申触
- 一 御山薪取荒候様子ニ付、一統山入差留触
- 一 正月十五日分御日需之札、二月十五日吉祥院より相納
- 一 少林寺大般若二月十八日差支ニ付断、御香代計為持、手紙ニて断納所迄申遣ス、使甚平
- 一 桃春院儀法執行十八日、尤定日十七日ニ法中差支有之ニ付、十

八日之願、御香代式十疋、忠右衛門相勤、供市藏

- 一 前河原草井村寺例一件ニ付、村役惣代呼出ニて新加納行届出ル、庄屋仙右衛門、惣代ハ柳藏・九右衛門
- 一 村瀬半左衛門病氣至て六ヶ敷旨届出ル、引続キ致落命候旨届出ル、尤忠右衛門宅迄也
- 一 松苗四百本・杉苗式百本ト六百本ニて、代老米ニて相求、則飯植為致置
- 一 御長屋屋根西側葺替之見積り
- 一 名古屋山中様御初難為御祝、南鏡老片被進
- 一 妙智庵半鐘久々願届有之処、当年弘法大師一千年忌ニ付、何卒届願通出来仕度旨内願申出ニ付、村方と熱談之上、時節柄ニも有之間、一統故障も無之候義ニ候ハ、其旨被申出候様申遣ス処、三月三日村役相談之上、志は押てわたり不被申義ニ候ハ、村方ニて古障も有之間敷と申事ニて、無子細様子故、何卒御願申上度と申出ニ候之共、此節ハ御留主中故、何分其趣江戸表へ可申上遣と申答遣ス
- 一 桃春院境内上り口ニ、切石ニて上り權之寄附、油屋民右衛門より致度と申事之由、和尚より申出有之ニ付、三庄屋へ、村方ニ故障も無之義ニ候ハ、不苦哉之旨尋候処、氏神境内結構ニ相成義、村内ニも子細は御座有間敷と申事故、其段和尚へ申遣ス、則半鐘兩様共江戸表へも申上遣ス
- 一 今般江戸表二月七日より十四日迄、四五度之大火事之由之処、

坪内権左衛門様御屋敷も御類焼之由ニ付、為御見廻祐左衛門君
谷幸右衛門宅迄出ル、尤於江戸表定て御見廻御使者ハ可相濟義
故、自分見廻之心得ニて口上申演、帰る

一 三井様正月四日ニ御帰国之処、為御土産二月二十九日辰右衛門よ
り手紙添、御惣客様之御品来、唐更紗風呂敷老杖宛、奥様・御
隠居様へ、朝鮮花かんざし老本箱入ニて藤江様へ、御巾着老ツ、
上藤様へ、右之通品来也、則来文面左ニ

以手紙致啓上候、然は榮吉様御儀今般火事場御見廻被為蒙 仰
候段、江戸表より申来候、此旨宜御達被成候様致度候、右得御
意度如斯御座候、以上

四月六日 河田唯右衛門

加藤辰右衛門様

岩塚東九郎様

山本祐左衛門様

猶々、本文被為蒙 仰候ニ付、村々高役金御老ケ所金九両宛御
取立、御差出可被成候、以上

一新加納御陣屋へ急々談義有之旨、河田唯右衛門より来紙ニ、祐
左衛門・忠右衛門兩人共十日ニ罷出候様申来故、出候処、北方
役所より懸合有之、此節二軒屋前猿尾普請尾張方より有之旨懸
合有之処、新加納表ニては一向懸合積無之間、不承知之旨申処、
前渡屋敷へ懸合、去々辰年以來申置と申事ニ付、如何之懸合ニ

岩塚東九郎様

山本祐左衛門様

打懸ニて上ニ

選状 古田安助 尚々廻文廻り留より返却之端書有

右返書岩塚より当方より認出候様ニ申越ニ付、草案認平島へ差遣
ス、則認方東九郎より至極と申、差出ス旨申来

御廻状人別御改之義、当廿日迄取調可差出旨委細致承知候、然
処銘々且那知行所村々之義は御直宛証文之例ニ御座候之は、取
調江戸表且那方へ可差出候間、左様ニ御承知可被下候、右之段
得貴意度如此御座候、以上

山本祐左衛門 岩塚東九郎

古田安助様

依之、村方・寺院・御家来分何れも人別書付差出有之様申達ス、
則先例之通、村方ハ当番庄屋より家別々人数男女相分、直紙豎
紙帳也、老本紙寺院之分ハ銘々ニ折懸ニて差出スニ付、則御証
文下人別左略之上、江戸表へ十五日出状ニ封入遣ス

人別御改之覚
一 人数七百五拾老人 濃州各務郡前渡村
内 男 三百九拾老人
女 三百六拾人

外ニ 僧老入・女武人

眞言宗 吉祥院

候哉之旨、河田・大塚兩人列席ニて尋有之間、辰九月来紙并返
翰共写為見可申と申、立帰り、両様共写為持遣ス、然処大塚認
ニて、両様写儘ニ落掌、此上様子ニより尚又可得御意儀も可有
之と申返書来

一米直段高直、其外諸色雜穀共高直ニて、貧人至て難淡之趣相聞
候間、御手当稗老人ニ付四升ツ、家別三拾三軒・人別七拾九
人之被下、此升數三石老斗六升、四月十四日三組各頂戴之もの
共難有旨御礼、御台所迄庄屋喜左衛門・仙右衛門連罷出ル

六月九日新加納廻文、三井より順達左ニ
以手紙致啓上候、向暑ニ御座候処、弥御安全被成御勤珍奉存
候、然は小普請金明十日御差出可被成旨、得御意度如斯御座候、
以上

六月九日 河田唯右衛門

加藤辰右衛門様

岩塚東九郎様

山本祐左衛門様

六月十一日廻状を以左ニ申来

当年御知行所村々人別御書上ニ付、来ル廿日迄御取調、当 御
陣屋へ御差出し可被成候、此廻状早々御順達、從留御返却可被
下候、以上

六月十一日 古田安助

加藤辰右衛門様

僧武人

尼四人

尼式人

坊主三人・女三人

坊主老人・女老人

都合七百七拾武人

右は私知行所百姓并寺惣人数相改、当年年当歳以上之男女相
改申候処相違無御座候、仍て如件

天保五甲午年六月

坪内嘉兵衛〇 御実名なし(花押)

坪 栄 吉殿

以上書御達申候

当午知行所村々人別書上之義、来廿日ニ取調可差出旨、古田安
助殿より去十一日御達御座候、然処銘々且那知行所村々之義は、
從且那 御直宛証文之例ニ御座候間、取調江戸表且那方之早々
可被差出旨、其節御達申置候、勿論先達て当年ハ人別御改可有
之間、七ヶ年以前之振合、当年之人別ヲ取調差下し候様被申付
越候ニ付、取調差下置候之は、彼地ニおゐて可被差出様存候、
此段御達申候、以上

六月十九日

河田唯右衛門様

山一

干魃ニ付新加納より廻文左ニ

以剪紙致啓上候、然は照統田畑旱魃ニ付、村々氏神之致祈誓候
之共、為指降雨も無之由、大神宮之雨乞御祈禱之義、御知行
所一統願出候ニ付、任先例、勢州安田伝太夫之今朝御飛脚差立
申候、此段宜敷御達可被成候、尤百姓方ニおみて右之趣相心得
可致信仰之旨、御支配下村々えも当方一同申触候、右得御意度
如此御座候、以上

七月廿七日

河田唯右衛門

加藤辰右衛門様

岩 東九郎様

山本祐左衛門様

十一月朔日平島ニテ請取來廻章之写左ニ

覚

一金三分拾毫又三分五厘 坪内太郎兵衛様御出分

一 右同断 坪内金三郎様御出分

一 右同断 坪内嘉兵衛様御出分

右は上中屋天神社葺替、其外下地等損所之分共、諸色并手間代
等、書面之通御名々様御出分御差出可被成旨、得御意度如此御
座候、以上

十月晦日

河田唯右衛門

加藤右衛門様

岩塚東九郎様

山本祐左衛門様

印一金六兩也 覚

右之通、当午小普請金儲ニ請取之申候、以上

午十一月十日

河田唯右衛門印

山本祐左衛門殿

印一金貳兩三分拾毫又六分六厘

右之通、当午三月より御役金月割を以請取之申候、以上

午十一月十日

河田唯右衛門印

山本祐左衛門殿

右之通ハ本紙江戸表へ封入差下し

覚

印一金三分拾毫又三分五厘

右之通、上中屋天神宮御社葺替入用割賦当御差出請取之申候、

以上

午十一月十日

河田唯右衛門印

山本祐左衛門殿

一 遠州中泉拝借金証文書替之義、江戸表ニテ御本家様へ被呼出御
沙汰之事、其上郷宿松田屋忠兵衛代池田屋勝助ト申もの來、証
文取調、三口金高三百廿貳兩毫分永拾七文九分当午御貸附元、

外不納金利金五百拾三兩永百四拾四文八分ト、又外金三兩貳分

永百七拾三文四分ハ去巳十二月一ヶ月不足分

右之通拜証文調印済、相渡ス

覚

一 銀百拾貳分四分毫厘

右は当夏勢州之雨乞諸入用、書面之通割当申候間、来十九日御
老入分前書之通御差出被成候様致度存候、右迄廻状を以得御意
候、以上

十二月十六日

河田唯右衛門

加藤辰右衛門様

岩塚東九郎様

山本祐左衛門様

右廻文平島より為持、東九郎より左ニ申越

以手紙——、然ハ河田氏より廻状——然処御老ケ所分書面之通
ニ御座候哉、又ハ七千石ニテ百拾貳分四分毫厘ニ候哉相分り兼
候、一昨年雨乞之節ハ銀三匁九りほと相当り候様承知仕候、右
等之処御勘考御報ニ被仰下度、如此御座候、以上

右返書ニ、何れ御老入分前書之通りと有之候へは、御老ケ所ニ
は相違無之哉と存候え共、余り多分之事、右之わり合ニテは七
千石ニテ金拾貳兩三分貳朱程故、上下合ハ金貳拾六兩ト拾三匁
七分四リト相成候事故、十九日ニ祐左衛門可相伺間、御相談之
上、以後之例ニも可相成事、能々尋島之上御差出し之方可然旨、
忠右衛門へ東九へ申遣ス、十九日平島へ向参り候処、認方不宜

大割金共之由ニテ、左之通請取書

覚

一 銀三匁八厘

雨乞御出分

一 同百九匁三分三厘

大割御出分

わり印 銀百拾貳分四分毫厘

右之通御差出、儲ニ請取申候、以上

午十二月十九日

河田唯右衛門印

山本祐左衛門殿

(表紙)

天保六乙未年記録
御用部屋

天保六年乙未記録(目録二八日記二有之分も
不残筆置間不見分八日記二有之也)

- 殿様江戸御逗留御留主四年目
- 一 寺社御奉行脇坂中務大輔より円満院様拝借被呼出
- 一 庄屋与平・仙右衛門休役願・同跡役申付方
- 一 安中十右衛門殿切通奉行去午霜月より当正月廿日右御免一条
- 一 山東三軒屋前溜池普請一条
- 一 伊勢山田拝借分借五分金駈合
- 一 御屋敷向井戸凌之事
- 一 喜左衛門・久兵衛江戸行四万金(漢)
- 一 今尾計之助・同半内格式被仰付為知状留
- 一 下野国日光宮様御領分九賀村百姓国次郎後家内野にて病死一件
- 一 中屋天神社葺替ニ付遷宮一件
- 一 高役金延引申出方・同催促申来事
- 一 大垣金江戸出し懸合一条ハ借金留ニ相記、爰ニは略ス
- 一 松本慈照寺入院仏

日記一月

- 江戸表へ平島・前戸村(マゴ)印鑑遣ス
- 一 庄屋金右衛門休役
- 一 大垣金江戸出し懸合
- 一 行倒病死日光領懸合

但し日記二有之分也

- 一 二軒屋前普請場一件ニ付笠松出ル
- 一 御門先橋左右堀凌
- 一 大戸棚求
- 一 手品場北堀凌
- 一 御庭井戸凌
- 一 高役金日延願

日記三月

- 一 本郷西組庄屋東組市右衛門へ預
- 一 表六疊間畳表替
- 一 孫市・勘六・岡三郎国元御家来分

日記三月

- 一 奥様因幡桜御見物
- 一 上中屋天神遷宮
- 一 巾下池之樋伏替願出ル
- 一 殿様四年目江戸表より御帰国一件 一 御帰国御届書
- 一 野口貞兵衛へ為挨拶沓両添手紙
- 一 伝馬助郷寄会 一 同断ニ付辰右衛門江戸下り

御三所領村役御祝酒被下相楽 一 江戸へ御状出し

- 一 寺社御奉行所被仰渡御領村々へ為誦聞
- 一 江戸御入用金三井へ御割合之懸合一件
- 一 御土産物求方・同配り方
- 一 善光寺参り村四人之老母共病死ニ付伊州より駈合一件
- 一 高役金駈合手紙数通留 一 北島岡字井村方返納催促申聞
- 一 江戸表へ忠右衛門急御用ニ付高島様戸村様御来状にて出府一条
- 一 安池新八郎様御病死 一 御触書之義御陣屋へ懸合
- 一 大雨にて荒所有之山東方へ見分
- 一 脇坂様より御差紙喜左衛門御尋被呼出
- 一 御具足虫干之台出来
- 一 道中御奉行曾我様より御差紙大垣金被呼出
- 一 忠右衛門尾州宮駅より大坂并京都行
- 一 御本家様定火消ニ御転役 一 庄屋喜左衛門退役俸へ被仰付
- 一 上中屋天神枯木払代銀預り 一 久昌寺ニ妙見堂建立願
- 一 本願寺御通行之節目録之不足百疋常貞寺より届之事
- 一 水流し式つ出来之事 一 久昌寺境内弘木願之一件
- 一 山田五分金懸合ニ伊藤孫十郎来一件
- 一 作州へ御飛脚安池様より御願ニ付被仰付一件
- 一 中屋天神瑞籬出来之願一件 一 弁次江戸行借財方
- 一 久兵衛江戸帰リニ付五十兩取賄方 一 三井山御葺狩
- 一 薬師前へ大挑灯御奉納 一 祐左衛門病氣隠居願

天保六乙未年々中記録

- 一 殿様去辰年九月駿府御加番以来御留主四年目
- 一 寺社御奉行脇坂様より御差紙、二月十日御差日にて、去年十一月廿日附同廿九日飛脚到着、村方三井御殿金請印之もの共七人被呼出ニ付、当春村役仲間早春より下り人評決出来兼、漸十九日ニ圖取致し、喜左衛門ト久兵衛廿六日立ニ江戸行、委敷ハ日記并拝借方懸合留ニ有之ニ付、略て不相記、路用金三兩渡、道中間屋帳も調相渡ス、御差紙ハ冬以来当御屋鋪ニ預り置、此度相渡遣ス、白木状箱ニ入油紙包、表札ニ御判物ト認遣ス、御進物之さき干等為持遣ス
- 一 庄屋与平去冬已来病氣之処、第一庄屋役迷惑之旨申ニ付、親類兵左衛門を以内願申ニ付、与頭より為相願候方ニ申遣ス処、左

之通書面持出ル、先年茂兵衛之様ナ気分之由申ニ付、早速休役申付、跡役ハ兵助倅民右衛門へ、当分代役之心得ニて相勤候様ニ申付、願左之通

乍恐以書付奉御願申上候

私義格別之以御慈悲、御役義相勤罷居候之共、私宅人外ニ身替等も無御座、御高相統出来兼候程之仕合、尚又先前御役儀蒙仰候てより、愚昧之私既折節病氣、則御用向差懸り候度毎ニ究宅^(此ノ)仕、自然と病氣日増ニ相重り、最早此節必至と相勤候間、御憐愍之上休役被 仰付下置候様、幾重ニも御願奉申上候、此段乍恐急卒御聞濟被 成下置度、尤跡役之義は是又御目鑑ニて被仰付下置候ハ、難有仕合奉存候、以上

天保六年未正月

願人庄屋
与平

兵左衛門

金右衛門

御地頭所

御役人衆中様

右之通御願奉申上候ニ付、奥書調印仕差上申候、以上

当番庄屋

喜左衛門印

一 山東庄屋仙右衛門も同様休役願之義は、本郷喜左衛門・北島新左衛門節々相願候之共、為指申立と申義も無之ニ付承流し致置、殊ニ山東之義は地所改一条も不片付間、尚更急度休役ハ不相成旨、追々申聞置候之共、仙右衛門義は差当り難決と申は、

取立時等繁多之節ハ眩暈差発り候て、旧冬勘定時ニも手水場ニ倒候程之義ニて、頼ニ難勤旨申ニ付、病ニて難勤義は無致方、併兼て申聞へ改地一件も不相濟義故、何れ勤中同様ニ心得、当分帳面預ニても可申付哉、何れ願意認取差出様ニ申付候処、左之通認差出ス

乍恐奉願上候御事

一 私義追々御願申上候休役之義、至て難決仕候義ニて、御用向差掛り候節、第一御年貢取立時等、繁多之節ハ眩暈仕、帳合出来兼候間、御上様御目鑑ニて跡役被 仰付下置成共、又は地所之御改一条も不相濟義故、右相濟候迄親類共之中へ帳面相預、差添相勤候様ニ成共、差掛り病難ニて難相勤、難決 御賢察之上、早行願之通休役被 仰付候様奉願上候、以上

天保六乙未年正月

願人庄屋
仙右衛門

組頭
新左衛門

御地頭所
御役人衆中様

(十世)

一 奥州磐城御家中安中右衛門殿、去年十一月十二日着陣ニて切通奉行被 仰付候旨、為知御来状も有之、御直御祝書も御代筆取計、往返御文通有候之共、御留主中故、当方へ御入来之義ハ御帰国之上と申事ニ候処、当春右陣屋詰御免之奉書到来ニて、十三日御暇乞旁御留主伺と申御入来有、御土産相馬焼天目沓ツ・皮茸沓袋・磐城名産うき、武ツ御持参有之、御隠居様之御逢達て被相願候之共、折節御気分御勝不被遊候間御逢無之、弁次

案内ニて入来也、右為御挨拶十七日ニ忠右衛門御差出、御隠居様より之御口上ニて、此間御挨拶、美濃紙沓束料拾五五分紙増ニて取持参、廿日ニ切通発足之由、笠松迄弁次ハ自分見送り候由ニて、十右衛門殿より此間御使之御札有之

(屋敷)

一 山東三軒前溜池普請、中堰より東沓反歩程深沓尺渡ニて、上土北南へ寄、南ハ巾三間程ニ東西式拾間程、北ハ巾五間ニ東西長式拾間程之処、永代右普請落札主へ新切畑も控候様ニ申付、入札土坪凡五拾坪有、落札南五拾七匁五分、北五拾四匁五分、又夫より東凡沓反歩程ハ深沓尺堀ニ渡、上土東南北三方へ寄、不残新切発畑ニ致、同様地面水控ニ致様ニ入札之処、落札南式両式拾六匁五分、北式両八匁、四口合テ金六両沓分拾式匁、東ハ山東方、西ハ本郷方へ落札也、正月廿二日より歟初、廿四日ニ見廻り祐左衛門・忠右衛門出ル、案内仙右衛門、尤右普請下目論ハ内野北島惣百姓願ニ付、十八日見廻り出役之処、庄屋仙右衛門・組頭新左衛門案内ニて、坪積り仕様等申渡し、仙右衛門方ニて昼支度、酒蕎麦出ス、十九日惣村中三組百姓入札也

一 伊勢山田拝借百両之内、追々返納済、残四拾両ニ相成候処、古雅楽之助へ分借五両金、元利返納済之節師職より出金之筈ニ付、式拾ケ年来元利盛立利倍スレハ凡七拾兩余ニも可相成、年々利足計ニても十四五兩ニも可及、元金共ニて式拾兩ニ相成事故、旧冬十一月中より文通を以右出金之懸合申遣し置候、正月十八日ニ御師より名代飛脚浜田佐右衛門ト申仁差越、妙智ニ止

宿、廿日迄逗留色々懸合、何れニも佐右衛門ニてハ否答難出来趣ニて一ト先引取、近日之内答方書面ニて申参る筈、右委敷義ハ日記#借財方懸合留ニ有之故、爰ニ略ス

一 大垣宿場金去年已来拾三ヶ年之間利足不納ニ付、此度宿方より江戸表へ出願申立候旨、新加納御陣屋詰迄懸合、御預代官子安甚内・中西文平より来紙之旨、十一日ニ河唯より手紙ニて呼出申越、十二日ニ返翰相渡し、印方大垣へ差出候様申達しニ候間忠右衛門出ル、来紙之趣ニては御本家役人中添証文も有之様申来ニ付、大塚茂市より再応祐左衛門呼候之共行違ニ成、証文下ハ不相分候之共、御本家様御役人宛添証文之覚ハ無之旨申返翰持参、郷宿割菱屋案内ニて、掛り御代官子安甚内殿内宅ニて委細及内願、村方#口上共必至難決之旨申立、廿六日迄ニ村方出情納方取究可申出答ニ懸合済、十四日ニ引取、委敷留は拝借方留#日記ニ有

一 正月廿四日御屋敷両井戸渡之積、役林藏・忠藏・彦藏来処、先御茶間より始、御庭之方ハ出来不申、近日渡之積り、右は旧冬已来一向雨不降乾候間、存付候事也

一 御庭之方二月十三日、役彦藏・喜八ト林藏ハ井戸へ入

一 今尾計之助・同半内格式被仰付候旨、左之通申来ル

以手紙致啓上候、然は今度今尾計之助義御近習格、#今尾半内義御中小姓格被 仰付候間、此段為御承知申上候、宜御逢可被成旨、得御意度如斯御座候、以上

正月廿三日

河田唯右衛門

加藤辰右衛門様
岩塚東九郎様
山本祐左衛門様

二月十八日朝山東庄屋民右衛門届出ル、昨夜山鼻岩下ニて行倒

病死仕候、本郷方竹右衛門も来合セ居候間、即刻相改ニ兩人参
り候処、下野国日光宮様御領分九賀村百姓国次郎後家并悻之
旨、往来一札も所持仕由ニて、委敷ハ日記ニ相記置間爰ニ略ス、
死骸取片付、小兒四歳ニ成、下役ニ相預、着物も一向無之間古
給式枚為着、扶持方宛行候答ニて番人方へ遣し候段申出ル、大
安寺弟子幸法用ニ参り合セ候間、誦經相頼為埋候由、下役兩人
働賃老朱遣ス由、大安寺へも式百文遣ス、酒飯等庄屋民右衛門
方ニて取計、先方へ小兒迎人参り候様ニ、村役より書状遣し度、
此節ハ江戸表ニ御逗留中ニ有之間、何卒右之始末御用所より申
上、江戸表より日光へ御出状被下候様、村役より達て相願
態以飛札致啓上候、然ハ其御村方国次郎後家、当地内宇内野
方觀音岩と申処ニて、当未二月十七日夜被致病死候間、村役立
会相改候処、別紙写之通往来一札も有之ニ付、当村之作法ニ取
計片附申候、左様ニ御承知可被下候、然ハ跡ニ相殘候小兒、当
時村内ニ預り置為致養育置候間、此段着次第早速迎人御差越、
御引取可被成様致度候、此段為可得御意如斯御座候、以上
未二月十七日 坪内嘉兵衛知行所
濃州各務郡前渡村

下野国
日光御宮様御領分
九賀村御庄屋
清五郎様
庄屋 民右衛門印
祖頭 兵 助印

右行倒所持之品并往来一札有之間、写取封入遣ス、左之通

往来一札
此女年四拾四歳ニて、本国下野国 日光宮様御領九賀村国次郎
後家、并子供老人男年三歳、右式人之もの宗旨は代々真言宗ニ
て紛無御座候、此度依心願坂東順拜、尚又四国讃州金比羅大権
現之拜参ニ罷出候、道中致路行候之は町々在々 御役所表宜奉
頼候、若シ死仕候は此方之不及御届、其所之御作法ニ御片付可
被下候、為念往来一札依て如件
天保五年六月日

諸国村々町々
御役所衆中
下野国九賀村
同村庄屋
正仙寺印
清五郎印

往来一札 一金比羅様御守一封
一 銀老朱老ツ 一 錢廿四文
一 銀かんざし老本但し長四寸 一 針六十八本但し木綿針六十本
一 はさみ 老丁 一 古わん 老ツ
一 古キ手風呂敷老ツ 一 しゅはん下帯等もなし

以手紙——、然ハ上中屋天神社上糞出来ニ付、来廿五日遷宮可
有之様子及承候、右は御代参御差出之先例御座候、旧記吟味い
たし荒増書拔懸御目候間、御両所様ニても御吟味可被下候、御
代参之義 御留主中ニ付、如何御取計可被成思召哉、先例も御
座候義、勿論此已後御遷宮数年相立不申候ては有之間敷奉存候、
差越候乍儀、御代参御差出御座候様致度奉存候、宜御相談可被
下候、第一御用意有度品は白木目録台但し足付也、右御用意御
座候様いたし度奉存候、案内之週文到来いたし候上、猶又御相
談可得貴意候之共、先々為御内談如此御座候、宜御承知可被下
候、以上

三月二日
岩塚東九郎様
山本祐左衛門様
書拔覚

一天神宮上糞 寛政十二庚申年六月廿五日
二月廿二日新加納より週文ニて申参候

御代参
山本祐左衛門
岩塚清左衛門
加藤辰右衛門

一天神宮九百回忌御神事
享和二戌年十二月廿五日
白木目録台ニ載ル 松原牧右衛門
山本祐左衛門

御初穂 御名下札 加藤辰右衛門

小奉書折懸包金水引熨斗添
一 御代参着用麻上下
一 供之義草履取計之趣ニ候
今般ハ若党・草履取召速申様致度事
一 上中屋庄屋宅へ先罷出上下着用、夫より彌宜次郎左衛門方へ
罷出候趣ニ御座候
一 席順之義は委敷相記し有之候之共、右ハ御面会ニ御咄可申奉
存候、以上

天保六年未三月廿二日
右之通り申越候之共、御当方之義ハ兼て江戸表へ伺置候処、否
御下知無之ニ付、最早近日御帰国ニも有之候之は、御帰り後相
動候方ニ、若々御帰りに前ニ案内有之候ハ、当方より断可申
遣旨、返書認遣ス

三月廿三日
河田唯右衛門
古田安助

加藤辰右衛門様
岩塚東九郎様
山本祐左衛門様
尚々、来廿五日已之刻御遷宮之積之由、此段も御承知可被成候、

以上

昨日御廻文拝見仕候、然は明廿五日上中屋天神宮遷宮ニ付、先例之通被仰下致承知候、然先達て中右之趣江戸表銘々旦那之相達置候処、今以何等之沙汰も不被申越候ニ付、明廿五日拙者共代参出席之義は御断申度、此段御承知可被下候、右午御報得貴意度如此御座候、以上

三月廿四日

山本祐左衛門

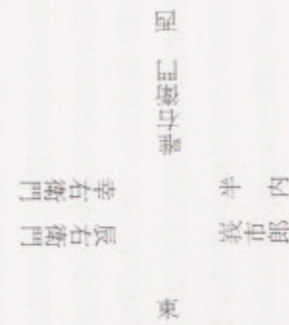
岩塚東九郎

古田安助様

河田唯右衛門様

当日廿五日無滞遷宮相濟候由新加納より唯右衛門・半内・巖市郎ト松本より幸右衛門、三井辰右衛門

席ハ



席付ハ参詣之もの咄にて承り留置

候、右ニ付、去文政七年申年十二月中、御手前様方より高役金一件ニ付御差出御座候義共有之候、旁夕以当方にて御支配下百姓ともへ利解申聞可申候、若夫ニても行届不申時ハ、去文政七申年右一条ニ付御懸合取極有之候、其懸り方へ可申達哉ニ奉存候、左候ては彼是手数ニも相成候間、今一応利解申聞可申哉ニ候間、御支配下村々百姓惣代両三人宛、庄屋より召連当方へ可罷出候旨、被 仰聞被下候様致度、右御報旁如此御座候、以上

卯月朔日

河田唯右衛門

岩塚東九郎様

山本祐左衛門様

一 殿様江戸表御発駕三月廿三日、道中十一日振在所帰着之處、大田川出省之旨、御先触朔日ニ着、同日夜尚又、二日延引廿五日御発足、四月五日御帰着之改先触到着、大田河出水にて五日大田御泊り之処、鶴沼迄御越にて、同夕御迎人一統出ル、六日四ツ時御帰館也、村方之御祝酒当日御着之上直ニ被下置、尤御門先にて、七日ニ薬師・常貞寺・中屋天神・少林寺へ御参詣、御供立毎年元日之通り、御初穂薬師へハ金巻朱、其外元旦之通り、新加納御陣屋へ御届左ニ

御届書

杉原半切ニ認

一 去月廿四日江戸表発足、道中十一日振在所帰着之處、大田川出水ニ付、昨六日無滞致帰着候、此段御届申上候、以上

廿七日ニ彌宜河田左衛門入来、天神御備餅ト菓子一包持参にて、去廿五日 御本家様より被仰付候ニ付、天神遷宮相濟し候ニ付、御備献上ト申口上にて持参也、羽織袴供老人連

一 松本慈照寺入院跡、三月廿日ニ住寺并庄屋重次郎来、明廿八日四ツ時御出張被下度旨案内ニ付、則当日忠右衛門御使者相勤、為御祝儀三十疋先例ニ準持参供

一 大垣宿場金去年已来十三ヶ年之利納滞、当春は宿方より道中御奉行所へ出願之趣にて、御預り代官子安甚内・中西文平より新加納陣屋役人迄懸合、二月八日附にて来ニ付、同十日唯右衛門より右之旨達し有之、十二日ニ忠右衛門大垣行、懸合一件は借財方留ニ委敷故爰ニ略ス

右返書左ニ

御紙面拝見仕候、如仰暖相成候之共、弥御安全被成御勤珍重奉存候、然は去月廿八日御談申候高役金取立方、御立帰り早速御支配下知行所百姓御呼出し、再応敵敷御申付被成候之共、兼て呉々申歎候義にて、去辰年以来追々調達御下金被成候義故、下地之困窮等難決申立、早行相納不申、何卒延引相願候義にて、幾度御申聞御座候ても同様之義申候ニ付、御取立不行届申候由、依て取替之義も難被成御座候也、此義も御銘々御主人方より、知行所取立差出候様ニ申来候義にて、当御陣屋之被仰聞、立替御願被成候ニは申不来候間、今更御手前様ニも御頼と申も難被成候間、今一ヶ月之処延引之義取計ニ被成度旨、委細ニ致承知

四月七日

坪内御名

折懸ケ包大手紙 宛なし

御帰館四月六日也、昨夜鶴沼沼野口定兵衛ニ御止宿、御迎人御家来分・御出入・村役、宵より追々ニ参着、御行列書左之通

御長持人足八人掛り、御先乗掛水瀬席平・御先乗車馬御若党山本小弥太

足輕後右衛門御具足式人御立弓持式人御箱対四人・徒士政右衛門

御刀筒平左衛門御鎗式人御駕籠陸夫御箱式人御草履利八

御茶弁当一人・御牽馬口式人杏籠一人・御医師春貞茶籠持御留

主居山本祐左衛門 駕籠三人合羽籠・竹馬・押式人羽織

業掛安次・乗掛

御着四ツ頃、直ニ村方・御迎之もの・御附方へ、御祝酒大樽式ツ鏡抜、於御門前被下、五斗計も吞

一 同七日薬師・常貞寺・中屋天神・少林寺へ御参詣、年頭通り御初穂、但し薬師へハ金巻朱御備也

一 同九日村役・御出入、并調達金人別御頼四十老人へ、御祝酒被下也、御目通にて御懸命有之

一 十三日三井平島村役御祝儀ニ上ル、尤先達て従当方村役より伺候迄役之処、尚又前日申出ル、五升ニするめ十枚添持参也、平島式人・三井卷人・上戸より式人、中野村ハ江戸立ニ付不参

御祝儀上物覚

一 酒老升ツ、
 常貞寺
 久昌寺
 妙智庵
 桃春院
 吉庄屋
 仙右衛門
 おしゆん
 おふよ
 おしの
 三井
 平島
 東九郎
 市四郎
 忠左衛門
 中野
 平島
 彦九郎
 東吾
 こよの
 すきよ
 草井
 巴右衛門

一 酒三升
 三井
 辰右衛門
 代助
 両人

新加納
 芦庵

一 式升ツ、
 浅野雅兆
 三井
 清左衛門
 ミリン酒同所
 佐右衛門

一 式升ツ、
 平島
 おゆう

うぬま
 玉泉院
 刈谷竜見
 一肴切手式夕
 茂左衛門
 計之助
 同一
 ちりめん
 牧右衛門
 ちりめん
 ちりめん

一 酒老斗
 御家来九人
 一同五升
 御出入四人より
 一同五升
 豊節式連
 小島市兵衛

三井平島村役
 一同五升
 河田只右衛門

四月十五日新加納御陣屋へ席平持参
 一筆啓上仕候、薄暑之節御座候え共、益御勇健被成御座、珍重御儀奉存候、然は先般出府仕候処、不相替御用番之御方之御同道被成下、其上段々御懸意之御事、忝仕合奉存候、右御礼為可申上如斯御座候、恐惶謹言

四月十五日
 坪内嘉兵衛
 定昌(花押)

中奉書ニ認直紙封
 坪 栄吉様
 参人々御中

此達書平島牧右衛門認越候え共、文面不束故、此方様改被仰付候、左之通申達書

一 去巳年十一月中寺社 御奉行所より之御達と申、新加納御陣屋ニおゐて、向後 御三所様御知行所村々、公辺は勿論他役所へ相懸り候義は、坪内栄吉様御知行所と可相認と厳敷申付ニ付、無提請書調印いたし候一件、於江戸表寺社 御奉行所臨坂中務大輔様、天正年間已来御札ニ相成、右ヶ条始末当未二月廿四日

濟口被 仰渡、御三所様御家筋之義は 御朱印御表坪内栄吉様と御同家にて、万石以上ニも無之吃と立派之御家柄ニ付、於公辺は何所迄も御分家ニ相違無之旨被仰渡、則御請書も御差上にて、去巳年十一月新加納にて之調印書付は、其筋役人之不届ニ有之、御奉行所之御引上ニ相成候間、向後は先前之通相心得、猶此上ニおゐても、公辺勿論他所へ相懸り候義、訳て 御名前相認候節は 御当家様御知行所と相認可申候
 前件之通能々相心得、村内一統申触、承知為致置可申候事
 天保六年乙未四月十五日

御剪紙致拜見候、如仰向暑之御弥御安全被成御勤珍重奉存候、然は下切村源三郎老母之・前渡村清右衛門母之・莊右衛門母之・由右衛門母之、右四人連にて、当四月十九日其御地善光寺之参詣之戻り、ひて儀足痛之上風邪にて難儀之由を以、逗留之儀御頼申入候ニ付、御村方観音堂之四人一同逗留御申付被下候処、右きの外兩人義も風邪相煩候故、医師御懸ケ薬用御介抱被下候え共、養生不相叶、ひて儀当月三日暮六ツ時相果、その儀翌四日五ツ時頃、きの儀四ツ時頃、ひの儀八ツ時頃追々相果候間、其段 御領主様御役場之御出訴、御検使御見分之上、右四人共死去ニ無相違候ニ付、死骸仮埋ニ所持之品々御村預ケニ被仰付候間、御村方浄土宗無常庵境内之仮埋ニ被成下、然ル処、きの儀送り書付所持罷在候ニ付、下切村之御掛合被下候間、ひて外兩人儀前書之始末、前渡村之及通達、同村人別ニ無相違

候ハ、銘々身寄之もの罷越、死骸井所持之品々可然取計候様、御紙面之趣委細致承知候、則早速前渡えも及通達候処、ひの外兩人とも同村人別之ものニ無相違、依之身寄之もの共不取敢可罷出処、いづれも困窮、殊ニ遠国之儀、別段不差立候え共、当方ニおゐても余り帰国延引ニ付、為迎先般前渡村周右衛門と申もの差立候故、定て御地着可致候間、死骸取置方井所持之雜物等之儀、同人より御頼可申入候間、宜御取計可被下候、勿論右病死一件ニ付、故障ケ間敷儀等曾て無御座、永々逗留罷在、段々御厄介相懸ケ、忝仕合奉存候、此上御役場等之儀、宜御取計可被下候様御頼申上候、右之趣貴報旁可得貴意如斯御座候、以上

五月十三日
 坪内帯刀知行
 濃州各務郡下切村
 庄屋
 長兵衛

坪内嘉兵衛知行
 濃州各務郡前渡村
 庄屋
 喜左衛門

真田伊豆守様御領分
 信州水内郡小市村
 御名主
 荒井源右衛門様
 新左衛門

猶々、本文之の外三人病死ニ付、身寄之もの共及愁傷候段、被入御念候御端書之趣、夫々申通候処、一同宜御礼答之儀申出候

儀ニ御座候、依之前渡村一同連名を以て貴報候、此段宜御承知可被下候、以上

封上表

真田伊豆守様御領分

信州水内郡小市村

御名主

荒井源右衛門様

美濃国

從各務郡

封し裏ニ

坪内帯刀知行所

下切村庄屋

長兵衛

坪内嘉兵衛知行所

前渡村庄屋

喜左衛門

新左衛門

天保六乙五月廿八日江戸表御本家様へ、高役金御三名ニて御断手紙、平島ニて認メ、新加納御陣屋向出し方侍也、文言左ニ

以手紙——、然は出府中家来方之向、高役金之儀御沙汰有之、猶又帰村之上陣屋よりも申来候之共、右は兼て御承知之通り、拙者共知行所拝領高は別段之儀故、前々之通り、以来出金御断申候間、御承知可被成候、以上

五月

河田喜平太様

御三名

六月

加藤

松原

山本

右之趣三人より陣屋へ申入候筈、岩塚氏へ引合、帰リニ三井へより相談、認方三井ニて出来之筈ニ談事遣し
天保六末年木曾川通石田村欠所取繕普請之答へ申遣候留メ、下書左ニ

以手紙致啓上候、向暑之節ニ御座候之共、弥御安泰可被成御座珍重之御義奉存候、然は昨日被仰聞候木曾川通石田村欠所、大破ニ付取繕普請之儀銘々且那へ申達候処、被致承知候間、昨日被仰聞候御目論見通り宜御取計可被下候、右御答為可得意意如此御座候、以上

六月二日

山本祐左衛門

岩塚東九郎

加藤辰右衛門

河田唯右衛門様

猶々、昨日御沙汰御座候御役金出不足之儀、否や追て可得意意奉存候、此段御承知可被下候、以上

新加納陣屋より之手紙左ニ

御手紙致拝見候、然は先般 公儀御触書差進候処、御三所之儀先達て寺社御奉行所ニて、先々之通御分家ニ無相違段被仰出候間、御三所下村々えは御方より被相触候故、以来何事ニよら

六月三日岩塚東九郎殿より 公儀御触書持参、尤右ニ付御知行所之分は、銘々前々之通り相触申候間、以来は銘々屋敷へ陣屋表より申越候様申遣し度旨、内談有之、新加納御陣屋手紙左ニ

以手紙致啓達候、向暑之節ニ候之共、弥御安全被成御勤仕珍重奉存候、然は公儀御触書別紙迄通差進候間、御達可被成候、尤御支配下村々えも当方より相触候間、此段御承知可被成候、右可得御意如此御座候、以上

六月二日

河田唯右衛門

加藤辰右衛門様

松原牧右衛門様

山本祐右衛門様

今度東海道・中山道宿々橋取締候、御勘定評定所留役金井伊太夫、支配勘定田口岩藏之、御普請役・評定所書役差添可差遣旨、加賀守殿被仰渡之間、右御用序佐屋川通船路押埋之場所も見分爲致候間、御知行所村役人共呼出、相糺候儀も可有之候ニ付、諸事差支無之様可取計旨、被申渡有之候様存候、以上

未五月

右御触書持参ニて新加納陣屋へ申入候手紙左ニ

以手紙——、然は 公儀御触書別紙迄通御達被下、則相達候、然ル処当方三所之義ハ、先般於御寺社御奉行所、前々通分家ニ相成候旨、銘々知行所之分は屋敷ノより相触候間、以来何事ニよらす当方之御申越可被成候、此段得御意置候様被申付、如此御座候、以上

其御方之申進候上可被取計旨、御紙面致承知候、然処当方仕来とてハ、御三所不限、貝坂・築地御下とも、都て御達書類呼出とも直之取計来候義ニて、今般改て御三所ニ限り、被仰聞候通取計候儀ニ候哉、左候ハ、先般江戸表ニおゐて被仰出か又は御受書之類、以後心得ニもいたし度候間、御差越可被下候、当方之江戸表よりも、先前仕来之通と相濟候故其趣ニて相心旨、申越有之、遂々相成候ては御同前ニ迷惑、且は差支も出来可申、心得ニ致承知度候間早々可被仰聞候、右御報旁如斯御座候、以上

六月八日

河田唯右衛門

山本

松原

加藤

様

様

猶、本文否御懸合詰不相成内は、矢張是迄仕来之通取計候間、左様御承知被下候、以上

以手紙致啓上候、甚暑之節御座候之共、弥御安全ニ被成御勤珍重奉存候、然は先頃御陣屋表へ御連名ヲ以て及答候御知行所取扱方之儀、返書申来候、御先へ致開封致順達候間、御落手可被下候、右返書之趣ニてハ再答可申遣様子ニ奉存候、付てハ御両家様ニて御勤考御相談被下置候様被致度、此段被相願候、当方之儀何へとも御相談ニ相准じ可被申候、御手前様方ニも宜御勤考

可被下候、於私差当存付も無御座候之共、懸合詰迄ハ何れ手間取可申哉ニ奉存候、何分御勘考奉頼候、右御相談旁如斯御座候、以上

六月廿九日

加藤辰右衛門

松原牧右衛門
山本祐左衛門

猶々、来紙御先へ開封仕候段、御用捨可被下候、且又此間懸合申遣候御連名書状下書、致進達候間御落手可被下候、御銘々様御留置御座候様、乍憚奉存候、此下書御返戻ニ及不申候、以上右之通辰右衛門より申来、連名書状下書ハ先頃留置候ニ付略ス、新加納より之返書左ニ

御剪紙致拜見候、然ハ公儀御触等村々之相達、又は呼出候儀、貝坂・築地御下は勿論、御三所之分共、是迄当陣屋より直ニ取計候段、及御懸合候処、貝坂・築地御下は何れ共、御三所御下は先前之通御分家ニ無相違段被、仰出候間、何事ニよらず御銘々ニ御取計被成候故、御銘々之御達可申、勿論今尾州右衛門勤役中は、都て御銘々之及御沙汰、御立会之上取計候儀ニ付、其旨相心得、且御奉行所より御三所之御達書又は御請書類有之候ハ、致承知度旨、得御意候処、右は河田政右衛門懸リニ付、同人より通達無之候てハ難被遣、勿論当方ニても可相心得旨、御紙面之趣委細致承知候、右は先般得御意候通、当方之江戸表より申越候は、先前仕来通可取計旨達ニ付、当方仕来ニては、御触書又ハ呼出等之儀、御両家御三所御下とも直々取計来、

尤其品ニ寄候へは御銘々御立会之上取扱候儀は、州右衛門勤役

中は不及申、当時ニても其通取計候儀ニて、然ル処、此度御懸合之趣ニてハ、仕来ニ振れ御取計被成度由ニ付、左候ては江戸表より申越候趣意と齟齬致し候故、今般改て御三所ニ限り、被仰聞候通御取計ニ候哉、左候ハ、当方之江戸表より申来候趣意と相違之処、以来心得ニいたし度候間、御達書又は御請書類被遣候様申進候儀ニて、いつれにても宜敷候之共、畢竟心得方区々相成候ては指支も出来可申候間、今般御改正相成候始末致承知度、否早々可被仰聞候、右御答旁如此御座候、以上

六月廿八日

河田唯右衛門

古田 安助

加藤辰右衛門様
松原牧右衛門様
山本祐左衛門様

猶々、本文取計方之義、先般も得御意候通、いつれ御懸合詰不相成内は、是迄仕来之通相心得候故、左様御承知可被下候、以上

一 閏七月朔日、御本家火消御役被為蒙、仰候ニ付、新加納より為知廻文、平島より為持来、右来紙左ニ

以手紙致啓上候、残暑之節ニ御座候之共、弥御安全ニ被成御勤行珍重奉存候、然ハ御本家様今般火消御役被為蒙、仰候段、別紙之趣申来り候、就ては加藤より、御祝書御肴料例之通御差出ニて新加納陣屋之別段可被為入段ハ、重り候事故御止メ可然

閏七月朔日

松原牧右衛門

山本祐左衛門様

哉との義、此段御尤ニ思召候間、御許様御思召ハ如何ニ被為在候哉、何れ御同様ニ被成度思召候間、宜被仰上、其上乍御面例三井表へ、御同様御同心御治定之境、御返事被遣可被下候様奉頼候、則来紙都合四通御順達申上候、右可得貴意如此御座候、以上

閏七月朔日当賀

牧右衛門

祐左衛門様
覚

一 御祝書御肴代金百疋
右小書、折懸ケ包、金水引のし包添、御陣屋へ御差出しのミニて、別段、殿様方御出馬之御儀ハ御見合之事
一 御家老へ祝書も御見合之事
一 高役金之義は、先般江戸表へ御断被仰達候節ヲ以、私共より答之事

古田・河田へ返事之追書答へ

高役金之儀、御追書ニ被仰下致承知候、右は先般江戸表へ御断ニ被及候間、左様御承知可被下候

右之趣成ル答ニて可然哉、宜御加筆可被下候

別段申上候事

一 私共御陣屋之御祝儀ニ罷出候儀ハ、一両日中ニ御互ニ別ニ、折よき節見合可罷出候事

右之通御治定被成下哉、御思召も可為有、御窺之上、三井表御陣屋へ之御返事、宜被仰答可被下候、以上

右之通申来ニ付、御当方様御同意之趣松原・加藤へ申遣し、高役金返事三井へ認方頼遣、御歎状・御肴代取調、二日御陣屋出し、小弥太・祐左衛門自分御祝詞名代兼持行、文言は三井より下書同様略ス、御肴代先例ハ家老手紙へ封入候之共、此度ハ家老相止ニ付、水引かけ其儘、御直書添御差出シ

新加納より之廻文左ニ

尚々、本文之趣ニ付、御支配下村々百姓方高役金之儀、来閏七月八日迄ニ御取立、御差出可被成候、以上

以手紙致啓上候、然ハ榮吉様御儀当月廿日御登、城被成候処、火消御役被蒙、仰候、此段宜敷御達被成候様致度候、右之趣得御意度如此御座候、以上

七月廿九日

河田唯右衛門

古田 安助

加藤辰右衛門様
松原牧右衛門様
山本祐左衛門様

以剪紙致啓上候、然ハ榮吉殿家督之節御差出之御書状、様付故先代山城殿之御書状様相違ニ付、御尋可申旨則及御掛合候処、書方不調法之由、御銘々様より御差越御書状御引替

被成度旨 御申越、則御引替被成儀御覚可有御座候、其外御三名にて御申越之御書状も有之候、然ル処、金三郎殿・嘉兵衛殿御帰村後御差出し御書状より、御掛合も無之様御用ひ被成候は、去ル天保二卯年御懸合申候儀は、此節御用ひ不被成御心得候哉、各様より敬施之御仕向候へは、従当表も右准、存寄次第可被取扱候間、此段御承知可被成候、右可得御意旨被申付、如斯御座候、以上

八月九日

河田喜平太

坪内太郎兵衛様

坪内金三郎様

坪内嘉兵衛様

尚々、本文様付之儀ニ付及御掛合、御銘々様より御答被遣書状有之、然ルニ此節ニ至り相違ニ被仰越候訳、御銘々様御存寄之処可被成御申越候、以上

坪内太郎兵衛様

坪内金三郎様

坪内嘉兵衛様

五月廿八日附御紙面、閏七月十日着致拜見候、秋冷御座候之共、各様弥御堅固被成御座珍重御事候、然ハ御出府中及御掛合候高役之儀、猶又御帰村之上、陣屋詰従役人共及御掛合候処、各様御知行所御拝領高は御別段之儀故、前々之通、以来御出金被成御断候旨、被仰候趣致承知候、右は去ル文政六年十二月、拙者致御面談、夫々取極候之処、當時至彼是御差出方ニ付故障之儀被

付、如此御座候、以上

九月九日

加藤辰右衛門

古田安助様

大塚茂一郎様

猶々、本文否早々可申上候、両家へ被申通候ニ付、遅り候段御断申上候、宜御承知可被下候、以上

御切紙致拜見候、然ハ先達て栄吉様御家督濟之節差出候御祝書、様之字認候ニ付、飛脚之もの御留置にて、様之字と筆者之誤ニも有之候ハ、其訳御断申、認替差出し候様御申越被成候之共、其節及御答候通、全以認方書損ニも無之、御先代ハ勿論、其以前同様御家督之節御祝書筆格、惣て連名願書等旧記之通ニ御座候、全書損之訳ニ無之、先前より様認候事は相当ニ有之候処、近代様も認候之共、其節ハ御家督濟之義格別之御悦ニも有之、旁不当之認方ハ却て失敬之義と存候間、先前之通認候事ニ候へは、引替等申遣し候覚無之候、併其節之義は兎も角も、如御申越金三郎・嘉兵衛帰国後様之字相認候義は、今度出府中於、御奉行所被、仰渡旨も有之、其段は政右衛門殿も篤々御承知之事、親子之間齟齬も有之間敷と存候間、再応御子息ニ御承知可有之候、又様之字認候義は勿論相当之義ニ候間、強敬施之仕向とは不奉存候、然共、栄吉様より右ニ准し思召次第之御取扱可相成段、承知候様ニ被仰付と申儀、是亦如何敷奉存候、何れ御互ニ先祖御先祖之御蔭にて、銘々御知行頂戴仕候義ニ候へは、本末

御聞候ては、御面談之上取極候規定を御破被成候筋にて句切之儀ニ栄吉殿思召候、且各様方は別段之旨被仰越候之共、一切別段之筋無之候条、兎角規定致置候儀は堅御守、高役金之儀是迄御対談通御出金可被成候、尤遠路文通にて及御掛合候ては、往返手間取申候間、陣屋詰従役人共より各様之可及御面談旨、今便被申付候間、此段可被成御承知候、右御報旁可得御意旨栄吉殿被申付、如是御座候、以上

八月九日

河田喜平太

坪内太郎兵衛様

坪内金三郎様

坪内嘉兵衛様

猶々、本文高役金其外共御出金方差滞有之、御相談申上、以来御差出方取極ニ相成申候ニ付、各様諸願等直宛ニ被成度旨御願ニ付、右御出金方相濟、御願通諸願御直宛被成候様御達申候、今度高役金御出金方御断之節は、諸願も以前之通家老宛御差出可被成御心得にて之儀ニ御座候哉、此段も及御掛合候間、否御申越可被成候、以上

村々高役金懸合、古田・大塚三井迄出張候、御答加藤より陣屋出し候手紙之写

以手紙致啓上候、然ハ一昨日は御来駕被成候て且那へ被仰達候義ニ付、両家へ被申通之処、右一条内存之義有之候ニ付、今一応江戸表御家老中へ連名文通を以御掛合被申、御返書之否にて御手前様方之御談可被申被存候、此段私より宜得貴意候様被申

疎遠不相成様、御親ニ不奉存候てハ難相成義にて、往復文面筆格等及争論候は、御先祖へ対し候ては勿論、御第一御一紙連名ニ被成下置候、尊慮之程奉恐入候義御座候、此段厚御考勤被成候様、御申上為在度存候、尤此等之義は、今度於、御奉行所銘々家筋御糺之処、御裁許ニ相成候ては栄吉様御迷惑之趣にて、御免之御願も御座候由ニ候へは、何れニも旧例相当之通り、御互ニ親數御態篤ニ、毎度御直書之御取扱為在度奉存候、全以拙者共ニおゐてハ、御本家不敬之存寄聊以無御座候之共、貴様方より彼是故障ケ間敷、文面筆格等被申候ては、尚更相当之外ハ難認候、此段深御勤弁被成候様、御申上ニ預り度候、且又別紙ニ、拙者共知行所村々より高役金差出方ニ付、已來諸願書御直宛之儀も御申越候之共、是亦御直宛之外余人宛へは致方無之候、左様ニ御申上ニ預り度存候、右之懸合陣屋詰より有之様御申越ニ候之共、未何等之義も無之候間、願書等は臨時難計候間、此段御答旁得御意置候、以上

九月四日

坪内嘉兵衛

同 金三郎

同 太郎兵衛

河田喜平太様

為念御先祖より御親ニ之訳左ニ記置

寛永二

十二月十一日

殿 殿

殿

如此連名ニ御細筆太筆之次第ハ無之候様ニ奉存候、然ニ栄吉様より宛名認方御自名より細筆ニ認被 仰付候義は、第一 上様之被為恐候義と奉存候間、此段能々御考、厚御申上之方、貴様之忠勤と奉存候、御老人ニ異見ケ間敷義申候は如何敷存候之共、貴様杯とは雲泥ニ相違、拙者共三人ハ栄吉様と本末、永々御龜縁ニ相成候ては、御互ニ銘々先祖之不相濟、御一紙連名ニ被成下候 尊慮之程、重々御恐と奉存候、且又御子息政右衛門殿杯、大分之才子ニ候之共、未若年之事故、此等之処ニハ勘考薄之事ニも有之間、呉々忠勤之間違ニ不相成様、御教諭置御尤ニ存候、以上

九月五日御陣屋へ御差出し、御侍分持参之例

覚

一切支丹宗門從前々今以相改申候、先年被 仰出候御法度書之趣遂詮議候処、家来并知行所百姓切支丹紛敷者無御座候、依之銘々寺請証文取置申候、若此已後怪敷者御座候は早速可申上候、為其仍如件

天保六己未年九月五日 坪内嘉兵衛御印(花押)

坪栄吉殿

当未より新例御直書留

奉書ニ認、封直紙、当年初て宜様奉頼之御文言入、御三所御同様之答

二白、此廻状御順達之上留より御返却被成候致度候、以上

十二月十八日夜 御奥様御出産子之刻被遊候、三井表へ左ニ以手紙致啓上候、嚴寒御座候処、弥々御安全被成御勤珍重奉存候、然は当方 奥方昨夜子ノ刻被致出産、男子出生被致候、二方共至て丈ニ有之候間、右之段御手前様迄可得貴意候様被申付候、此段宜敷被仰上可被下候様致度、如此御座候、以上

十二月十九日

山 伊

加藤辰右衛門様

右之趣平島様之御而敬認メ遣し、其外、小林寺・岡崎芦庵之も為知之手紙遣し、村方・御家来は廻文、寺院方へも廻文出し

一 今月新加納御陣屋之御出産御届書御差出し候、御使席平御届書

一 私妻昨夜子之刻出産、男子出生仕候、依之来廿五日迄産穢引籠申候、此段御届申上候、以上

十二月十九日

坪内嘉兵衛

以剪紙申達候、然は 御奥様昨夜子ノ刻被為遊御出産、御男子様御誕生之間、此段御承知可有之候、為其如此候、以上

十二月十九日

山本小弥太 伊藤忠右衛門

安中弁治殿・永井岡三郎殿・宮川孫市殿・長瀬甚平殿 同席平・同竹右衛門・金子作右衛門・村瀬半左衛門殿

一筆啓上仕候、然は例年之通宗旨証文差出申候、宜様奉頼候、以後怪敷者御座候は可申上候、恐惶謹言

九月五日

坪内嘉兵衛

坪栄吉様

宗旨証文 御名 参人々御中

封上同様認

御家老宛別紙当年より略ニて、御証文二つ折御直宛ニ封添

十二月四日新加納御陣屋より廻状、平島様より御順達左ニ

以手紙致啓上候、然は新加納御陣屋より之廻文御順達申上候間、御落手可被下候

右ニ付、廻文御答書ニ様御認メ被遣可被下候事

十二月四日

伊藤忠右衛門様

山本小弥太様

以廻章致啓上候、然ハ古田安助儀、思召有之退役被仰付段、江戸表より申参、則申渡候間、為御案内各様迄此段得御意候、宜敷被仰達候様致度奉存候、右得御意如此御座候、以上

十二月三日

小島市兵衛

大塚茂一郎

加藤辰右衛門様

松原牧右衛門様

伊藤忠右衛門様

河田唯右衛門

鈴木藤右衛門殿

以手紙致啓上候、然は 御奥様昨夜子ノ刻被成御出産、御男子様御誕生之間、右御承知可被成様得貴意度、如此御座候、以上

十二月十九日

山本小弥太

伊藤忠右衛門

吉祥院

桃春院

常貞寺

久昌寺

妙知庵

新加納へ大割金答、平島様ニて御認、陣屋へ為持被遣候、左ニ御手紙致拝見候、然は一昨日ハ当未割銀十九日迄ニ出金候様、御申越之趣申達候処、元高差分ケ明細帳一覽之上出金方取計候様被申、付テハ午御世話、割元微細書御写し御見セ可被下候様御頼申候、右可得御意如此御座候、以上

十二月十九日

山本

松原

加藤

河田唯右衛門様

大塚茂一郎様

加藤様

山本様

松原

右之通申達候間御写し置可被下候

一 廿日新加納御陣屋より大割懸合一件返書三井より順達御手紙拝見いたし候、然ハ当未大割銀今十九日迄ニ御出金候様

申入候処、元方仕分明細帳披見之上御出金被成度候よし、承知いたし候、然処御用繁ニて写相認差進候儀は出来不申候間、明朝ニも貴様方御揃御陣屋へ御出、御披見可被成候、右御返事申入度如此候、以上

十二月十九日

大塚茂一郎

河田唯右衛門

加藤辰右衛門様
松原牧右衛門様
山本小弥太様

十二月廿四日御七夜御内祝被仰付、赤飯用意、廿三日ニ糯米三斗六升・交米老斗式升・大角豆七升・賄五斗ノ積り、御配り方左ノ通添手紙取調
一筆致啓上候、余寒強御座候処、先以其御上様被為揃益御機嫌克被為成御座、目出度御儀思召候、然は今日は奥様御七夜之為御祝、赤飯老重錫相添被成進上之候、可然様御取繕御披露可被下候、此段御手前様迄從拙者宜得貴意旨被仰付候間、如斯御座候、恐惶謹言

十二月廿四日

伊藤忠右衛門

松原牧右衛門様

但し結状杉原也、三井へハ左略ニて相当ニ相認

其外岡崎樹仙・春貞・常貞寺・吉祥院・松原金吾等へ手紙添、文言程合それ〳〵左略有之、村方へ触

錫老わ廿枚也

御出入三人酒三升

村役五人五升

山廻り万藏老升

寺院方老升ツ、

吉祥ハ扇子式御守札

村方より金式百疋

忠右衛門より饗節老連ニ

小弥太末広

岡三郎より白絹三尺

御座着二重 老升

御座着 老升

十の廿枚 老升

式升 老升

式升 老升

式升 老升

式升 老升

式升 老升

式升 老升

式升 老升

式升 老升

式升 老升

式升 老升

式升 老升

式升 老升

式升 老升

式升 老升

式升 老升

式升 老升

式升 老升

式升 老升

式升 老升

久昌寺

桃春院

吉祥庵

妙智庵

みちよ

弁次

孫市

席平

勤六

竹右衛門

半左衛門

作右衛門

藤右衛門

岡三郎

以回章申達候、然は今日奥様御七夜之為御祝、赤飯老重宛各錫相添、別紙名前之銘々村役・御出入へ被下之候間、各頂戴可有之候、以上

十二月廿四日

御用所〇

三組庄屋

組頭へ

以回章申達候、然は今日奥様御七夜之為御内祝、赤飯老重宛各錫相添被下之候間、頂戴可有之候、后刻為持差遣し候之共、右為承知如此御座候、以上

十二月廿四日

山本小弥太

伊藤忠右衛門

安中弁次殿

宮川孫市殿

永井岡三郎殿

長瀬席平殿

同勤六殿

同竹右衛門殿

金子作右衛門殿

鈴木藤右衛門殿

村瀬半左衛門殿

御家米分八人ニて
酒老斗ニ末広式本

献上物

紙一帖 お杉

菓子盛 おくよ

式本 婆々

鯉一連 忠右衛門

五升 小弥太

和吉 竹右衛門

兵助 市右衛門

新右衛門 市兵衛

五人 市兵衛

三升 紋右衛門

ちりめん 三尺 三寸 三人 金吾妻

お 樹仙

いかにたばへ 仙右衛門

あひ五 万藏

お 万藏

さ 忠藏

するの七 市藏

忠藏 市藏

忠藏 市藏

忠藏 市藏

忠藏 市藏

忠藏 市藏

忠藏 市藏

忠藏 市藏

忠藏 市藏

忠藏 市藏

忠藏 市藏

忠藏 市藏

忠藏 市藏

忠藏 市藏

忠藏 市藏

- 一 銖治郎様御再縁安池様御出願書之事 申正月
- 一 御国絵御改之事 未十二月
- 一 若殿様御誕生ニ付御本家へ御幕先例之通り御願之事 申正月
- 一 大割金掛合之事 四月
- 一 笠松役所堤方入組ニ付掛合之事 日記留メ有之 四月
- 一 御本家様より若殿様へ初着料御使者来ル事 五月朔日
- 一 若殿様初節句之事
- 一 永井肥前守様御実母様御死去之事 五月三日
- 一 平島様より初節句御かさり物来ル事 三日
- 一 山本滝藏犬山役所へ添書之事 五月廿日
- 一 栄吉様左京様等御改名之事 御祝書出ル事 五月廿日
- 一 銖治郎様御再縁認メ替之事 六月二日
- 一 七夕御状之事 七月
- 一 村方困窮者之事
- 一 村方扱困窮者共へ為御救銭貳貫文ツ、被下之事
- 一 成瀬準人正様若殿主殿頭様御初在府ニ付問合 七月廿六日出
八月在府

- 一 大割之儀河田喜平太殿より手紙来ル十月六日平島様より順達
- 一 河田喜平太より返書ニ通書^{御出生}御祝儀之挨拶
- 一 笠松御役所柴田善之丞様へ御使者相勤申候事
- 一 新加納御陣屋より河田只右衛門大塚茂一より左京様より之御達書ニ付十六日御出之儀申来事
- 一 犬山へ御使今般尾州様御縁組有之ニ付、御姫様御附主殿頭様へ御伺書御足軽使
- 一 河田喜平太より大割御懸合申来候ニ付、御返書御差出し
- 一 私共三人大塚茂一郎より御役助金之答印紙
- 一 当方斗御書御名前書入御答之事
- 一 勢州桑名へ初納米弘ニ付、川並御番所へ手形遣入事
- 一 横井伊折介様御死去知せ之事
- 一 加納肥前守様より先達之御使者返し之事
- 一 村方貧窮之者共へ御手当被下村役共請書之事
- 一 新加納より廻文平島様より順達
- 一 永井肥前守様より先奉御挨拶之御状用人中より来ル并返書遣入
若殿様御誕生十二月十八日
- 一 横井兵吉様御家督御祝儀として両桿被遣候
- 一 銖次郎様御再縁、安池様へ急御養子ニ旧冬御出有之候処、御願は未御延引ニ被指置候之共、最早御家督も正月廿一日ニ御滞も無之、五百五十石御相続被為濟、恐悦之御事ニ付、御預書御差出し

- 一 藤森業師御屋しへ引取之事
- 一 村方ニて御勝手引請候ニ付認ル一件
- 一 加納永井肥前守様御奥様御死去之事
- 一 銖治郎様加納安池様へ御養子願濟
- 一 博奕御触之事
- 一 山東七藏堤通新加納地内家作致小商致度願書
- 一 市藏・喜左衛門隠居買請引越願書

- 一 犬山成瀬主殿頭様御初城ニ付御使者相勤候儀問合之事 并ニ亀屋仁兵へ進物申付之事
- 一 小島市兵衛殿之御物成御引渡之事
- 一 高札認替 八月出来
- 一 九月十日備前片山勘助殿并三井様へ御縁談御断之之事
- 一 犬山倉屋仁兵衛より成せ主殿頭様御入府今日之由
- 一 成瀬主殿頭様御城着ニ付御進物目録口上手控并御逢迄御礼状途中御伺使者迄有之
- 一 加納永井様御悔御返事
- 一 肥前守様大御所様御附之事
- 一 加納安池様御初客之事
- 一 肥前守様 大御所様御附御祝儀御使者御差出し之事
- 一 木曾川弁金差出し之儀新加納御陣屋より手紙ニて申来ル
十月三日

- 一 再縁 覚
- 一 右之通此度急養子差遣し申度奉存候、依之此段奉願候、以上
- 一 申正月廿六日 坪内嘉兵衛○
- 一 坪内嘉兵衛弟 坪内銖次郎
- 一 永井肥前守殿家来 安池新八郎
- 一 一筆致啓上候、春寒之砌御座候之共、弥御堅固被成御勤珍重奉存候、然は別紙を以御幕拝領之義、御家老中迄御願申上候之共、尚又御内願御取成御頼申進候、右は祖父嘉兵衛誕生之節より亡父并拙者誕生之節共、御幕一対宛拝領仕候義ニ御座候間、此節之義は別て御間柄之義、何卒先例之通、此度男子出生ニ付、不相替頂戴被 仰付候様、厚御取成之程御頼申度候、此段御内願得御意度如此御座候、以上
- 一 正月廿六日 坪内嘉兵衛
- 一 二月十六日 小松吉兵衛様
- 一 去冬銖治郎様御儀加納安池様へ御養子ニ御出有之候許当加納組ざとう成通之森衛と申者、御祝儀願出申候ニ付、清銅貳百文遣し申候

五月朔日

一 御本家様御使者小島市兵衛殿口上
薄暑之節御座候之共、先以御上御機嫌克被為入御座、恐悦之御儀奉存候、然若榮吉殿より先般御嫡子様御出生ニ付、初着料并ニ御香添御使者相勤候様被仰付候間、可然御披露候様と申口上ニて、左ニ白木台ニて金三分御初着料



此中新加納梅村屋切手代拾両也、右は御香相求候と奉存候処、時節柄ニ付右様致し候旨右之断も有之

一 殿様御相有之、御口上之趣御挨拶有之候て、御酒有合候早々可出し申候

切込皿板すゐめ 同のり 同すし
同五分 同切附物

右相済候て帰リ之節、小弥太罷出挨拶申、小菊紙一束同人之被下、殿様御出御挨拶有之候て、使者之間へ下り、小弥太御玄關敷台迄見送り、挨拶致し帰リ申候、小島供方は侍一人・そり取、尤小島市兵衛上下ニて候

同日小弥太儀新加納御役所へ、昨日之御使者有之候御挨拶として、御使者相勤申候、肩袴ニて相勤申候

一 若殿様御初節句ニ付、御両家様・新加納少林寺・御陣屋・岡崎樹仙・安池様御三折・永田織衛様・忠右衛門へも遣し候、名古屋山中様・矢島様へも持せ遣し候、御使竹藏ニて各々手紙添

三組庄屋

組頭へ

以切紙申達候、然若殿様初節句ニ付、各方へ御酒被下候間、明日二日午之上刻相揃御出席有之候、尤献上物等は相成不申旨被仰出候間、無心置頂戴被罷出候、以上

五月朔日

御役所

- 安中 弁 治殿
- 宮川 孫 市殿
- 永瀬 勘 六殿
- 永井 岡三 郎殿
- 村瀬 半左衛門 殿
- 金子 作右衛門 殿
- 鈴木 藤右衛門 殿

外ニ山廻り足輕二人、万歳・市藏兩人へも御酒被下候間、御取持兼罷出候様申付候

右御家来・村役竹右衛門・初吉儀は病氣 御出入門右衛門・市兵衛 市右衛門・兵助 同右衛門儀は病氣 御家中より御祝儀として 御酒料南一

御出入より 老升 山廻り 老升 右之通奉献上候、以上

- 井 三ツ葉
- 井 はりく
- 井 竹子
- 大皿 塩ほら
- 大皿 塩ほら

一 若殿様御初節句ニ付、粽十式抱ツ、出し候

一 一筆致啓候、薄暑之節御座候之共、先以御安全被成御勤珍重之御儀奉存候、然若殿様御初節句ニ付、内祝被申付候間、粽式十抱被進之候付、右之段拙者より宜敷得貴意候様被申付、如斯御座候、以上

五月二日

山本小弥太

御陣屋 御当番衆中様

別紙を以得貴意候、来五日ニハ初節句被相祝候ニ付、御役頭様始御陣屋詰之御方々御招請、龜酒被進度被存候之共、此節無人殊ニ織敷堅約ニ付、又々追て御案内も可被申上候之共、當時之所被及延引候段、右御断相心得宜敷得貴意候様被申付、如此御座候

山本

御当番様

村方へ廻文

若殿様初節句ニ付、以切紙申達候、然若殿様初節句ニ付、御酒被下候間、明日二日九ツ時罷出可申候、尤献上物等は不相成旨、急度申触候様被仰付候間、無心置頂戴罷出可申候、右之趣御出入之者へも申達一流相揃罷出可申候、以上

五月朔日

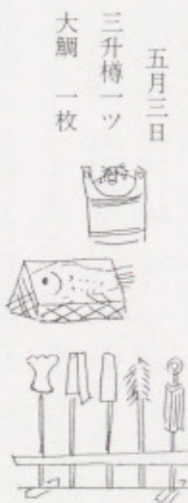
御役所

大皿 十し

一 平島様より御使

以手紙致啓上、向暑之節御座候之共、其御許様益御機嫌克被為成御座、珍重之御儀思召候、然若来ル御節句ニて 寿山様御出御座候間、御悦可被進、右御祝義品計程先々今日被進之候間、宜敷御披露可被下候、御初節句之御義ニ付、御飭り道具ニても可被進思召之処、兼て私え蒙 御意も候□□義ニ付、右之御次第ニ御座候、委細之儀ハ五日ニ寿山様御出御座候て御新し可被仰上思召候、先々右之趣有之、宜御披露可被下候様被仰付、如此御座候、以上

五月三日



一 三井様より御飭り道具右之次第ニて来ル

一 御酒式升 新加納 岡崎樹仙 一飾り物立言・鉄抱二・玉箱一

- 一 七ツ道具 席平 一鉄抱五丁懸 小弥太
- 一 一ふき一わ 久昌寺 一兜人形 荻谷春貞

一 村役より御酒三升献
 右代金老朱也
 一 明五日小弥太家内・苺谷春貞・岡崎芦庵・は、くよ・松本妻
 右之者へ御料理被下候趣申遣又
 五日

一 御両家様御招請有之候ニ付
 献立
 一 前ニ寿山様へ組重ニて御直御酒あい五分切さいとう御帰之節
 御膳三ツわん小汁めしかまほこあわび平あわび角あわび猪口あかて
 焼物あい 香物
 三ツ組盃出し

吸物白味噌あい 大皿鯛に付 井はへ 井はへ
 吸物鯛 大平角ふいも 井三ツ葉 井三ツ葉
 ます塩焼き井(さいとう) 井見合ニて
 吸物こち 井大こんもみ 其外見合物ニて出し
 井いろく見合ニて 井三ツは
 御供方酒肴 硯ふた(こくりこんにや) 井三ツは
 吸物あひ 侍分平
 すし
 塩鱈之ゆに

一 三井様御供侍老人 御手伝人
 一 平島様侍二人 御翼四人
 一 小林寺宗鉄様侍老人 孫一御料理仕候
 同御菓子袋一ツ御持参也

一 村方寺院其外御家来・村役・御出入之者へ例年之通り粽五わ
 ツ、被下候
 一 小弥太家内・は、山東くよ・春貞被召寄、御せん御酒被下松本
 ノ妻同断、外ニさとも何□□被下、其外ハ御祝儀申上下候
 五月十日山東滝藏、尾州羽黒村之内朝日佐次右衛門と馬壳渡シ置
 候処、馬代金相渡シ不申ニ付、追々添翰願出ルニ付、吟味之上添
 書相渡し申候筈ニ相成、尤八日呼出し、十日右役所へ願度よし申
 候、左ニ

乍恐書付を以奉願上候
 願人 武兵衛
 親類 喜兵衛
 右之もの四拾五歳ニて病氣相成、倅幼少御座候、只今八十八歳
 ニ相成候祖母并母親も罷在候之共、老母之事故、病氣ニ付家内四
 人至て困窮仕候、何卒御慈悲之御憐愍偏ニ奉願上候、以上
 天保七申年
 六月日

御地頭所

御役所
 右之通り奉願上候ニ付、乍恐奥印仕奉差上候、以上
 西組預り
 庄屋 市右衛門
 乍恐以書付奉願上候

願人 喜藤治母
 親類 久右衛門
 右之者追々困窮仕候処、老女老人ニて乞喰等も出来兼、誠難渋
 仕候間、何卒御慈悲之御憐愍奉願上候、以上

願人 治郎七後家
 親類 久右衛門
 右之者孫三人御座候之共、未幼年ニて奉公も出来不申、至て貧
 窮仕候間、何卒御慈悲之御憐愍偏奉願上候、以上
 天保七丙年
 申六月
 御地頭所

御役所

前書之通り奉願上候ニ付、取次奥書印仕奉差上候、以上
 東組庄屋 竹右衛門印
 乍恐書付を以御請奉申上候

願人 喜藤治母印
 親類 久右衛門印
 一 先達極困窮之者御尋ニ付、私共儀御知行所類も無御座極困窮、
 不仕合之上老衰仕、乞喰等も出来兼、誠難渋仕候間、書付を以
 奉申上候所、今般厚御慈悲之思召ヲ以古今之例ニ不抱、銭貳貫
 文ツ、御救被下置、頂戴仕、誠以御憐愍之段重々難有仕合奉存
 候、右御請乍恐奉申上候、以上
 天保七申年
 七月廿五日

願人 治郎七後家印
 親類 久右衛門印
 武兵衛印
 喜兵衛印
 御地頭所
 御役所

前書之趣、今般古今例不抱、御慈悲之思召を以被扱下置、於私共も難有仕合奉存候、右御請調印為仕奉差上候、以上

- 東組庄屋 竹右衛門印
- 西組庄屋 市右衛門印
- 組頭 兵 助印

一 八月朔日、葉師如來本仏當時和尚無之ニ付、各務村慈眼寺引請ニ付、立合之上本仏当方へ頼り置、尤村役竹右衛門・組頭兵助罷出、小弥太儀上下ニて供忘人、むな札共頼り候

一 村方御勝手引受候書付左ニ

被仰渡候御請書之事

御地頭様御勝手方御切替ニ付、去ル未末被^(年々) 仰渡候御趣意筋、彼是と下評捕ひ兼、御請之儀延年と相成候処、当申四月中少林寺和尚様御立入并御差添人平島様より松原牧右衛門殿御出、前渡村百姓一統御呼出之上、御地頭様より被^(年々) 仰出候調達金之儀并御借財、其外御勝手向御引請奉申上候、取計可仕旨被仰渡候、右一件村方一統相改メ、此度御請奉申上候、依之惣代名前・村役奥印を以御請書付奉指上候

一 被仰付候調達金、来酉年より拾ヶ年之内、御年貢之外ニ金拾五両宛請達可仕候事

一 御勝手方御引請奉申上候上へハ、御入目御月並金辻・御借財其

- 三組 庄屋 竹右衛門印
- 同斷 市右衛門印

前書之通、村役小前一統和談納得之上、御請書奉指上候、依之村役一連印仕、書附取次奉指上候、以上

天保七申七月

- 前渡村 百姓惣代 久右衛門印
- 紋四郎印
- 市左衛門印
- 為藏印
- 庄兵衛印
- 柳藏印
- 八左衛門印
- 万右衛門印

- 同斷 民右衛門印
- 組頭 兵 助印
- 同斷 新左衛門印

御地頭様 御役人中様

一筆致啓上候、然は御舍弟誅治郎殿事、永井肥前守様御家来安池新八郎殿之養子被差遣度段、左京殿被致承知候、先方頼濟候は御取組可被成候、則書付を以被相達候、此段從拙者可得御意旨被申付、如斯御座候、恐惶謹言

- 河田喜平太 正数(花押)
- 坪内嘉兵衛様

村方へ御触之事

以廻状申達候、然は此度被^(辨脱カ) 仰出候儀は、博奕賭諸負 御制禁之儀は毎々厳敷申渡候之共、近年等閑ニ相心得候哉、近頃別て右体之類有之趣ニも粗相聞、如何候、依之折々不時相廻り、疑敷儀及見聞候ハ、早速召捕可申条、其旨相心得、被洩様可申触候、以上

- 八月十日 御役所

本文之趣相心得申触候、廻文留り返却可有之候

御家来之名々へ申触之事

以切紙令啓達候、然は此度被^(辨脱カ) 仰出候儀は、博奕賭諸負 御制禁之儀は毎々厳敷申渡候之共、近年等閑ニ相心得候哉、近頃別て右体之類有之趣ニも粗相聞、如何候、依之折々不時相廻り、疑敷儀及見聞候ハ、早速召捕可申条、其旨相心得被洩様可申触候、以上

八月十日 御役所

右之趣此度被^(辨脱カ) 仰出候間、各々方別て相心得、風聞等承知有之候ハ、早速可被申出候、万一御家来中之内右体之場所へ立入候は勿論、見聞流密置、風聞ニても達御聞候てハ甚以不相濟儀、別て御心得可被成候、以上

- 安中弁治
- 長瀬席平
- 宮川孫市
- 長瀬勘六
- 永井岡三郎
- 金子作右衛門
- 鈴木藤右衛門
- 村瀬半左衛門

為念、右名前印形にて御請可有之候、以上
本文之趣相心得可申候

五藤万藏
芥木市藏

乍恐奉願上候口上覚

一 此度私義紋四郎西御林堤通南御^{長十八間、}右場廻奉拝借、小家一軒相建、農業手委^(ママ)ニ小商ひ仕度、且手博田地にて近來穀高必至難相暮、依之無提 御上様之奉願上候、何卒御憐愍ヲ以御濟被為成下置候ハ、広大御慈悲難有仕合奉存候、然ル上は御本家様へ此段ヲ奉願上候、右之趣偏御開濟之段奉願上候、以上

天保七^丙申八月

願主 七 藏印
受人 豊 藏印

前文之通り相違無御座候、依之奥印仕候

庄屋

民右衛門

御役所様

八月十八日

一 弁治大山へ御使、今般成瀬主殿頭様御儀御初着ニ付、月番御用人岩田又左衛門殿之内問合申候事、先例御着翌日御酒肴使者を以進上被致候処、今般之儀も先例之通り被致度候間、此段内々御問合候様被申付候、と申候ハ、承知旨被申候ニ付、猶又御出

も有之候ハ、御取持申候と申答ニ候、右ニ付、進物等之儀は龜

屋仁兵衛方ニ申付置候、御思召は大鯛壹枚白木台にて被進上致候之処、先方にてハ中鯛にて二枚と申事、龜屋申候ニ付、いづれ見合御用意致よし申候、樽之儀は相訳り不申ニ付、藤藏より御祐筆へ内々問合くれ、龜屋へ申付くれ候様申事

一 小島市兵衛殿へ御物成御引渡シ書付一件、左之通り

御引渡証文 坪内嘉兵衛内 山本小弥太

御引渡証文

一旦那勝手向、月々入用差支候ニ付御頼被成候処、物成丈之儀は御世話被下、時々御出金可被下旨、右ニ付知行所小物成ニ至迄、相納り候分御引渡ニ相成候間、右を以年々元利御引去り、勘定御仕立可被成候、尤村役人共之儀は申聞置候事ニ御座候、且ツ拙者共役人代り有之候共、且那裏印致置候上は、跡役人にてモ聊違替無之、若豊凶過不足之儀は平均可被成候、仍て証書如件

天保七^丙申年八月

小島市兵衛殿

山本小弥太印

御裏印有之候、左ニ

表書之通相違無御座候

坪内嘉兵衛〇

一 高札認替之事、尤御先代様御代ニ古板けすり被仰付候ニ付、文

言等相訳不申ニ付甚迷惑致し候間、古板等は此上御仕舞可有之候事、一枚古板仕舞置有之、尤御藏入置候事、今般之は加納御家中御祐筆御認メ、安池様御手引也、文言左ニ

一 大山成瀬主殿頭様御入府今日之由仁兵衛より申来ル

益御機嫌能遊御座奉賀候、然は今日 若殿様御入国之義ニ候間、右ニ付御看明朝参り申候間、早朝より御出被下候、右御案内申上度如此御座候、以上

九月十一日

御看屋 仁兵衛

坪内様 御役所

若党 万 藏
足輕 市 藏
鍵持 喜右衛門
履草取基 平

つり台文右衛門

次左衛門

箱持 久 助

坪内嘉兵衛使者 山本小弥太

口上手控

秋冷之砌御座候処 主殿頭様益御勇健被成御座、恐慶之御儀奉

存候、然は今般御在所表之被為成御入城、目出度御儀奉存候、右御款為可申上以使者、目録之通進上之仕候、此段宜御執成可被下候、以上

坪内嘉兵衛使者 山本小弥太

九月十二日 目録奉書二枚重左之通り

御酒 一 樽
御肴 一 升
以上

坪内嘉兵衛



御樽ニ添



目下



たか五ツ入

小弥太儀御使者相勤候、供方侍市藏・足輕万藏宰領・鍵持喜右衛門・箱持久助・履草取基平・つり台文右衛門・治左衛門、龜屋仁兵衛方にて着替上下、夫より問屋へ参り候処、差支ニ付岩井屋へ、同所より案内致し、夫より亭主罷出^{我脱}致致し、手札相渡し候ハ、御達シ申上候趣申、夫より御殿へ上り、又掃り候て口上ニハ、何方様より御沙汰有之候間夫迄御休有之候様と申候、夫より案内申来候ニ付、罷出申候

一 十四日殿様大山成瀬主殿頭様御逢有之ニ付御出、五ツ時御出

立、尤小弥太暫御先キへ草井へ向罷出候、御供方左ニ

御徒士磯右衛門 御口又右衛門 羽織袴 御近衛 安中弁治 御長柄傘甚平

御道具兵四郎 御馬

御徒士半左衛門 御口新 六 御中小姓 長瀬重平 御草り取政藏

御対挨拶作右衛門

○ 沓籠喜右衛門合羽籠利右衛門同文右衛門△
同 断 次左衛門

△押九右衛門 小弥太供、若党草り取、市藏・竹藏

途中御着用御

羽織

一 岩屋惣右衛門方へ御着、同人御案内申上御伺ニ罷出ル、夫より小弥太より御届之儀申候之ハ、早速御殿へ上り御届可申上と申、其内申付置候支度上下共出し申候、惣右衛門帰りに申上候ハ、只今御盃有之候御様子、御案内之儀ハ、御殿より御沙汰御座候趣ニ付、先御休足被遊候様申上ル、無程使ニて惣右衛門向、只今御出御座候様申来候ニ付、右惣右衛門御案内申上ル、尤先年は間屋市兵衛方へ御出御座候処、此度ハ、右市兵衛方祭り御上覽ニ付取込居申候間、市兵へより岩屋相頼申候、大手御門御乗込、夫より西之丸南方御こしかけ迄、御供不残被召連、是ニて御箱・かつは籠・くつ籠おとす、西之御丸御門きわ迄御馬被召、夫よ

御聞候様との挨拶、夫より酒給仕人あい頼候て六七こんたへ、又々差身持出ル、納盃頼と用人罷出挨拶ニて引、くわし・茶出ル、供之者へ焼物・くわし廻し呉候様給仕人頼、用人ニいとまこい申候之ハ、御供用意申付候間暫御待と被申候て、用意出来候旨申出ル、御いとまこい被遊候て御帰り、御玄関入川迄用人御送り、御玄関番兩人御玄関之内御送り、敷台迄老人御送り申上候、御門迄御出、又々御立帰り、御礼御玄関番迄被仰置、御帰り懸先例も有之ニ付、小池・神尾両方御立寄、御逢御挨拶玄関ニて被仰置御帰り、九ツ半頃御出八ツ時過岩井屋惣右衛門方へ御引取、小弥太上下ニて御用人三人へ、御逢相済候挨拶之御使者相勤申候、夫より御供方不残又々支度致さセ申候、惣右衛門方払左ニ

外ニ茶代として金百疋被遣候、御城代小池・御用人岩田両方は、最初より御使者・進物・御逢等之儀取持相頼置申候ニ付、先例ハ無之候之共別段挨拶、藤藏へ向へ看被遣候、代四百文ツ、御帰り之節草井渡し酒代百文遣ス

一 主殿頭様十六日晚野村浦通行ニ付、左ニ手札相認メ小弥太差出ス、供方籠・箱・草履取若党・也

手札 近辺御通行ニ付坪内嘉兵衛使者

途中御窺

山本小弥太

り御中小姓兩人・御草り取・押へ・小遣イ老人御門内御供、御道通下座之銘々御直之下座受有之、大手番所下座敷ニて平臥、御玄関御上り、夫より御取次之者御案内申上ル、御書院と相見へ申候次之間十五丈敷、茶・多葉粉盆出ル、御用人吉田伊左衛門殿御出、一通り御挨拶有之、只今此上ノ間ニて主人御逢被申候、私御案内申上候、御内々為念申上候、時候之御挨拶、御口上・入部御口上・其外相済候て、御前様より最御入との御挨拶有之候之ハ、主人立入被申候、御先例御先代様之節左様御座候間、為念鳥渡申上候と被申上候、御承知之御答、無程御逢有之候由ニて吉田御案内、入川より申上候、入川西之方御刀持井御用人老人、外ニ老人着座、明り床之前主殿頭様御着座、御同間被成候様度々之御挨拶ニ付、御同間被遊候と御屬子主殿頭様御ぬき被遊、夫より始めて秋冷之節弥無御障り被仰候と、此方殿様始て秋冷之節益御勇健被遊御座恐悦奉存候、此度御入部ニ付御祝儀申上候旨被仰候と又主殿頭様御念之入候御事と被仰、暫過、主殿頭様是ハよい天気よく統升と被仰、当方殿様御意ニ御座り外と御挨拶有之、暫過此方殿様より、最御入被遊候様との御挨拶ニ付、御立入被遊候、夫より元之次之御席へ御着座、伊左衛門被出、兼て被申付置候位龜末之御支度被進候間、ゆる／＼御休足被遊候様との挨拶、無程御膳持出ル、御ひつ持出ル、御盃持出ル、硯ふた持出ル、御ひら・猪口持出ル、二ノ汁持出ル、焼物持出ル、御用人山本次郎太夫被出、取込居御構不申甚御龜末之御儀宜敷、何ぞ御用向御座候之ハ、あれニ控居候間被

右之通取調、晚野村うらえ罷出候処、最早御通行跡ニ相成候間、一先引取評儀之上、キフ織甚御立寄之由ニ付、使者被申付候間罷出候処、御通行跡ニ相成候間是迄罷出候旨口上申、右之手札差出し申候処、尤織甚方へ罷出候、麻上下、供若党・履草取也、田中屋利助方ニて着替致し織甚之罷出候、御役人中御目ニ掛り度申候ハ、取次申通候ハ、中村惣左衛門殿と申人へ口上述べ候ハ、御口上之趣承知致し候、同役共之申聞、其上御答可申との儀ニ付、差控罷有候所、御山へ御見物ニ御出候間、御帰り無御座候てハ御請難申旨ニ付、織甚罷出、何れ御帰候間、先茶漬差上申候間、御休足可有之旨申候、問付四ツ半過ニ罷出、七ツ時過ニ山より御帰り、御答口上惣左衛門被出被申候ハ、遠方之処被入御念候儀忝被存候、猶又御前も御苦勞被存候、是ハ少分候之共御前へ被進候様との口上ニて金百疋包被差出候、難有旨口上申述引取の上、主人之申聞候間、先御手前様より宜敷御礼被仰上可被下候、引取

一 九月廿日加納安池様より御初客として御出候也

御土産物として安池様より大鯛・たこ・御菓子箱、治太夫様鯉・ふり、堤清様御内ほら二本、永田織衛様・新三郎様よりまんじう帯、魚屋源四郎母より御菓子箱上ル、安池様より下々迄御土産物として南鐘一片、御召つれ之男女へ鳥目当方より被下候分、持へ鳥目三拾疋、女中式式百文ツ、中間百文、源四郎母之ハ小菊被下候よし

献立 初長のし取肴三ツ組御盃

吸物ミソ 硯すずり 井い 大皿おほしら

大平おほひら 御膳分ごぜんぶん さしさし 鯉こい 吸物あぶら

汁じゆ 坪つら 猪口ぶたぐち 平ひら

差身さしみ 焼物やきもの 右之通みぎのとお 龜屋かめや 申付ル

夜ニ入御駕籠人足出し

一 九月廿五日安池様御初客として御出

銚治郎様御土産物ひら目一枚

藤四郎様同大むり一本・時雨二ツ

新三郎様同大ふな十枚

侍分さむらいぶん 小半紙こはんし 末すえ ツ、三人え

外 宍人御取持見へる

岡崎芦庵当方より御取持申遣ス

御供方へも当方より三人え鳥目式十疋ツ、被下

御表御座敷にてのし出し、夫より取肴にて御盃出し候事

御膳分出ス

一 十月二日加納御使者相勤申候、山本小弥太、平島にて松原牧右

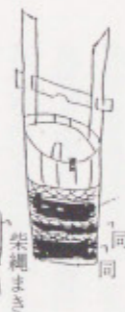
衛門殿、三井にて加藤逸之助殿、口上覚

肥前守様益御勇健被為成御座、恐慶之御儀奉存候、然は今般大御所様御附被為蒙仰、目出度御儀奉存候、依之御歡為可申上、輕少之至御座候え共兩種進上之仕候

十月朔日

坪内嘉兵衛使者

山本小弥太



此所わひなハ

釣台人足宍人出ス

三井より宍人出

平島にて足輕宍人

(原文横書)

平島様

三井様同断

御使者供、若党・草履取・鍵・箱

小弥太之金貳百疋目録頂戴仕候、左ニ

白すき 紙のり入



疊屋小兵衛方へ三人共着、夫より二文字屋へ着、支度出し、夫

より臨本陣へ案内有之、御取次永田一字殿、御挨拶之御方新貝栄

三郎殿、座敷にて披露、右相済御本膳出シ、夫より御酒出ス

吸物あぶら 硯すずり 皿しら 井い 吸物あぶら

膳分

汁じゆ 平ひら すあへすあへ 焼物やきもの

猪口ぶたぐち

十月三日新加納御陣屋より使来、手紙左ニ

以手紙致啓上候、寒冷ニ御座候え共弥御安全被成御勤珍重奉存候、然は去未年従公儀木曾川通川々御普請弁金御割賦御出分、別紙之趣当月廿八日迄ニ御差出可被成下候、得御意度如此御座候、以上

十月三日

小島市兵衛 大塚茂市郎 河田只右衛門

山本小弥太様 覚

一 銀壹貫貳百三拾六匁五分九厘

右之通御座候、以上

十月三日

一 十月十五日

一 十月二日加納御使者相勤申候、山本小弥太、平島にて松原牧右

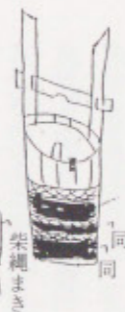
衛門殿、三井にて加藤逸之助殿、口上覚

肥前守様益御勇健被為成御座、恐慶之御儀奉存候、然は今般大御所様御附被為蒙仰、目出度御儀奉存候、依之御歡為可申上、輕少之至御座候え共兩種進上之仕候

十月朔日

坪内嘉兵衛使者

山本小弥太



此所わひなハ

釣台人足宍人出ス

三井より宍人出

平島にて足輕宍人

(原文横書)

平島様

三井様同断

御使者供、若党・草履取・鍵・箱

小弥太之金貳百疋目録頂戴仕候、左ニ

白すき 紙のり入



疊屋小兵衛方へ三人共着、夫より二文字屋へ着、支度出し、夫

笠松御役所柴田善之丞様之向種被進候、御使者小弥太相勤候、

平島様へ向早朝罷出、三井様も同様加藤逸之助相勤候、平島様松原牧右衛門殿、右三人揃之上、角屋幸七方へ参り、同人より相届申候、手札相渡し、夫より只今御出候と申来候ニ付、三人同道にて御使者相勤候、玄関へ上り、取次宍人罷出御進物請取、夫より御挨拶として高野熊太郎と申人罷出、只今御口上之趣申

達候処、宜敷御挨拶申候様被申付候、今日は見事之御品御送り被下、右御札等も御目ニ懸り申上候処、無提御用向差懸り候間、先私共より宜敷御挨拶御札申上候様被仰付候、可然被仰上可被下候と申口上之有之、夫より敷台迄送り挨拶致引取、角屋へ帰り

支度致、相休候て羽織袴ニ相成、元々中島小太郎殿へす、き一本、三人手札添遣し置、夫より達七案内有之て、罷出申候処、御役所へ御出勤ニ付、申置引取、尤当春神田斧吉様替り柴田善之丞様也、右御支配ニ付使者御差向、兩種被遣候、口上書無之、手札計にて相済し申候

- 一 七匁五分 白木樽代
- 一 七匁五分 友白髪三升
- 一 拾五匁 鮮桶代

外

角屋幸七方にて扇箱添出ス、五本入也

右進物加納へ御使者之節同様也 松原牧右衛門口上ニハ 善之丞様被申上候、冷気之節御座候処、倍御機嫌克被為御座、恐悦之御儀奉存候、然は今般当所御支配ニ付、名々主人より御祝儀

として兩種進上被致候間、可然御披露可被下候と申口上

坪内嘉兵衛様
河田唯右衛門
大塚茂一郎

以手紙啓上仕候、然は左京殿より被申付越候ニ付、御達之儀御座候間、明後十六日当陣屋へ御出可被成候、此段申上度如此御座候、以上

十月十四日
大塚茂一郎
河田唯右衛門

坪内嘉兵衛様

右ニ付、十六日御出ニ付御供方、席平・御縫持・御箱、河田唯右衛門・大塚茂市郎罷出申候、左京殿より御達申上候様ニ申来候儀は、先達より追々笠松表へ御家来山本小弥太御差向ニて、私共罷出右役所ニをいて対段被仰付候処、其後始末江戸表へ申遣し置候処、木曾川御普請之儀ニ付、嘉兵衛様ニかぎり不申、御三方様共今般御改、御名前方書之儀被仰立候儀ハ如何哉、御尋申候て、御印紙ニて御答有之候様申参り候間、此段御達申上候、右ニ付御承知被遊候、近々内相認差出し可申と御答御帰、夫より平島様へ御寄有之

十月十九日
御三所様御連名ニて江戸表家老河田喜平太へ大割御一件御答左ニ一筆致啓上候、——然は未年大割銀之儀ニ付、拙者共知行高

兩人より御承知可被下候、以上

申十月九日
山本小弥太印
松原牧右衛門印
加藤辰右衛門印

大塚茂一郎殿

右之通り印紙加藤逸之助殿同道ニて差出し申候、取次河田巖市郎
当方計御差出し覚
口上覚

一 前渡村高千三百七拾石余之所入込之知行所ニて、五六ヶ年以前木曾川通堤南方ニて尾州様御目論見之猿尾出来、右破損御普請ニ付笠松御役所より、故障筋も無之哉御申渡之処、請書片書坪内嘉兵衛知行所前渡村と相認候儀ニ付、右始末今般印紙ヲ以御答可申上旨、御陣屋詰役人中より口達之趣委細承知仕、則左ニ御答申上候
前渡村地先木曾川通猿尾御普請場所之地ハ、左京様御知行所ニ御座候、御普請請負之者は場所模寄ニ付私知行所之百姓共請負来申候、依て庄屋百姓より坪内嘉兵衛知行所前渡村庄屋誰と申名前認メ請印仕度と申候儀御座候、此筋合ニて別段故障筋無之候、片書ハ是処認メ候義筋合と奉存候、猿尾地面ハ、左京様御知行所、請負之者は私知行所之者故、前書之始末御座候、別段ニ誤合と申儀ハ無御座候、猶又私知行所之誤も相認メ候様、御陣屋詰役人中より口達有之候之共、右は去未正月十三日・二

割出銀延年ニ相成居候処、新加納陣屋役人中より達ニハ、無誤不出銀之趣ニも達しも有之候哉、当三月十四日附、猶又九月廿日附御紙面之趣委細致承知候、御答左ニ訳書を以御返事得御意候
未年大割銀之儀、入用割府巨細差訳帳写し差出し、其上出銀可致答之所、惣代より宜之メ高書付之ミ差出し有之、右之更相断不申巨細書付写し差出し可有之答ニ付、右巨細書差出し候之ハ早々及御返事ニも可申心得罷有候処、今以差訳書差出し無之及迷惑候、有無御答も右処延引ニ相成居申、此段御承知之上可然御取計被下候、右之趣ニ御座候間、左様承知可被下候、仍て御報如此候、恐惶謹言

十月十九日
坪内嘉兵衛
坪内金三郎
坪内太郎兵衛

河田喜平太様

申十月十九日御演舌有之候趣口上書ニて請書覚拙者共、旦那より御役助金と相唱へ被差出分、此後御断申上候訳、相認差出候様ニとの御口上之趣致承知候、右は兼々御承知之通慶長年中三百石宛頂戴、其後寛永二年ニ一倍之御加増被下置、御朱印一紙御連名ニて頂戴被致候て、六百石宛之知行所ニ御座候、勿論分知内分之訳も認候様ニと御申聞も有之候之共、右は去未年正月申より二月廿四日ニ至り寺社於、御奉行所ニ、河田政右衛門殿・小関清八郎殿於同席ニ被仰渡も有之候故、右御

月四日寺社、御奉行所脇坂中務太輔殿御屋敷ニおゐて、御家来河田政右衛門・私家来山本小弥太同席ニて被仰渡も有之、其後二月廿四日河田政右衛門病氣ニ付代人小関清八郎・山本小弥太・松原牧右衛門同席ニて濟口被仰渡候間、其節河田政右衛門より御聞達候儀と奉存候、依之印紙を以申上候、以上

十月
坪内嘉兵衛印
坪内左京様

御届書
坪内嘉兵衛内
山本小弥太

十月廿七日認メ出し
御届申手形一札
但し五斗入

一 納米式拾石
右は知行所北島村新左衛門より勢州桑名問屋孫右衛門方へ指送り申候間、御改之上無相違御通可被下候、以上
坪内嘉兵衛内
山本小弥太印

川並
御番所
右之通相認、新左衛門渡ス

奉差上御請書之覚

一 銀六百目

右は当申年格別米直段ニ付、三組極貧窮之者共へ夫喰御教として被下置、御慈悲之程冥加至極難有仕合奉存候、被仰付之通り中より以下困窮之者共次第相附割府仕、別て極貧之者共へ手厚ニ頂戴為仕可申候、仍之御請連印奉差上候、以上

天保七^丙年

十一月十六日

新左衛門印

同新 矢 助印

庄屋 和 吉印

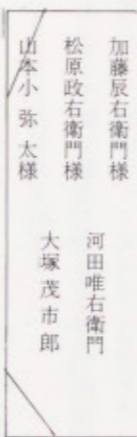
同新 市右衛門印

同新 竹右衛門印

御地頭所

御役所

一 岐阜大熊ニ居候さとうへ、江戸表御出府として御出之御祝儀折々願出候ニ付、御両家様へも内談致し候処、南緯一片遣し候様取計候答ニ付遣入、井松巖院様十三回忌御法事ニ付、式百文配当一所ニ遣し申候



一新加納陣屋へ木曾川弁金懸合之手紙、私共三人より連名にて遣し候処、右留は平島ニ有之、猶又返書平島より順達有之候間、留左ニ

答伊入存候、右御返事等得御意度御座上候、以上

十一月十五日

大塚茂一郎

河田唯右衛門

加藤辰右衛門様

松原政右衛門様

山本小弥太様

尚々、弁金之儀ニ付、御普請受負人共年賦御出金儀共可申渡趣とも、本文ニ相見候之共、不行届儀、尤相振儀ニ其段委敷不及御返事、御左様御承知有之様存候、以上

十二月十日新加納廻文平島様より御順達左ニ

御知行所村々非常為見廻、御役人共昼夜之無差別致廻村候条、小前之者共心得違之儀無之様、急度取締可申、五七人以上集会且騒立候様子有之ニおろてハ、其旨早々可申出候、若訴及延引ニては村役人可為越度条、可得御意候、此廻状早々順達、留村より可相返候、以上

申十二月九日

以剪紙致啓上候、然は今般御知行所一同、別紙之通御支配下之も相触候間、此段為御承知申上候間、宜御達可被成候、各可得御意如此御座候、以上

十二月九日

大塚茂一郎

河田唯右衛門

加藤辰右衛門様

御手紙致披閱候、然は木曾川通御普請弁金致割賦、御銘々御高

当り之分御出金被成旨、先頃中及御懸合置申候、彼是御難渋之儀共御申越候ニ付、故障之筋有之御出金難被成^{マツ}候ハ、印紙を以其旨御申立候様及対談置候処、多分弁金ニて御銘々御主人方ニおろても被成御迷惑、殊御知行百姓困窮之上出金方難渋之趣申立候ニ付、右弁金御出分御銘々年賦御差出被成度、且又御知行百姓之分も同様年賦ニ御取立被成度由、御普請之度々多分弁金、百姓難渋罷在、此度別て凶年旁以難御行届候間、此訳請負人共之申渡之様被成度儀共、御紙表之趣委曲承知いたし候、右弁金割賦之儀は御承知も有之哉、此度ニ不限古格を以取計候儀ニて、御本家井御末家方御一同之儀ニて、御銘々御出分ニ限り年賦御差出等之儀は可相濟儀共不被存候間、自分共ニおろてハ何分難取計義ニ御さ候、それ共御銘々御主人方より強て被仰立候儀ニも有之候ハ、其旨印紙を以早々御申立被成候様御達し被成、一両日中ニ否御申越可被成候、尚また御知百姓方出分も同様年賦被成度趣、しかし凶年之儀ハ一統之儀ニて、其御支配ニ限り不申事ハ勿論ニて、年賦済杯取計候儀ハ決て難相成間、其段御申渡、否早々御申越可被成候、乍然凶年ニ付出金難渋之村々之は、当御役所より軽キ利足を以、来四年冬分迄貸下ケ遣し可申儀、兼触置申候間、故障之筋無之、困窮ニ付拝借願出候村々へハ、暫之処貸下遣し可申候条、御支配村々之内難渋申立候もの共へ御申聞可被成、何れ此上等閑ニ打過候儀難相成、出金之有無ニ寄それ〳〵取計方有之条、早々村々御札、御

松原政右衛門様

山本小弥太様

以手紙致啓上候、甚寒之節御座候之共、弥御安全被成御勤珍重奉存候、然は 新加納御陣屋より之廻章宅通致順達候間御落手可被下候、付ては右答別紙之通御答遣しては如何御座候哉御勤考被成下候様との御事、御自心も被進、文言等不束之処ハ御加筆被下、弥右御答之趣ニ候ハ、三井表へ此段御相談被下、先方ニて清書御差出御座候様被成度思召候、何分可然御勤考被仰上可被下候、右得貴意度如斯御座候、以上

十二月十日

尚々、本文御答ニ候ハ、御村方へも右之趣被仰聞御座候様、当方村役今朝呼出し尋候処、廻文相廻り候へ共次村へ送り候のミニて、承知と申義も無之、印形も不仕候、左様ニ御承知、何分可然御取計可被下候

然は今般御知行所一同別紙之通、当支配下之も御触之趣致承知候、然ル処当方三所知行所之分ハ、夫々取締可申付置候間、其御支配下丈ケ之御取締は如何様とも御取計可被成候、左候へハ別紙可廻文之趣、三所知行所之分ハ不相用候、左様御承知被成候、此段貴答如斯御座候 此書状延引ニ相成候

(表紙)

天保八丁 西歳記録 御用部屋

- 一 横井兵吉様へ御家督ニ付目録出候ニ付挨拶手紙遣又
- 一 新加納御陣屋へ差出し候木曾川一件片書之儀
- 一 三井様出火之事
- 一 三井様出火御届書之事
- 一 木曾川御普請尾州様目論見ニ付片書之儀入組候一件ニ付差出し候書付并御家筋之儀相認メ差出し候事
- 一 大山御用人中へ拝借米内願岩田文左衛門殿へ昨晦日申入置二月朔日断手紙米候事
- 一 二月五日大山御用人中より拝借米一件断手紙并再答願遣又事
- 一 二月廿二日加納町出火御見舞状
- 一 笠松堤方役所より御使来候事
- 一 御本家様御役助金御掛合返書之事
- 一 大山御城代より拝借米断之手紙
- 一 江戸表河田喜平太殿より片書之儀掛合手紙
- 一 三月廿三日より本郷方道直し出役之事
- 一 大坂大火ニ付人相書之事
- 一 横井伊折之助様御家督御使者被遣候御挨拶御使来候事
- 一 御本家木曾川御普請一件返書四月出

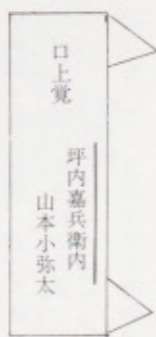
- 一 新加納今尾茂左衛門より笠松御役所答之留
- 一 左京様へ御親ミとして御三所より御差出シ金再答書一件
- 一 旧冬と両渡目困窮之者共へ夫喰手当被下之事
- 一 新加納御陣屋へ差出し候書付村方へ新加納廻文請印形不致一件
- 一 北方御役所へ添書之事
- 一 大割銀掛合河田喜平太より御連名手紙六月朔日来
- 一 笠松濟口一件
- 一 大般若御執行之事
- 一 御本家様へ大割懸合手紙
- 一 北方御陣屋へ手紙勇八外二人釣り一件
- 一 少林寺庫裏瓦葺差替代金之事
- 一 桃春院死去為知野々山返書
- 一 同返書七月出ス事
- 一 村方へ両組組頭役申付之請書之事七月十九日
- 一 北方陣屋より之返書尤七月九日殺生一件
- 一 七月晦日猶又再答申遣又
- 一 八月七日北方より書状尤四日出也、又十四日着趣ニ八月十八日返書遣又
- 一 新加納御陣屋より十四日木曾川出水ニ付流材田城寺川並役所より廻村之儀新加納へ申入ニ付御三所へ申来、先例ニも無之ニ付切紙返却之事

- 一 八日十四日大風之事
- 一 鴨沼宿助郷請之事
- 一 十一月十五日若殿様御髮置之事
- 一 申十二月廿八日小弥太新加納御陣屋へ内談之儀有之候趣、河田唯右衛門殿より手紙来ニ付罷 候処、左之通り書付、嘉兵衛様御印紙ニて御答有之候趣を申請事有之候処、立寄り申上候処、私共より御請申上候様ニ被申付候ニ付、正月六日新加納御陣屋弁治ニ持せ遣し、文言左ニ

口上覚

- 一 前渡村高千三百七拾石余之処、入込之地所ニて五六ヶ年以前木曾川通堤南方 尾州様より御目論見之猿尾出来、右破損御普請ニ付、笠松 御役所より故障筋無之哉之段村々之被 仰渡ニ付、御請書片書主人嘉兵衛知行所前渡村と相認メ候ニ付、右始末今般印紙を以可申上旨、則嘉兵衛ニ申達候処被致承知、左ニ御答申上候様被申付候
- 前渡村地先木曾川通堤尾御普請之場所之地ハ、左京様御知行所ニ御座候、御普請請負之者ハ場所模寄ニ付、嘉兵衛知行所之百姓共請負米り申候、依て庄屋ニ百姓より嘉兵衛知行所前渡村庄屋誰と相認、請印仕度と申儀御座候、此筋合ニて別段故障筋無御座候、猿尾地面ハ左京様御知行所、請負之者ハ嘉兵衛知行所之者故、前書之始末ニ御座候、別段ニ訳合と申儀ハ無御座候

- 一 嘉兵衛知行所と相認メ候訳有之儀候哉、是又御尋被致承知候、右は慶長年中三百石宛拜領、其後寛永二年ニ一倍之御加増被成下置 御朱印一紙連名ニて拜領被致候て、六百石宛之知行所ニ御座候間、嘉兵衛知行所之分ハ前々より嘉兵衛知行所と相認申候儀ニ御座候
 - 右之趣御答申上候様被申付候間、印紙を以如斯御座候、以上
- 天保八丁四年 坪内嘉兵衛家来
- 正月六日 山本小弥太印
- 河田唯右衛門殿



- 一 三井様御出火、八日夜八ツ時頃之由、平島表より知せ来ル、右ニ付御出馬有之、御供方左ニ
- 侍老人 箱 御長柄老人
- 口老人馬 侍老人 足輕老人
- 侍老人 鑓 御草履取老人
- 右は追々ニ罷出申候、小弥太儀も御見舞ニ罷出、早速引取、御見舞として
- 御飯大ひつに二ツ米九升五合
- 重詰とうふ重 にしめいしん ほん切身一
- 香物重 したし一重
- 右之通りニて釣台式人侍老人添遣し、取込ニ付手紙無之、口

上申遣ス、御出火ニ付施之品々進候間、御披露之儀願上候と申遣ス、猶又御尤いふけ人足等御入用ニ候ハ、被仰可被下候様と申遣ス、尤御出火之場所、御表様御座敷御書院向也

一 三井様出火御届書平島様ニて出来、御本家様家老河田喜平太殿へ出ル、尤九日定例年始御飛脚平島表当番ニて、御知行所丈助と申者願行、左之通り御添書下、平島表より願達左ニ

添書を以御届申上候、同姓坪内太郎兵衛方今八日明方、表座敷書院向焼失いたし、依之取込相有、年始御祝書其外同封いたし差送候、此段御断方拙者共より宜可得貴意被申聞候間、此段御承知上、宜敷御頼申上候、以上

御連名

河田喜平太様

一 正月六日新加納御陣屋へ差出し候書付、笠松御役所より御下ニ相成候書類、猶又今渡一紙添差出ス申口并御家筋之書付、寺社御奉行所出し候請書も差出し申候、左ニ

口上覚

一 旧冬押詰、坪内左京殿家来河田唯右衛門之向被 仰渡候儀は、木曾川通り猿尾御普請ニ付村々御請書、前渡村片書之儀延引相成居申候儀は、如何之訳ニて坪内嘉兵衛知行所と相認申度儀哉之段、印紙を以唯右衛門之向ケ差出候様、其 御役所より之御沙汰之趣、唯右衛門より申聞候ニ付、則別紙取調差出シ申候処、猶又当月十七日唯右衛門より申聞候ハ、別紙印紙笠松 御役所

へ差出候え共、右ニてハ相済不申、御差戻ニ相成、去未年寺社御奉行所ニて家筋之儀御尋、其節之始末も相認メ可差出候様御申聞有之候趣ニ付、則別紙ニ相認メ差出し申候間、左様御承知可被下候、以上

天保八丁酉年

坪内嘉兵衛家来

正月廿一日

山本小弥太

笠松

御役所

右嘉兵衛印紙ニて差出候様、是又唯右衛門より申聞候え共、去未年寺社 御奉行所ニても主人印紙は不差出、私共印紙ニて相済申候儀ニ御座候間、此度之儀も私印紙ニて相済候様被致度、此段訊て御願申候様被申付候、以上

御請書

坪内太郎兵衛

坪内金三郎

坪内嘉兵衛

天保六乙未 二月廿四日、私共家筋一条之儀済方被 仰渡候ニ付、坪内栄吉方よりは河田政右衛門を以是迄御糺シ中ニ差上候書類等も 御奉行所ニて御差留ニ相成、并私共家筋之儀分家之処、此度相改り内分ケと被 仰渡候儀ニては無之趣をも、栄吉方家来小関清八郎へ向再応被 仰渡、猶又私共家来松原牧右衛門・山本小弥太之も右清八郎と同席ニおゐて被 仰渡之趣は、正月

十九日大熊善太郎殿より之御解解ハ、同姓太郎兵衛調印紙并私共知行所百姓より之印紙、右は御下ケ可被下置御利解之所、此度御改、右之印紙等も当 御奉行所ニ御差留ニ相成、并家筋之儀は全分家ニ相違無之趣をも、家来松原牧右衛門・山本小弥太向被 仰渡、其段委細承知仕難有奉存候、依之消口御請書を以如斯御座候、以上

天保六年 二月廿六日

右之通宜被 仰達可被下候様奉願上候

坪内嘉兵衛家来

山本小弥太印

坪内金三郎家来

松原牧右衛門印

竹内喜平様

坪内嘉兵衛様御内
山本小弥太様
岩田文左衛門

右白木状箱足輕使中間一人
右兩人ニて持来ル

本文左ニ

以手紙致啓上候、先以御堅固御勤珍重御事御座候、然嘉兵衛様より御願之御借用米之儀ニ付、昨日は御出御太義之御事御座候、右ニ付役人共申合候処、昨日御咄申候通、夫々渡米不足買入候仕合ニて、乍御氣毒御間ニ合不申候間、此段嘉兵衛様之宜御申上被下度、依之如斯御座候、以上

二月朔日

岩田文左衛門

山本小弥太様 尚々、昨日は種々拝受物之御礼宜御執成可被下候、以上

一 二月四日小弥太夫山へ罷出、御用人岩田文左衛門殿之拜借米之儀再応願入度ニ付罷出候処、御同人病氣ニ付引籠相成候間、右方より差図ニて、同役吉田伊左衛門殿方へ罷出候様と申事ニ付、猶又吉田氏之参り式拾石拜借米願、右之儀達て断有之ニ付、左候ハ、式拾石代金拜借ニて御聞済ニ相成候様達て願置候処、同五日御使ニて左ニ断申来ル

以手紙致啓上候、御堅固御勤珍重御事御座候、然昨日ハ御出被下忝、其節御願被下候御夫食米式拾石御買上代、金銀御借用被成度義、猶更同役共申合候処、昨日及御答候通、当方も去年より凶作旁城下領分夫食米其外格外之物入ニて、中々以御取替金之義迄ハ難行届、逼之御義候え共当年之義ハ前頭之仕合ニ付難取計候間、何分宜御断御申達可被下候、右昨日之御答迄早々如斯御座候、以上

二月五日

吉田伊左衛門

山本小弥太様

右之趣白木状箱ニて申来候間答左ニ申遣し候 御使札被下忝拜見仕候、先以御壯健被成御勤珍重奉存候、然昨日推参仕再応御願申上候拜借金之義、御月勤様方御相談被下候処、昨日も御演舌被下候通、年柄旁御領分御救等格外之御

物入之御中にて、御取替等之義は中々以御行届難被成ニ付、御断之趣申達候、御尤至極被入御念候段、委細被致承知忝被存候、乍併昨日も口述にて御願申上候通、年柄難渋之儀ハ御互御同様と申内、其御許様は御大名之御事にて、如何共可相成哉と奉存恐察候之共、当方旦那之義誠ニ少身にて、実以忝村眼之知行所、打統凶作、下地大借之上、猶更必至難行立ニ付、一向被申兼候御無心ニ御座候間、何れも厚御取成を以、何卒願通御拝借之儀奉願上候、此段尚又罷出御願も可申上候之共、乍失敬御再答旁御願、得貴意候様被申付候間、如此御座候、以上

二月五日

山本小弥太

吉田伊左衛門様

猶々、本文御願被申兼候儀ニ御座候之共、今一応御同勤様へ御相談之上、御取計被成候様ニ奉願上候、以上

一新加納御陣屋より昨日申遣し候返翰来り候儀、猶又再答も遣し候之共、本文ニ申来候

山本小弥太様
河田唯右衛門
大塚茂一郎

御手紙致披見候、然其御主人之直宛にて及御文通候儀、以来古格之通貴様へ申進候様、先日御申越之処、如何御用向候哉直宛にて得貴意候ニ付、封之儘御返却被成候間落手候様、差懸り

候御用向有之候ハ、指支不相成候様貴様へ申進候様被成度、

右之段被及御懸合候様被仰聞候、御紙表之趣承知いたし、右は御用筋ニより直宛を以及御懸合候儀、当方古格ニ候条、貴様へ申入候儀ハ不相成候、左様御承知御達可被成候、且差懸り候御用筋之処書状御返却ニ付、再応不得貴意候、是又御承知可被成候、右返書旁如此候、以上

二月七日

大塚茂一郎

河田唯右衛門

山本小弥太様

猶々、過日中其御主人方へ拙者共より直宛文通之儀ニ付、御連名を以已来之儀御懸合有之候ニ付、其段及返書忝申候間、御承知可有之儀ニ存候間、委曲不能御報候、以上

右之趣申来候ニ付、返書左ニ相認メ申遣し候

御手紙致披見候、然其昨日主人方へ直宛之御状、古格通被致度ニ付、及御返却候処、右ハ御用筋ニより直宛にて御駈合御座候儀にて、拙者方へ御申越難被成段被仰下候之共、先達て直宛御状之儀、兼て御断申置候儀ニ御座候、猶又差懸り御用筋之処、御状御返却ニ付、再応不被仰下段ハ致方も無之ニ付、右之段貴答旁如此御座候、以上

二月七日

猶々、先頃連名を以、直宛御文通之儀及御駈合候、其節御返書之趣承知罷有候之共、何分直宛御状之儀御断被申度被存候儀ニ御座候、以上

願候儀、不愚御組取、御仁察可被下候、以上

一筆致啓上候、未余寒強御座候処、先以弥御堅勝被成御座、珍重奉存候、然先達て中家来を以御用人衆迄、拝借米之儀相願候処、昨年之凶作御取納御減少之上、御領分御救米等多分ニ付、御家中御扶助米も御買上と申御事にて、御取替米御断ニ御座候ニ付、尚又再応相願候之共、米金共御払底、且御差響も相成候儀と御座候て、御願通皆無御断ニ御座候之共、此度拝借相願候義ハ、^(得取)不止事、必至之難渋ニ付、御実意之御勘察御取計相願候義にて、兼々御承知之通、少身知行所連年違作難渋之上、昨年之凶作下地、公金大借之事故、去々未年より三ヶ年越村役共江戸表之被呼下、莫太之費用、其上返納方等、旁以難渋之上難渋相累候之共、前件之通、公金口々拝借、何れも納方相滞候之は、拝借願出候方も無之、誠ニ汗顔之至ニ御座候之共、其御太守之御憐恵相歎候外無御座と、実々申出兼候之共、相願候義ニ御座候、依之猶又御用人衆迄、押御実意之御取成相願申上候間、厚御勘察之上、願通被仰出候様奉希候、尤去天明之節拝借之例も御座候事故、何分可然御執成、返々も御実意之御憐察御伺之上、是非願通御恩借被仰出候様、幾重も御取合奉濟候、右之段御願得貴意度如此御座候、以上

二月十六日

坪内嘉兵衛

小池奥左衛門様

神尾源六様

尚々、本文御繁多之御中、押返し御願、御心配相懸、御氣之毒奉存、且難題々問敷御聞取も哉と実々心配候之共、無提再三相

一筆致啓上候、然左京殿当御役被相勤候ニ付、金貳拾四兩御

出金之段被致承知候、右は御役被相勤候節は、小普請金之外御役金と相唱増金、子孫迄無相違御出金可被成答ニ取極有之候ニ付、今度御出金之段御尤ニ存候、火事場見廻り被相勤中、并当御役去候未七月より同十二月迄之分共、是亦御出金可被成と被存候、右御出金分新加納陣屋へ御差出来候処、今度直当にて御差出之儀は、新例御取始被成候御心得ニ哉、御役被相勤候節御出金分之儀は、前頭之通御差出来候処、当時至り御故障筋被仰立、御不出金は如何之事ニ被存候、去ル頃平島村百姓一件ニ付、寺社奉行所にて各様御身上方御聞札有之候処、右一件は不殘御消滅相成候旨、諸事は迄之通りニ相心得可申段被仰渡候ニ付、左京殿方にては前々之振合を以取計申候、各様之は別段被仰渡之儀にては御座候哉、以後之心得も相成候間、被仰渡之廉々御印紙を以御申越可被成候、此段拙者より可得御意旨被申付、如斯御座候、恐惶謹言

二月五日

河田喜平太

坪内太郎兵衛様

坪内金三郎様

坪内嘉兵衛様

三月廿二日

一 江戸御本家老河田喜平太殿より、先達中追々掛合ニ相成候木曾川御普請所ニ付、御名片書之儀入組候ニ付、河田唯右衛門より江戸表へ申遣し候ニ付、手紙左之通り申来候

一 筆致啓上候、然は前渡村地先木曾川通猿尾御普請場所、貴様御持下百姓共請負来候処、右破損所御普請ニ付、笠松御代官所より故障筋無之哉之段、村方之申渡御座候ニ付、請書之義右於御役所前々仕来を以取調有之候処、此度ニ限り前渡村肩書、貴様御名前認入不申候ニは請印難致段申立候様、村方之者共之御申付有之候ニ付、則笠松御代官所并新加納陣屋役人共より、右は先例と致相違候間、其段追々掛合有之候之共、兎角先例御用ひ無之趣ニて、猶又左京殿之先例御改之段被仰越候之共、右川筋御普請等ニ付、是迄貴様方御名前村方肩書ニ認入候例無之候上柄は、貴様方御一存を以前頭之趣可被仰立答無之処、如何之御心得ニて当方之御伺も無之、右体左京殿之無構旧例を御背キ、押て笠松表之被仰立候段、全支配頭を御背キ之筋ニ相聞、如何之事ニ被存候、右は矢張是迄済来候通り、不依何事左京殿より差図無之内は、都て仕来御崩被成間敷候、依之前条前渡村肩書之儀も、笠松御代官所ニて先例取調之通請印差出候様、早々村方之御申渡可被成候、且又兼々被仰越候、脇坂中務大輔様 寺社御奉行御勤役中、右御役所ニおゐて先頃御談筋ハ有之候之共、各様方御家格相改り候筋は一切無之、右御談中之始末も都て消滅ニ相成、事済申候段河田政右衛門申聞候、依之矢張

於当方ハ、是迄之仕来りを以取計申候、左様御承知可被成候
一 其地新加納陣屋役人共より、仕来を以用向之儀及御文通候処、右は御請難被成段、支配人共より以紙面差戻候旨、右先例御用無之候ニ付、同地役人共より申越候、右等之儀は如何之御心得ニて、是又先例御用無之哉、各様方御家筋之儀は、当時御直参之筋ニは無之候間、全御心得違之義と被存候、既ニ享保年中被仰渡御座候御書付之趣、当時御忘脚ニて、都て仕来御背キ可被成義哉、左京殿存寄も有之候ニ付、御心得方被致承知度、早々御答可被仰越候、右之趣可及御掛合旨申付候条、如斯御座候、恐惶謹言

三月九日

河田喜平太

坪内嘉兵衛様

三月廿三日

一 今日より本郷方通直し始、妙庵前山東入ル通り九尺之通、夫より兵左衛門浦より秋葉前迄同断御浦御門通り七尺通也、薬師前通り一間通、夫より天神前一間通也、大明神より丈助前鶴松うら九尺余之通也

一 弁天より門四郎前迄九尺之通、治吉前より市右衛門前迄九尺一常貞寺前通り政藏前西東九尺通、薬師前七尺也

御本家御家老河田喜平太へ、御親ミ金として先年御役助金御直ニ旧冬被遣候御駈合、再答御差出左ニ、平島ニて下書出来、三井表へ順達

然は二月十五日附御剪紙ニ御申越有之候金子貳拾四両之儀、左京様御直ニ差上候儀は、全御親ミ厚統を以差上候事ニ御座候、左様御承知宜御申上可被下候、且拙者共拝領高六百石宛之儀は、御承知之通、慶長年中、別て寛永二年御朱印一紙連名之通り拝領高ニ御座候処、去ル末年三月中寺社御奉行所ニて全分家ニ無相違趣、河田政右衛門并拙者共家来之も被仰渡、其節政右衛門より書上ケ候書類、御奉行所ニ御預リニ相成居候間、其筋へ御尋有之方模通りと存候間、可然御申上可被下候、右再答如斯御座候、以上

四月

御三人様

御名

一 夫喰手当被下ニ相成候ニ付請書

御請奉申上候覚

一金六百目

右は困窮之者共之御夫喰御手当、格別之思召を以被下置、難有仕合奉存候、然上は無高下割府仕、頂戴為仕可申候、以上

天保八丁酉年

四月十六日

組頭 新左衛門印
同前 兵 助印
庄屋 和 吉印
同前 竹右衛門印
同前 市右衛門印

御地頭所

御役所

外ニ

御奥向御思召有之候ニ付、極困窮之者共へ御台所ニてかゆ被下候、人数貳百拾人切手出し候、老人ニ付老合ツ、積リ、并村方義石取扱候者共ニ石数改置、四石御引上、困窮之者共貳百人之上下付被下相成候事

一 北島村より本郷へ送り米、尾州宮田村よりむりニ舟のり下しニ付、添書を以申出候事

小弥太儀北方御役所へ十八日添書出し候処、返翰左ニ申来候、白木扶箱入

加藤才右衛門
水谷万右衛門

御剪紙致拜見候、然ハ尾州領宮田村之者共相手取、其御知行所金右衛門初五人之者并当米出入之儀ニ付、訴訟書為御差出候間、委曲承取可申上御紙面之趣致承知候、右ハ宮田村之もの共手前相糺、否從是可申達進候、此段可得御意旨、石川小兵衛・馬場九八郎申聞、如此御座候、以上

四月十九日

水谷万右衛門
加藤才右衛門

山本小弥太様

(天保七年)
去六月より尾州様より木曾川通桐木猿尾御普請御座候ニ付、未年之寺社御奉行所之被仰渡候儀も有之、前一紙連名之 御朱印

之儀も有之ニ付、前渡村左京様御知行所と申候ニハ、右御普請請負之調印は御断申上候様、節々笠松表罷出御掛合御座候処、当六月ニ相成又候右之段、朔日嘉兵衛様郡代御見ニ掛り、御片書之儀御知行所へ被仰付候ハ、さかい立候様、せりかけ笠松堤方赤生伝治郎殿・戸沢助太夫殿より日々せり込候処、嘉兵衛儀病氣ニ御座候間、御用之筋は家来へ被仰付候様、未年寺社御奉行所ニても家来ニて御用向相濟候儀故、家来へ御用被仰付候趣申候処、いつれニも嘉兵衛様御目ニか、り度候、只今迄も御家来御差出しニ相成候ても一こ片も付不申候付、御用之儀差支ニ相成候間申候ニ付、弁次四日之日延致し引取候、右四日小弥太罷出、主人嘉兵衛儀病氣ニ付、御用之趣何候様被申候、右ニ付追々申上候通り、御普請所は左京様御知行所ニ無違御地所ニ候処、前渡村は嘉兵衛知行所ニ候間、右之地所ニ左京知行と相認候てハ、嘉兵衛知行所うしなう道りニ相当り候儀ニ候間、前渡村ニて請負候儀ニ候ハ、坪内左京知行所坪内嘉兵衛知行所百姓庄屋請持と御認メケ又は、寺社御奉行所被仰出候趣儀御立被成候か、御朱印御立被成下候ケ、願候趣申候、いつれニも先番より御本家五千五百石役高ニ候間、加兵衛知行所と申儀相成不申候と申候ニ付、いろくくと申日延致候内、弥々江戸表へ罷出御訴訟之上ニて、百姓共へ調印可致候儀は申上候と候処、五十日之日延之外出不申候申候ニ付、右ニて請書と迄相成候処、又候内意ニ、いつれ之通ニ江戸表へ御出ニ相成候ハ、此儀六ヶ敷候間、いつれニも先々調印被仰付候方可然、猶又郡代善之丞

儀御勘定奉行組頭被勤候間、右方御談なされ候ハ、いつれ御本家へ御出御願立ならてハ相成不申候間、其上御勘定所より御沙汰御座候ハ、何時ニても認替可仕候間、いつれニも御濟しケ儀先々嘉兵衛へ被仰上候と申ニ付、又日延致し引取申候処、いつれニも御断申上候と申し候も、今日はいよく御治定ニて成ケな「」ケと申候ニ付、御日延願仕、江戸表へ何之上と申候ハ、又内意ニて、右は享和元酉年ニ出入之書付も御座候故、戸沢之差図と被仰、本家家来と御相談ニて、下切村ニて調印致候様之御相談ニ被成候、又表面は前渡村庄屋市右衛門儀病氣ニ付此節後役相勤申候者も無之ニ付、下切村ニて相勤候趣、新加役人より届御座候ハ、此方ニて取計申候と申内意ニ付、八日小弥太新加納陣屋へ内談兼、戸沢助太夫殿之便ニ参り、只右衛門へ内談候処、下切村承知候ハ、宜敷候間、御持「」下候ハ、下切村呼出し申付候上御答と申相成、右ニ付下切村は新加納より利解、前渡村は当方より利解申付、右之請書認メ差出候、村方は享和書付取扱元々へ仕候答ニて、下切村ニて請書調印仕、前渡村ニ相掛り候儀は無之答ニ仕候、新加納請書村方より左ニ申入乍恐書付を以御請奉申上候

以前之立戻り、右前渡村之引請来候場所下切村ニ納得之上、御普請其外水防等迄引渡し申候上は、以来村内ニおゐて聊故障筋無御座候間、依之御請証文奉差上申候、以上

天保八丁 西年六月
庄屋 市右衛門
和 吉
組頭 兵 助
新加納 御役所

前書面之趣村方より奉出候ニ付、当表ニおひても故障筋無御座、可然御取扱御座候様致度、依て奥書調印差出申候、以上

坪内嘉兵衛家来
山本小弥太
口上之覚

一 今般前渡村請御普請場所、此節庄屋市右衛門病氣ニ付差当難相勤、依て下切村庄屋長兵衛・組頭忠三郎へ兼滞之儀、本家役人より申立候通相違無御座候、私ニおゐても承知罷在候故、此段以書付奉申上候、以上

西六月十一日
坪内加兵衛家来
山本小弥太印
笠松堤方 御役所

右相濟候ニ付、郡代柴田膳之丞殿へ
とちうつむき宍代志向式朱
堤方戸沢助太夫殿へ看代三百正

同断赤生伝治郎殿之三百正
小弥太御礼廻り使者相勤
六角屋幸七へ式朱遣
六月廿一日
一村内悪病流行ニ付病除として、御屋しきニて大般若若少林寺和尚御勤、右ニ付村方庄屋・御出入之者、志之者有之候ハ、参詣罷出可申候様、申触出し候



御家来之銘々、志之者有之候ハ、家内ニ至り候迄参詣候様、申触置候
一 大般若持人足七人少林寺遣ス事
一 かさり餅三升附候、式升大餅二つ取、宍升小もちニ取
廿一日

一 大般若御執行、少林寺和尚様御出、納所僧老入、外六人ノ九人、又外桃春院・下切村宝林寺、知貞儀御勝手御取持仕候

献立
經前茶漬 香物
碗ふた 水こんじや
あけ物
しうか
大皿 茄子あけ
からし
飯汁 とうふ
坪 松茸
青こんぶ
平 大したけ
わらひ

猪口さき、さ すあへ 白瓜 茶わん（茶こんぶのり）
台引浅草のり かし（まんじゅう）
へき餅あけ 干かし

鈴木藤右衛門殿 斧木市藏

一 右御布施之儀は文化八年之頃例も有之ニ付、和尚様へ内談致し、其節之ふり合ニ取計申候等ニ相成、僧中へ金貳百疋、少林寺へ遣ス、右寺ニて取計之筈相成候村方へ廻文出ス

以切紙申達候、然は大般若御執行相濟候ニ付、明廿三日御札等御下相成候間、頂戴ニ罷出可申候、以上

六月廿二日 御役所

三組 庄屋 組頭

御出入之者へ

以切紙申達候、然は大般若御執行相濟候ニ付、明廿三日御札御下ニ相成候間、銘々頂戴ニ御出可被成候、右之段得貴意如斯御座候

山本小弥太

永井兵三郎殿
宮川孫市殿
長瀬勘六殿
村瀬半左衛門殿
金子作右衛門殿

外 後藤万藏

御札致拝見候、然は去ル末年より拙者共并知行所百姓共大割銀差出不申趣ニ付、去秋中御申越候處、惣代共より帳面為見不申候故延引ニ相成候段、去ル十月中得御意候ニ付、新加納支配人共御尋候處、右□家来共為見置候之共出銀不致ニ付、追々掛合有之候處彼是ト申延、今以差出不申、差支ニ相成候旨被相届候由、右大割銀之義は、御本家始拙者共・分知方并村々百姓共より高掛割当致来り候先例ニて、右は木曾川通堤普請・用水凌・其外共、先規仕来之入用拙者共并知行所百姓共差出不申、塘普請其外差支ニ相成候間、拙者共銀分ハ勿論、百姓共出銀共取立、早々新加納陣屋ニ差出可申旨、右故障筋申立、出銀不致候ては、若シ高役相勤不申心得ニ候哉否、早々得御意候様、御申越之趣致承知候之共、先達て得御意候通り、大割銀微細帳惣代共より写し差出不申、大通りより之帳面而已持參致為見候之共、高計り致一覽候ては相分り不申ニ付、微細写し帳之義新加納陣屋支配人共へ家来共より為掛合置候之共、今以差出不申候、分厘毛払迄之入用先キ相分り候微細写帳、早々差出候様御申付可被下候、致一見勘考之上御答可得御意候

一 御用向之次第ニ寄、拙者共之役之者共より及文通来候處、近來右文通直宛相断候如何之訳候哉、先年より仕来候義ヲ相用不申段心得違之事ニ候間、仕来り心得可申旨御申越候之共、古

来仕来と申は、公迎格別之御用向キ之義は、御本家御直名ヲ以拙者共宛ニ被仰下候古形ニ御座候處、其義無御座、都て御取扱向キ輕々敷相成申候、先達て寺社御奉行所へ家来共御呼出之節々、寺社役中より家来共宛ニて御呼出し御座候、是等之処御勘考可被下、拙者共へ直當ニてハ不申来候

一 公儀御触事、先年より御本家并拙者共知行所・分知方とも一同、新加納陣屋より一紙廻状を以触来、村役人共之申付置候由ニて請印不致候段、不埒之趣キニ候旨、左京様被 仰付を以触候義ヲ不相請村役人共、其儘ニ差置候ては難相濟ミ、公儀御触書左京様より御触無之時は、拙者共始メ知行所百姓共何方承知可申哉、此以後とも承伏不相成哉否、可得御意旨御申越之趣致承知候、右キ御触事御請相拒ミ申候筋ニは全ク無御座候、御触事新加納陣屋より申来候分は昨今迄も無滞承知罷在候、何事ニよらず御触書都て拙者共之屋敷ノへ御申越被下候之共、知行所百姓共之ハ地頭所より不洩様触為知可申候、以来之義は知行所之分ニ拙者共より為触知候様御取計可被下候、当□左京様御代ニ至り新規ニ被為違候義無之、先前より仕来通り処、近來拙者共追々故障筋申出候ハ如何之心得ニ候哉、委細御報ニ可得御意旨、御申越被成候趣致承知候、近來拙者共 拝領知行所之義持下と御唱へ被成候義は新規ニ無御座哉、御勘考可被成候、且又御触事拙者共より為触知度段申立候筋ハ、去ル末年寺社 御奉行所ニおゐて、拙者共義ハ分家ニ相違無之公迎何所迄も分家之

御取扱ニ候間、右之心得ニ罷在候様被 仰渡候儀ハ、御本家も御承知之義ニ御座候、左候之は御触事等銘々被 仰下候上、知行所へ為触知候筋ニ相当り候義と存候、此段深く御勘考被下候、可然御取成御申上可被下候、宜頼入存候、恐惶謹言

六月 御三名
河田喜平太様

七月十一日北方御陣屋へ手紙左之通り相認メ申遣ス、白木状箱入、上

北方 御陣屋	坪内御名内
役人衆中様	山本小弥太

一筆致啓上候、然は昨九日夜当知行所百姓勇八・栄藏・清兵衛、右三人之者御普請場所桐木猿尾へ立入候儀、其御許様御見廻り御役人様御目ニ留り候ニ付、御糺之上庄屋市右衛門方へ御立寄、右三人之者同人へ御預ケ被 仰渡候趣、依て村役人共より始末届出候間、早刻右三人呼出し一通り相糺シ、御普請場所へ立入候段不埒之至候、吟味中答申付置候間、此段御承知可被下候、右之段得貴意候旨被申付、如斯御座候、恐惶謹言

七月十一日 坪内嘉兵衛内 山本小弥太
北方御陣屋 御役人衆中様
天保八酉七月十一日、少林寺庫裏屋根瓦葺差替入用割合、三井表より手紙ニて申来候

以手紙致啓上候、残暑之節御座候之共弥御安全ニ被成御勤、珍重奉存候、然ハ少林寺庫裏屋根瓦葺候代金御割合之書付、平島表より順達ニ付、尚又致順達候、御落手可被下候、此段得御意度如斯御座候、以上

七月十一日
覺

一 庫裏屋根瓦ふき候代金左ニ申上候

一 加わら 葺師

一 手伝 飯料作料共

ノ惣入用金貳両壹分貳式貳分五分

右之通りニ御座候間、御割合被下候様奉願候、以上

酉七月

平島様

御役人様

三井様

御役人様

前渡様

御役人様

御一ヶ所御出分

金三分三宋三匁三分五厘

少林寺

納所

山本小弥太様
安中弁治様
要用金子入

野々山内匠内
河村曾左衛門
石黒宇左衛門

二月五日御認之貴札当十五日相達致拜見候、向暑之節御座候處、各様愈御堅固可被成御勤仕奉珍重候、然ハ桃春院道賢和尚御事、

候、依て奥書調印仕奉差上候、以上
北方陣屋より使、白木状箱上書左ニ

坪内嘉兵衛殿御内 本杉為三郎手附
山本小弥太様 吟味方 鈴木松三郎
小川八十次郎

一 八月四日出、七日平島様より山ノ脇村へ向参り、庄屋市右衛門方へ届候、八日当方へ届出候、北方より再報左ニ申来

一 御再報致拜見候、去月九月夜御知行所前渡村百姓勇八外兩人之者、桐木猿尾之立入殺生罷在、右際ニ石籠之竹折取束有之候ニ付、何故折取候哉と相訂候處、困窮之余焚物可致と無何心折取候旨申立、右村庄屋市右衛門参り合候ニ付始末申聞、右竹一束ニ致させ封印附、同人之預ケ候儀ニて、勇八初三人之者預遣候と別段申渡候義無之段申進候付、御訂有之候處、困窮之余り殺生ニハ罷出候之共、右竹を焚物ニ可致と申候覺脚無之旨申立候由、且東竹市右衛門之預申渡候處、御知行所百姓折取候儀ニハ無之候間持参いたし候様、拙者共之市右衛門申聞候處、何れニも折を以当陣屋之呼出候趣申渡、前渡村にて折取候訳之上相分候迄預ケ候旨、左も難出来候ハ、前頭勇八外兩人北方之召連可申段申渡、東竹封印附ニて預候旨申立候由、御申越之趣致承知候、右ハ拙者共尋候節ハ最前御懸合および候通相答候儀にて、

去々未十一月十一日被致死去趣被仰下、扱々御氣之毒驚入候儀ニ御座候、右ニ付後席不相定、御法類中御参会之上御評談被下、此節飯僧被差出、後住之儀は猶又御差図可有之旨、村役人中より被申出候由、委細被仰下候御書面之趣、彼是御面倒之至忝次第奉存候、猶此上之趣可然御差図御相談奉願上候、右死去ニ付桃春院御靈前之香奠金貳百正被備并例年差送候盆中水向料金百正、今便村役人方之向相預差送候間、猶又御含置被下、御取扱被下候様奉願上候、右貴報可申上如斯御座候、以上

六月十五日

河村連十郎

石黒宇左衛門

岩田五太夫

山本小弥太様

安中弁治様

七月十二日岐阜井上糺右衛門より相届申候

乍恐御請申口上覚

一 今般西組卯兵衛・東組兵四郎、私共右兩人之御眼鏡を以組頭役被仰付、難有仕合ニ奉存候、依之御請調印仕奉差上候、以上

天保八丁酉年

七月十九日

兵四郎印

卯兵衛印

御地頭所
前書面之趣、兩人共御請奉申上候通り、於私共ニ難有仕合奉存

石籠之竹御知行所百姓折取取ニ無之候間持参いたし候様市右衛門申聞、且三人共陣屋之呼出又ハ召連候など申渡候儀ニ無之、当人共折取候段申立候ニ付、東竹証提之為市右衛門之預ケ申渡候儀にて、何れも相違之申口ニ有之、勇八外兩人陣屋之呼出又ハ召連候義ニ付てハ古格も有之、容易ニ難申渡筋ニて、且庄屋市右衛門所之立寄候段御申越ニ付、右体之儀無之段御懸合申通候處、猶御訂之上ハ間違之旨御申越、右之通ニ付てハ相違之義も可有之、勇八初市右衛門之預ケ候と別段申渡候義無之旨、皆及御懸合候義御否も無之候間、前頭之趣共今一応嚴敷御吟味、否御申越候様いたし度如斯御座候、以上

八月四日

小川八十次郎

鈴木松三郎

山本小弥太様

猶以御端書之趣承知いたし候、以上

一 北方陣屋へ再返申遣ス筈、八月十八日出ス

当月四日附之御紙面、同十四日平島表より相達シ致拜見候、然ハ先達て桐木猿尾普請之義、宮田浦川筋へ水刳普請御願ニ付、普請中御引渡シ相成、御普請有之故御見廻り有之所、当方知行所百姓勇八外兩人立入候故御見咎、当村庄屋市右衛門御呼立、右三人御預と申儀達出候故、何れ普請場所之立入候儀ハ不届之儀、且ハ尾州様へ為御会謝、右三人之咎申付候儀ニ御座候、彼是行違之儀も有之ニ付、右訳先達て申上置候趣御座候、猶又糺明も可致様被仰下承知致候、右貴報迄如斯御座候、以上

八月十八日

山本小弥太

鈴木松三郎様

小川八十次郎様

右状箱白木也、上書左ニ

北方御陣屋
鈴木松三郎様
小川八十次郎様

坪内嘉兵衛内
山本小弥太

以切紙致啓上候、然は今般木曾川出水ニ付、尾州御用材川面致散乱候処、留木并隠木等為吟味役人中廻村有之段、先振之通懸合御座候間、当方一同御支配下之分えも右之趣相触申候、此段御承知可被成候、以上

八月十六日

大塚茂一郎

河田唯右衛門

加藤辰右衛門様

松原牧右衛門様

山本小弥太様

右廻文新加納返却懸合、平島表より案文申来候ニ付、同御使三井表へ廻ス、左ニ相談成

以手紙致啓上候、然は今曾川出水ニ付尾州御用材流散之よし、依之御剪紙を以御申越有之候、右は先振りと申は円城寺川並役人中より銘々屋鋪え、前々より差掛り廻村之所有之候、此度其從 御陣屋御切紙を以御申越候ハ先振ニ違候故、致開封候之共

及返脚^(マツ)候様銘々旦那被申付候間、左様御承知被下、御剪紙卷通御落手被成可被下候、以上

八月十八日

山本小弥太

松原牧右衛門

加藤辰右衛門

河田唯右衛門様

大塚茂市郎様

今般尾州様流材ニ付円城寺川役所へ文通、先例は無之今度新加納御陣屋へ同所より願有之ニ付、廻文を以申来候ニ付、猶又新加納廻文は返脚致、円城寺へ名々懸合申遣し候様、三井表より^(マツ)文安左之通認メ相談也

一 八月十四日大風ニ付見分、村方住居家三拾軒、外御家米分二軒、

三拾式軒、右之者共へ今渡御手当として金貳朱ツ、被下候ニ

付、廻文を以三組庄屋・組頭呼出シ相渡候、請書左ニ

御請奉申上候

一 去十四日大風ニ付、潰家三拾軒之者共へ御手当として金貳朱ツ、被仰付、私共おろても難有仕合奉存候、右之通割渡し可仕奉存候、依て御請調印仕奉差上候

天保八^{四年}

八月廿三日

庄屋

市右衛門

竹右衛門

御地頭所

御役所

組頭

民右衛門

兵四郎

卯兵衛

新左衛門

外 御家米 安中弁治 永瀬席平

右之者へ金百疋宛被下

潰家名前覚

林藏 吉藏 留右衛門 円右衛門 多左衛門 源三郎

勘右衛門 作兵衛 弥九郎 武助 与左衛門 勇八 吉郎治

すへ 市左衛門 彦左衛門 政藏 辰藏 周藏 和藏 波助

喜右衛門 清右衛門 丈助 弥平

北島 与右衛門 弥兵衛 三右衛門

山東 藤右衛門 多十郎

右之外、添家之分ハ数多有之候ニ付、不印置候也

鶴沼宿助郷請之儀被仰出候ニ付、村役竹右衛門より写子下案御

一覽ニ入候、左之通り、追て本紙名古屋ニて出来候、尤一札は

公儀上ル、一尾州ニ、一紙大田役所ニ残り候よし

起請文前書

一 鶴沼宿之助馬之儀被 仰付候、少も我儘成儀不仕、鶴沼宿より

触次第、馬御宿之衆を頼、金子ニて為負申間敷事

一 鶴御宿之衆を頼、金ニて為請負申間敷事

一 人通多時分、馬を隠申間鋪候事

右之条々於相背は 梵天、帝釈、四大天王、惣て日本國中六十余州大小神祇、殊伊豆・箱根両所権現、三島大明神、八幡大菩薩、天満大自在天神、部類眷属、各神罰・冥罰、各可罷蒙者也、起請文如件

天保八年

坪内嘉兵衛知行所
濃州各務郡前渡村

庄屋

竹右衛門印

組頭

宇兵衛印

定使

新三郎印

十一月十五日

一 若殿様御髮置ニ付御両家様御出、御土台物^(産カ)

三井様より銀老朱御酒料

平島様より左ニ

右は松原牧右衛門御一所之御肴献

赤飯重之内被下覚

目録手

一 御肴 一種

一 御帯地 一筋

右は

上臈様え

一 御帯地 一筋

三井 平島 小島市兵衛
松原牧右衛門 岡崎芦庵
安池様 荻谷春貞
右は手紙・鯛添

右は 外 少林寺 くよくの 山本小弥太へ

李太郎様へ 薬師 一重被下

右之通宜敷御披露 可被下候、以上 其外、御両家御供方

霜月十五日 下々迄、茶つ、一ツつ、被下

一 若殿様薬師御参詣、御上臈様御参詣、御供方、鐘持文右衛門、御箱持利左衛門、山本小弥太肩袴にて御供仕候、長瀬席平・同断久 米五郎羽織袴、女中ゆき・御乳母

夫より御内稻荷様之御参詣、御初穂拾二銅二ツつ、

献立左ニ 御奥之御通り夫より

切込見かん 鉢物かまほこ 夫より御飯出ス汁けんみかん ずあ大こん 平長いも 切身くすし

坪みそこんふ 焼物い 相濟後 吸物白み 硯蓋れんこん 井かまほこ 井れんこん

大平れんこん 大鉢ひらめむし 差身ほら 吸物あいなめ 切身こうたけ

御御かし献、御髪置御祝儀として鯛一わ献、弁治・席平よりかまほこ二枚献

(表紙)

天保九年 戊戌年記録 御用部屋

一 正月五日夕酉半刻御安産之事

一 正月十一日御七夜手紙文

一 お岸様御初節之事

一 新加納開帳之事

一 新加納御影前御参詣御供方行例書

一 殿様新貝様へ御馬御世話被遺候御礼書来り從此方御返事之事

一 江戸表之祝書被遺候三井様より御欠合并御手帛認メ方等欠合ニ書状之事

一 尾州北方御役所より去西四月越米一件訳済返書之事

一 御公儀御代替りニ付座頭へ御祝儀被下之事

一 御本家事御祝状出し

一 北方御役所村方願書下ケニ付来状返書事

一 七月六日成光村座頭森之市罷出御願申上候儀、先例之通り 御公儀御代替りニ付、御三所様にて御祝儀願出候様、上加納座頭戸野市之此節組合頭候間、右之方へ御差出しニ相成候ても宜敷と申候、平島・三井様にて此間百疋ツ、頂戴仕候、何卒御当家様にて御同様ニ願度旨申候、右ニ付松原牧右衛門へ問合候

処、同様之儀ニ付、上加納座頭向金百疋使にて持せ遣し候、尤外御用兼遣ス

御祝儀

天保九戌 戌年々中記録

一 正月五日酉ノ中刻奥様御安産、御女子様誕生ハ、少も御催無御座、俄ニゆき女より今夜御出産之由、くのヲ呼ニ遣候様ト申ニ付、直ニ中間甚平遣、尚亦追掛はしらせ春貞えも文右衛門遣シ、

くの御門前迄参り候えは早御出生被為遊候、春貞も罷出、直ニ御血納之御薬献候、其夜四ツ半頃迄春貞居、早々下り申候、御とぎてゆき・るん・かつ、三人替りニ相勤申候、翌日早々御両

家様之為御知之手紙遣、加納えは岐阜行之御序ニ伊藤忠右衛門之向、安池様・永田様之申上具候様頼遣候、御陣屋之御届ケ書御差出席平持参、右等文面左ニ印

御届ケ之覚

一 私妻昨夜酉中刻出産、女子出生仕候、依之来十二日迄産穢引籠申候、此段御届ケ申候、以上

正月六日 坪内嘉兵衛

表なし奉書半切ニ認、折懸上ニ 御届ケ書 下ニ御名

一 お岸様御初節ニ付、加納安池様より之内裏難志対・鯛添被遺候、御奥向へは御文来候、使之者へ目録として百文祝儀被下

一 取揚は、くのより伏見人形二ツ献

一 安池様御奥方様御初節句ニ付、御難二箱にて代金貳分、二月晦日被遺候、三月二日草餅遣候

一 新加納開帳之事ニ付、御三所様御役人之大塚茂一郎、河田唯右衛門より左通申来候

一 以剪紙致啓上候、然ハ百姓共依願 親鸞聖人真向御影当月十日より御披露有之候、依之先例之通足軽式人ツ、当所之御差出被成候様致度、此段得御意度如此御座候、以上

三月二日 大塚茂一郎 河田唯右衛門

一 新加納開帳之事ニ付右役人より来帛、平島様岩塚氏より順達、来翰写

一 以手帛致啓上候、然ハ新加納御陣屋より之廻文志通致順達候間、御落手可被下候、将亦加藤氏より之相談来紙封入致候間御披見可被下候、右為可得貴意如此御座候、以上

三月六日 尚々、加藤氏より之来帛、御披見相濟候ハ、御返却可被下候

一 右ニ付加藤氏より之来翰

一 以手帛致啓上候、春暖之節御座候え共、弥御安全被成御勤、珍

重奉存候、然ハ新加納御陣屋より之廻文巻通到来ニ付、及順達候、御落手可被成候、右ニ付てハ、御参詣之儀先達て御相談可申上奉存候、且又追加ニ被参候案内之義杯も、何れ御参詣前広ニ私共御出会之上御相談可仕奉存候、右等之趣も宜敷御含置可被下候、先ハ此段得貴意如此御座候、以上

三月五日

尚々、本文得意候、何れ何敷御参詣已前品調へ御相談可仕奉存候、何分御承知被置可被下候、以上

一新加納御陣屋

河田唯右衛門 加藤辰右衛門
大塚茂一郎 松原牧右衛門之左之通申来ル
山本小弥太

以切帝致啓上候、然ハ当月二日得御意申候真向御影之儀、来ル十日より御披露ニ付、先例之通足軽式人ツ、御差出御座候様及御懸合候処、同日差支筋致出来候ニ付、引上ケ当月八日より御披露ニ御座候間、此段御承知御取計御座候様いたし度、如此御座候、已上

三月五日

大塚茂一郎
河田唯右衛門

加藤辰右衛門様 松平牧右衛門様 山本小弥太様

追か

御銘々御主人様方御本格にて本文御影前へ御参詣被成候節、御日取并刻限とも前広ニ御沙汰御座候様いたし度候、少林寺境内口より御案内之者差出可申候、此段為念得御意置申候、以上

一新加納開帳之儀ニ付、三井様加藤氏より左之通申来ル

以手帝致啓上候、春暖之節相成候之共御安全被成御勤、珍重奉存候、然ハ平島表岩塚氏より御連名御状到来御座候、開封致被見候、御用捨可被下候、則致廻達候、付ては御面談之上御相談相決候方可然被存候、乍御苦勞明朝当屋敷へ御来籠可被下候、其節万々御相談可申奉存候、右為可貴意如此御座候、已上

三月七日

尚々、荒増し其 御許様御思召御被成、御出張可被下候、当方思召ニハ、先例之通先々取計申候様方も可然哉ニ思召候、余り色々入組のミニ相成り候も如何哉ニ被存候、私連も同様ニ奉存候、深く御勤考可被下候、已上

同七日

一三井様にて加藤氏開封、右之通申来ル加藤辰右衛門様 岩塚東九郎以手帝致啓上候、然ハ真向御影披露ニ付、先例之通足軽式人ツ、指出候様申来居候、然ル処不寄何事先例取計可申哉之段、新加納御陣屋へ申込可然哉ニ思召候、此段御同心ニ御座候ハ、今日中御陣屋へ御連名にて申込可然哉ニ思召候、此段前広御相談可被進之処、寿山様名古屋御出府にて、只今 御帰館にて被仰付候義御座候、右得御意度如此御座候、以上

三月七日

昨夕三井表より手紙来候ニ付、祐左衛門儀三井様出会致し、尤松原御供にて上京致候ニ付岩塚氏出張、銘々存寄之処申合、其

上手紙にて懸合之筈ニ相成、明九日三井表にて本紙相認メ差出ス筈ニ相成、案文左ニ

以手紙致啓上候、然ハ今般真向御影披露ニ付、銘々且那参詣之節、先例御留メ通り不寄何事無相違御取計御座候様被致度被存候、此段得御意置候様被申付、如斯御座候、以上

三月九日

河田唯右衛門様 岩塚東九郎
山本祐左衛門小宗大改名
大塚茂一郎様 加藤辰右衛門

三月十二日

一新加納御影開帳ニ付大塚茂一郎より左ノ通申越ス、岩塚氏より順達にて三井様へ順達申候

御札致拝見候、然ハ御連名を以御達申上候、御銘々御主人方御本格にて御影前へ御参詣之節、日取刻限とも前広にて御沙汰可被成、少林寺境内口より御案内ノもの可差出儀ニ御承知被成候処、右は案内ノもの前渡表ハ稲荷橋まで、三井・平島両所は欄干橋之辺迄差出候先例にて、且又御参詣日取之儀は当日差進可被為御沙汰、是また先振之趣者御申越候条、委曲承知いたし候、然処、御影御披露ニ付申進候廉々は、今般思召を以被仰出候趣にて、江戸表其筋より前書之儀申達置候様御下知御座候儀ニ付、得其意申候間、左様御承知それ〳〵御達可被成候、乍去案内ノもの欄干橋并稲荷橋迄指出候儀、為差事ニも無候間、御頼と御座候へハ拙者より心得を以取計可申候へ共、先振之由

にて御懸合御座候てハ、今度御下知候儀ニ付、去ル五日御達申候様難取計、日取沙汰有之候儀も同様ニ付、差懸り御申越にてハ差支ニ相成候儀も難計存候、左様御承知之上、今一応御申越候様可被成候、右御答旁如此御座候、以上

三月十一日

大塚茂一郎
河田只左衛門
加藤辰左衛門様 松原牧右衛門様 山本祐左衛門様

一同十四日御陣屋より廻書平島表より順達、左ニ

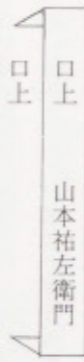
御手紙致拝見、然ハ御銘々御主人方御影前へ御参詣之節、御案内ノもの差出候様及御懸合儀、先例相違之儀有ニ付、御銘々より御達御座候処難得其意御承知被成、御勤考之中番足軽御差出被成候儀御見合被成候段、御答之趣委曲承知いたし、乍去為差事ニも無之間、自分共より御頼申入候と貴様方ニおゐて御取計可被成旨、入御念候儀ニ候之共、御開濟之上御披露被仰出候儀、思召之程不相弁、拙者共より御頼申入候筋無之儀ニ御答候、左様御承知可被成候、勿論右之模様ニも番足軽御出候儀御見合被成候儀、拙者共より難及御挨拶間、御勝手次第御〳〵可被成候、右の御答如此御答候、以上

三月十三日

大塚茂一郎
河田唯右衛門
加藤辰右衛門様
岩塚東九郎様

山本祐左衛門様

一 三井様より御使左藤織衛殿、右は昨日手紙を以内談いたし置候、御参詣之儀ニ付御陣屋へ申入之処も加藤へ内談、夫より平島様申遣候処相訳不申ニ付、猶又今朝使を以申遣し候趣ニハ、平島表ニてハ今日御参詣、前以御陣屋へ申入候様申参り候ニ付、夫より足輕市藏を以左之通り口上書認メ遣ス



弥々御安全被成御勤、珍重之御儀奉存候、然は今日旦那儀御影前拜礼被罷出候間、此段御承知可被下候、已以

四月十一日 山本祐左衛門

御陣屋

御当番衆中様

御参詣御供揃五ツ時相成、夫より御出ニ相成、御供揃左ニ

御対箱治左衛門 御徒士磯右衛門

足輕市藏 同 藤兵衛 御鑓嘉右衛門*

万藏 御対箱利右衛門 同 門右衛門

御侍席 平 佐右衛門 御長柄甚 平

御御駕籠 市 和右衛門 六尺

御箱武右衛門*

同 鎌治 忠四郎 御草履取作藏
半佐衛門 定右衛門

口新 六

御馬 菅籠文右衛門 御茶弁当文右衛門

口又右衛門

*合羽籠利右衛門 押九右衛門 小遣鉞治郎

外ニ白木長持御幕張二張上下弁当入、人足二人

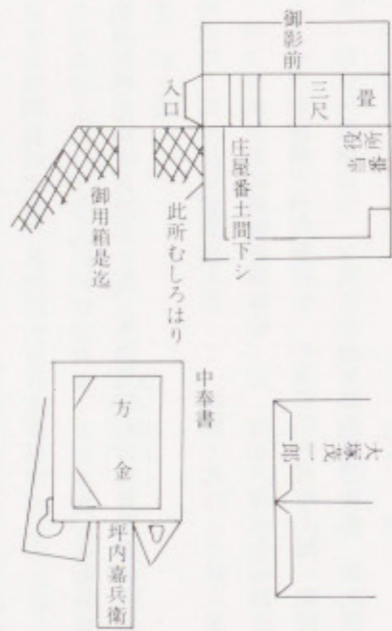
右御参詣相済、少林寺へ御引取、夫より御羽織袴ニて口御見物、小芝居同断

いろはや前ニて御小休、夫より稲荷橋迄御出候処、今た出迎先
弘足輕不出申ニ付、御手人計ニて少林寺御出御座候処、寿山様御先へ御出有之、暫相立金三郎様御出、夫より三井様御出

和尚被罷出、御内々殿様御咄シ之儀は、内輪御入組之儀ニ付、昨日より度々御陣屋へ罷出相談いたし候処、先方ニて申聞候ニハ、先例之通り御三所様より番足輕之儀御差出しニ相違無之儀ニ候ハ、御迎先弘之義差出し可申候間、今一応右之処御懸合候様申聞候ニ付、平島表罷出候処、途中ニて寿山様御目ニ懸り、右之趣御咄し申上候処、今日より番足輕御差出し御座候趣被仰聞候間、右之趣陣屋へ申聞、早速御迎先弘差出し可申之処、少々手送ニ相成、右之趣陣屋へ申通之内御出ニ相成候ニ付、先弘手後れ相成恐入候間、何卒罷出候趣ニて御済シ被成下候様御願ニ付、和尚ニめんじ内輪相済、依之御両家様時刻後候間、御

迎足輕先例之通出申候

一 三井様御先へ御参詣相済候間、御当方平島様ハ御一所御参詣、先弘四人相附、御飯屋之内侍四人・御草履取・御持箱三尺キ戸迄、右より御入、御中小姓一人御刀持御拜礼、御備金一朱白木台ニ載御中小姓より御影前当番へ相渡し、直ニ相備、夫より御歸り、同様御先弘少林寺門内迄付候



以手紙致啓上候、然は昨日は御影御参詣無滞相済、御同意安心奉存候、隨て私共参詣仕候儀先例御座候、一兩日之内相済し可申哉、御相談得貴意候間、御勤考日限御定可被仰下候、平島表へ可申遣候、供之儀ハ若党・草履取り召つれ可申奉存候、右為可得貴意如斯御座候、以上

四月十二日

猶々、兼て一寸御咄申候、芝居裏小屋ニて不行跡取計候趣及承り候、何とか懸合可申哉又は知ぬ顔ニて打過キ申候もの哉、御勤考可被下候、当方之義ハ何れ下も一応相尋度奉存候、少し意味御座候、尤昨日平しま御隠居様より旦那方暫く猶予いたし罷有候様、御内談御座候故、一兩日ハ相見合せ可申奉存候、委敷儀は御面談ならてハ行届キ申聞敷奉存候之共、先々如斯御座候、一昨日御供廻り之儀俄市郎ヲ以相尋候義、御承知被成候と奉存候、此方之穴ヲ申候陣屋ニ御座候之ハ、義理なく先方之穴相尋候方可然敷ニ奉存候、厚く御勤考可被下候、以上
右ニ付十四日参詣致し候心得之返書遣置申候、

一 篠田清六より勇左衛門之宛名ニて左之通申越ス、尤返書認メ四月 遣ス

薄暑之節 殿様益御機嫌好可被為遊御座、恐悅至極奉存候、誠ニ日外ハ新貝より馬之儀被懸御苦勞難有仕合奉存候、其後早速御札可奉申上候処、等閑奉恐入候、此龜紙輕少之至御座候之共、新貝より獻呈可仕旨被申越候付、御序之刻可然様御執成奉願上候、恐惶謹言

四月十八日 篠田清六 名乗書判
山本小弥太様

全寿丸被遊御貴度候付

一 兼松鉄四郎様御内鬼頭治郎助へ幸右衛門より手帟を以頼遣し、

則御掃言誂へ越ス返事左之通

御手帛致拜見候、追々薄暑相催候之共、上々様益御機嫌罷可被為入、御同意恐悦奉り候、扱今般、御祭礼供奉無御故障被為濟、御同前恐悦奉申候、右祝儀之儀御書面之趣、且亦此節其許様ニテ全寿丸御入用ニ付、二米分御貰ひ被成度由被仰遣、則申上候処委細御承知被成、已刻二米分、差上被成候間、御落手之上宜御取計可被成下候、尤右代銀ハ儲落手仕、已刻差上置候、御報迄、早々如此御座候、以上

四月廿七日 全寿丸目方三分五厘

一加納表閏四月廿六日大水ニ付、為御見舞五月七日御書状御差立ニ付、左之通

一筆致啓上候、然ハ此間は大水ニテ、御城下其外之も致入水候由、嗚々御取込可有御座と奉察候、併、御城内御別条無御座、此上之御儀奉存候、一向不存申、早速御尋向可申上候、甚御無沙汰ニ相成失敬奉存候、乍延引右御見舞為可得貴意、如此御座候、恐惶謹言

五月七日

御名

新貝主税様

御書判

杉浦兵左衛門様

右白木御状箱へ入遣ス

公儀御触書

櫛・筭・かんさし・きせる又ハ煙草粉入・紙入・かなもの・其外無益成取之品ニ金銀用候儀停止之旨、前々相触候趣も有之候

処、近來撰ニ金銀具相用并売買致候者も有之由相聞、如何之事ニ候、以來百姓・町人右体之品金銀用候儀決て不相成、主人或ハ出入屋敷等より貰請又は持伝などニ候共、金銀器類一切持申間敷候、右ニ付てハ武家要用之品ハ是迄之通り、其外も武家より洵候分ハ格別、都て金銀具相用品内証ニても措置、売買致間敷候、只今迄商人共仕入候分ハ当年限売買致、来亥年より可為停止候

右之通り之御触

寺社方

御家来衆

村方中へ

別段村方計之相触候事

一 今般、御公儀より嚴敷御檢約被、仰出候ニ付、村内一同表立候家普請不相成、并養子・嫁娶・初客出入成丈致檢約、奢ケ間敷酒喰等之儀不相成、其者親類抱寄組合限り取計可申候、右今般御触之儀格別之儀ニ在之候間、村役ハ勿論、其組之惣代ニテ御請書調印為致、差出可申候

右之趣被、仰出候間、一同箋様相触可申候

五月廿八日

御役所

翰被進候

去西四月尾州北方御役所掛合米一件済候ニ付、返懸成六月廿一日草井村庄屋より届出候

白木状箱左ニ

坪内嘉兵衛殿御内本杉為三郎手附吟味方
山本小弥太様
加藤才右衛門
水谷方右衛門
小川八十次郎

別紙之通御触有之ニ付、新加納御陣屋より参る
以手紙致啓上候、然ハ、公儀御触書別紙一冊ニ相綴致進達候、右別帳末々々条計り、御支配下村々之も一方一同相触申候、右得御意度如此御座候、以上

五月廿六日

大塚茂一郎

河田唯右衛門

加藤辰右衛門様

松原牧右衛門様

山本祐左衛門様

六月十五日

一 平島様御内岩塚藤九郎より左之通申、祐左衛門連名ニテ申来ル
以手紙致啓上候、不晴之天氣御座候処、各様弥御安全被成御勤珍重奉存候、然ハ十四日其御村方三株之もの、内々当方様之願筋有之由ニテ、平島村庄屋取次を以願書差出候処、其、御許様御思召之程難取計候ニ付、先々右願面私預り置候様被仰付、罷出候ものは御戻しニ相成候、此段御直ニも被仰上候之共、私よりも各様迄一寸得貴意候様ニとの御事ニ御座候、御思召之程一報被仰聞為可被下候、右迄如此御座候

六月十五日

右即刻返事ニ、御書面之趣致承知、後刻参上可仕旨申遣ス、直ニ祐左衛門罷出申候、尤寿山様より、殿様之御直書参ル、御返

以剪紙致啓達候、其御知行所濃州前渡村金右衛門外三人之者共より尾州宮田村定藏外七人之懸り候積下米出入之儀ニ付、去年四月願人とも御指出、御申越之趣致承知候、然ハ、其頃当方穀物締筋之儀領内之申渡之趣も有之候処、右積下米怪敷次第も有之、尾州草井村より積出候背米之見込を以取改、定藏始之者ともより訴出候付、米之儀ハ締り申付置、右一件兼て吟味中ニ有之処、猶更金右衛門始願意之趣を以、定藏始之者共并願面ニ相見候船人草井村久四郎・外乗組同村久治と申者をも相訂候処、夫々申立行違候訳等も有之候付、一往其筋之も指出、段々吟味有之候上にてハ、久四郎・久治右荷船積下方之始末彼是不審敷訳も相聞、未取調中ニハ有之候之共、右米之儀ハ北島金右衛門より前渡村紋四郎之之送り米ニ有之との願面ニテ、久四郎・久治を以ても同様申立之、右ニ付てハ吟味勘弁之品も有之候ニ付、先々右米締相解、送り主金右衛門之指戻候様、宮田・草井両村庄屋共之可申渡旨、其筋より申聞有之、則申渡候間、金右衛門より

右両村庄屋とも懸合、此節米可引取旨御申渡有之様致度候、且又定藏始最初右積下米取改主意候全前書之通にて、於場所承訂候上も答方等疑敷存取、訴出候儀ニ有之、尤前渡村之村シ聊意趣遺恨等指合候儀にてハ曾て無之旨、并久四郎疵受候儀も吟味之上にてハ、打放候儀ニハ無之、相互ニ論合、暫出水之砌、旁船具等手送以取廻シ候付、定て右船具当り候儀ニ可有之旨、一同申立候、乍去右始末双方とも不束之至ニ付、是等之儀ハ追て糺品可申付と存候間、右之趣金右衛門始之者ともえも御申渡候様存候、仍最前指出候願書ハ先々預り置申候、此段可得御意旨、本杉為三郎申聞如此御座候、以上

六月廿日

小川八十次郎
水谷万右衛門
加藤才右衛門

山本小弥太様

右手紙尾州草井村庄屋持参也、穀物一件追々御勞苦願仕候處、昨十九日北方御役所へ御呼出して被仰渡候、右御札旁参上仕候旨申、白木状箱出ス、請取之儀申候ニ付相認遣ス

当番当

永瀬席平也

六月廿三日快晴

一 山本祐左衛門穀物一件落着ニ付、北方御役所之御挨拶、手附吟味方三家之金貳百疋宛差遣申候、然ル処郷宿にて村役人御礼ニ

有之候、恐々謹言

七月十二日

坪内左京

坪内太郎兵衛殿
坪内金三郎殿
坪内嘉兵衛殿

一 筆致啓上候、然ハ公儀 御代替ニ付、御達書相認差出可申旨、其砌書役之者之申付置候處、今度問合御書状之趣ニ付、則役懸之者相糺候ニ付、追々穿鑿之處、差出候心得ニ候之共、全惣封致候節取落ニ相成、書役詰所にて尋出申候段申出候間、敵敷申渡置候、依之此段及御断候、右可得御意如斯御座候、恐惶謹言

七月十二日

河田喜平太

坪内太郎兵衛様
坪内金三郎様
坪内嘉兵衛様

一 九月五日定例宗旨証文新加納御陣屋へ御差出し、并治持参、御文言左ニ

覚

一切支丹宗門從前々無懈怠今以相改申候、先年被 仰出候御法度之趣遂僉儀候處、家来并知行所百姓切支丹紛敷者無御座候、依之銘々寺請証文取置申候、若此以後怪敷者御座候は早速可申上候、為其仍如件

天保九戊戌九月五日

坪内嘉兵衛印

(花押)

差出、一札之儀相尋候處、御地頭所よりも奥書致候様申ニ付、翌朝庄屋代宇兵衛差出候趣申談候事

同廿四日快晴

一 北方御役所之御札、最初差出候願書下之儀書付ヲ以差出、文言左之通

差上申一札之事

一 去夏穀物一件ニ付奉願上候處、早速御開濟被成下、此度御裁許被 仰付候ニ付、則宮田村にて右穀物詰ニ請取申候、御慈悲之程冥加至極難有仕合奉存候、尚又、最初奉願上候願面御下ケ之儀奉願上候、右御札御願旁奉参上候、以上

戊三月廿四日

前渡村庄屋
宇兵衛印

前書之通、村方より御札御願旁差出申候間、可然様奉願候、以上

御名御家来

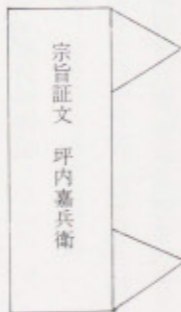
山本小弥太印

一 江戸表御本家御直御返翰御三所様御連銘一通并喜平太より同様左之通り

来札令披見候、然ハ問合之通、先般 御代替方端無御滞被為濟候間、其旨承知可有之候、御朱印御書替等無之候、右承知可

坪内左京殿

宗旨証文 坪内嘉兵衛



一 九月六日江戸表河田喜平太より御三所御連名之御状并新加納御陣屋より御触書共、平島表より順達有之、左之通り

御札致拝見候、然ハ公儀 御代替之砌御達被申候書付差進可申旨、被 仰越候御紙面之趣致承知候、則其節封落ニ相成候別紙一通差進申候、御落手可被成候、右御報旁如此御座候、恐惶謹言

八月廿二日

河田喜平太

坪内太郎兵衛様
坪内金三郎様
坪内嘉兵衛様

此度 公儀 御代替并 將軍宣下 御転任 御兼任、御規式万端首尾好被為濟候、依之、公方様御儀 大御所様と奉称、内府様御儀 公方様と奉称、大納言様御儀 右大将様と可奉称候事

九月六日左之御触書平島様より来
一 西丸御普請ニ付、尾州殿領分濃州・信州山々より檜御用材木伐出、角材・丸太・板子・横・檜木共、一同熱田白鳥湊迄川下ケ、夫より海船之積入、江戸表之相廻候ニ付、右場所々より付知川・川上川・白川・萩曾川・王滝川・飛騨川・木曾川通、夫より佐